淨瑠璃評判記

演劇研究会編

上

集

成

F

例

一、本書は演劇研究会の共同調査による演劇資料の第三冊である。

一、本書出版の動機は祐田・吉永の筆写した十幾種の浄瑠璃評判記を倉田喜弘氏、

武田俊雄氏、吉永がプリントにし、整

理したことにはじまり、今回これを印刷するに当って更に広く資料を集めた。

一、浄瑠璃評判記集成上は延享三年から宝暦末年までを収録することにした。

一、校訂の方針は出来るだけ原本のままとした。

一、本書の翻刻資料については、豊竹山城少掾、細川景正氏、天理図書館、日比谷図書館より多大の便官を与えられた。

一、本集の原稿作製および校正は主として、奥村、信多、土田、角田、松平、山根、山本、祐田、吉永が担当した。

深く謝意を表する。このうち豊竹山城少掾の原本は戦災で焼失して今は原木を見られないのは惜しみてもあまりあるこ

とである。

	角	評	新	竹	操	很	操	猿	
解	<	判	評		西	浪のうねり鼎噂	曲		
		花	判	0	東	Ŕ	浪	口	
	む	相	蛙.		見	見	花		
説	蘆	撲	歌	春	臺	噂	芦	轡	
i		:		:			:		
÷	:		÷	:	:	:	÷	÷	
÷		•	:	i	:	:	÷	:	
:	i	:	÷	i	:	:	:	:	
:	•	:	:	÷		:			
			•				:	:	
;	:	:	:	:	:	:		÷	
		•	•	:		:	:	:	
:	:	:	:	:					
		•	:	:		:	:	:	
:		:	•	•			:	•	
÷	i	÷	:		:	:	:	:	
:				:	•				
		•	:	÷	:	:	:	:	
:	•	•		•		•	•		
:	:	:	:	:	:	:	:	:	
•		÷	•	•		:	÷		
:	•	:	:	•	:	:		÷	
:	:	•	•	•		:	÷	•	
:	÷	•	:	:	:	:	•	:	
:		:	:	•			:	i	
÷	:	:	:	:	:	:	:	:	
:		:	÷		:	:	•		
:	•	:	:	÷	:	:	:	:	
:		:	•	÷				:	
:	i	:	•	:	:		:	;	
:		:	•	•		•			
	•	•	:	•	•	:	•	÷	
÷		•		:					
		•		•	•	:			
					:	:	:	;	
九	八	セ	六	六	四	四	=		
九五頁	八六頁	七七頁	六九頁	六一頁	_ 六 頁	○頁	九五頁	頁	
<b>y</b> •	只	54	Я	风	只	只	风	风	

内 容 目 次

口

部

全

猿さ

口分

縛わ

卷

第四

結城孫三は御旅所

寄り合ふた浪人衆ノ俄

百分はねた松風の

新芝居は春祭

縫すぼめられぬ人の口 時に合ふた着る物の綻

五分かつた道具立ての

かざり物

恋男に逢婬日持 用水の堤から堀出した

第五

こひ女房箕笠着て

もうつくしいしろ物

猿さ 口分 轡ゎ

甲氧

仲ノ芝居は夏祭

縫つぶされぬ人の目 文句に合ふた帷子の綻

六分かつたあやつりの

たて物

全

天の浮橋下照ルや 陰神陽神の唱え初ょしむまし男女の睦言は国の道ドナス ハガミラ キナス カー・ナス スッコト へッコト (後足日持) でしい男に逢姓日持

宣留とて家留万くらからず吾妻に武名鷹の羽の弓取一人おわじます/メードロミ)(ミロ) というには、これによりのは、これになって、これにないなりて代と永く今に終せぬ教也衆に東国の長者号色加和逢膳猶人の道殊せの道のおのづから和らぎのする嶋台にかの二神の友白

猿

辰松は跡の祭

十分かつた太夫の 縫ふさがれぬ人の耳 間に合せた古物の緒で

まれ物

世継に立べき男子はまだ十八の縁の月代面長ならず丸からず背ィ高 からずひくからず鼻筋通ッて桜色黒めがちなる目の内に逢をもつた

キック の見を持めてに錦の袋をたづさへこつぜんと顕れイカニ宣留汝が誠(音) 、 方出迎給い早、との御下向殊更御機嫌麗しき御顔持吉事ならば早、方出迎給い早、との御下向殊更御機嫌麗しき御顔持吉事ならば早 と恋病に針灸薬の術もつき諸社の奉幣諸山の祈名僧俗油の加持力に乳根のてうあいなゝめならざりしが秋の末より常ならず只ぶらく~ 神託に引合せ工夫せんとの給ふにぞ北,御方生出し心地付この女中 じやらごと成共聞た上で判談し忰が病気本腹の手筋にも成こと有ば 或は又下~の取沙汰見たり聞たりせし事共一~身に聞しめさ譬へあ 教有がたいと悦びめさ歎く事ではおりない病人の是迄に言しぜんご れ矢つきて賜るなれば錦の袋の内は絃斗躮が病気本腹の弦を賜る神 にと言に弓は折れ矢はつきたりと有て錦の袋を我にあたへ給ふ弓お の政夢」でき、背より其ためしすくなからず今日某が見しは神勅いか 実の夢も有ばこそ夢にだも周公を見ずと文宣王の古語有又神がゝり なれ共石流は女惣じて夢はしんきの労より出る偶然の事と云へどもザネガ て本ぶくの的はない明らめよとの告ならん扱は神のお力にも叶ぬ事 方暫く考へ自に力落させまいとて空言なの給ひそ弓は折っ矢もつき の心をかんじ此袋を授る也弓は折り矢はつきたるぞとの給ふと夢覚 駕の中ヶとろく〜まどろむ夢心衣冠正しき老翁ゆん」(ごう) 手に折た 艶の丞が不死難治の二ッしめさせ給へと七日指の今日満願帰るさのサンチャンチ 吾妻の明神へ一七日の御願望殿の御下向候と夫レと呼次ク奥御殿北 も更に験の見えされば父母余りの物うさに神を頼ばされどもと氏神 る美男石透とほる」(ニャ)との心から艶の丞と幼名をすぐに用ィて歯 たり是則翰が病気本腹の神教目でたいく、悦びめさと有ければ北、

> 思はる、私。にちよこく〜おつしやるは去年の秋の大水にお屋形の のこらず傍へ呼集、少しのことに至る迄聞た事見た事あらば包ず申 せと仰の下乳母が差出て「ミッ)口たんばく若殿様の煩は恋路の闇と

らぬ様でにうががにうの尋ね物まづ法恩寺へ使者を遣りよそながら まみ喰死だ跡迄はぢの恥御二方は扨置歯ぶしへ出すなとお口留去ね 内に御普請出来お屋形へ御帰り大名の子が有まじひくいばなしのつ 御家老衆へ内証でおつしやるすべも御ぞんじなれ共互にふつとの出 呵物の能聞せた是則本腹の絃響へ士民匹夫の娘にもせよ躮が目にさ共も知ながら艶之丞が我とに恥入て口どめをすれば迚隠し包ふ届と 耳へでも」「四\*)入レぬ忰が命取留、たく朝暮心をくるしむるを其方 と身がまへ言を宣留公隠すも事と品よる左様ノ事を是迄になぜ奥が(音) 母上御両所へかならず言なとお口とめ明神様の神詑で御本腹の手が しはねつにうかされてのうわことか若又じやうのこと成かと根を押 見初った人恋しいなつかしいとのお歎きなれ共寺に女はないはづ但 こらず破損して御普請成就の其間御ぼだい所法恩寺に御かり住其時 て当どがないとしんきがる宣留心を痛め給ひ手懸りになる様で又な んの秋の大水に法恩寺で馴染たお市く~と尋ても雲闇の夜の空つぶ をさん乳母とくと尋て参れサア気の毒はそこの事名所が知ったれば 部やに直ん恋病にする杯とは大名の子に似合ぬちいさき根生シテ其 て聞ませ共お市と言名を聞た斗互に所を語ねば尋逢ん様もなし父上 合頭お市と言名を聞た「四2)斗こつちのお名もおなのりなくつい其 女は何国の者人の娘か召仕かふ義の筋にさへ有ずんば引上て妻にな へ入ならば一生詠る花嫁に呼迎ん夫迄もなく家老共へ申付抱させて 、りと御意のおもさに申ますお呵ならばよい様におわびこと遊して、

じやしづまれシィー〜とせいせられて二親も土に喰付位居たる宣留わなんぼ位ても叶ぬ〜〜邪广なのきやれと口こわめくを役人共御前 年からは堤の切る程雨はふらず三粒ふつても堤の切るは 村 にい」 ぐわんぜもなしにした事を御りやうけんはなさらひでお殿様迄引出 寄先に立うせい/\とつきすゆれば父親母親めを泣はらし手に取付 姓共十五六なる娘の箕笠着たるを其儘に荒縄にてぐる/~巻名主年 さはがしく御手永の百姓共御そせふく~と呼はれば百 姓 共 の 訴」 が天下一統の極た御法村中ずいぶんめをきかし方吟味にとらまへよ や堤を切。やつはとらへ次第お上へ顕簀巻にして堤の切。所へ埋。 て田地へ水があふれます故替つた事じやと村中が寄合評判しても去 ついで築立ました用水の水除堤雨のふる晩といへば三間宛堤が切り す去年の秋の大水出た跡でお殿様からお金を下され村中が夜を日に くまり私らは御手永の百性共砂村の名主出九兵へと申者でござりま はるかに御覧有ヤァく〜汝ら先へ通りを言聞せよハット名主がうづ 手を合せあなたこなたを拝み廻るをつき飛し 〈〜内証 で 済 事 な」 わしら夫婦ぞんぶんに成ましよ娘を助て下され後生じやじひじやと レ名主様了簡してお下ヶねがふて下はれ慈悲じや情じや腹がいずば して命を取とは情ない高が子共のいたづらも同前でござるわいのコ れく〜の役人共相並゛訴詔人出ませいの声に随ひどやく〜入来゛百 ならば何としてかわ尋んと千々に思ひを寄給ふ折もこそ有い御門前 尋見よ檀中ならば知れもやせん若外よりの水押にてさまよひ来、者 (\*\*\*) しゆの有やつが仕業には極つた用水の水を姿か樋をぬくか畔 聞捨られず心済ねど一通り聞得させんと記録所へ出給へばそ

の秋の大水にとつさんの家は流ったのみ寺恩法寺の寺中にしばし」はづかしながら聞て下さりませ村のお衆へねたみ恨は更くなし去年 なふては叶ぬはづ有様に言て聞せとにうはなる仰に物も言よふて御 うし何と言頼人はない心から出た事と言か其方女の身として村中に 留公もしやと思す御眼色御次の間にもひそ く〜と障子にうつる影ぼ(言)から仕ました事でござんすと塵炭付ぬけなげの白状お市と言名に宣 同断不敵成女耕業をさまたぐる者は死罪一統の古法有女の身として いしゆゐこん有ふ様なし何故雨降夜なく~堤を切には出たるぞ子細 娘は漸額を上年、十六名はお市と申ます頼ても何にもない皆私が心 ぬぞ人別帳が爱に有と」でき、先ぐり言を役人に呵られてすつこめり と母親諸共すゝむれば名主が傍からコレ年は十六十三四とはいわさ 出たら命助てやらふとおつしやる年も名も有様にわれが口から申上 頼人が有ふとお御意片意地にかくさずと言てくれ出してくれ頼人が がしに情のこもる御仰ぐつろべ夫婦這出てアレ聞たる娘お殿様さへ かゝる仕わざ定て人に頼れつらん有様に言聞せよ頼人出なば命は助 づめさせて下さりませと口を揃へて願ける愛膳つくんく聞し召言語 貝吹村中よつて捕へました御法の通簀巻にして」(<< > 堤の切所へう 部の雨にも此通り箕笠で此鍬で堤をれことやる所茂九左が見付て竹 ましたそれにまた村中へ何いしゆ有て娘に堤を切せる聞て下され夕 き持ぬ乞喰に成たを旦那寺の御願で村中から無尽して家迄立てくれ へが娘じたい此ぐつろ兵へは去年の水に家ざいかざい皆流。本のご ん親共年は幾つ何と名を言ふそれ頼人をいわせいと年を十四と言へ と気を付ればあんにへいほう切たやつハこいつめ爱におる愚津郎兵 (モジ) かり住ひ忘れもせぬ十三夜うつくしう照る月を本堂の椽かは

ず寝ても起てもお姿が目にちらく~とちらつきてうつらく~と恋こ さばきもやと御賢慮いため給ふ内百性共口とにさつてもあぢよう言 光の玉を藁苞に包ですへしごとくなり北ノ方も障子ごし乳母を初えている。 どかいも永雨の此春雨のくらき夜にまぎれて堤を切たるは恋しい人 が出るならば恋しい人に逢ふ物雨がふれかし水出よといの」「パオ)れ は逢見ることも叶ふまいいつそ死ふと刺刀をいくたびのどへ押当し がれ泣て明さぬ夜はもなく文を遺ふも尋ふもお名を知らねば此世で 件が病気本腹の妙薬はあの娘せい法も立村中もなつとくして命助る 逢坂のせきとめ兼て見へ給ふ宣留公」ハシは一向に神の御告の命絃 ぞきまがふ所もなつかしやとせふじ一重にゆびまどを明ればやがて 腰元はした押合せり合指睨若殿にもしらせてやあこがれまろび差の をば存分に切さいなみとつ様か、様お二人と中よふして下さんせ頼 に逢ふため村の衆へは露程も恨ふ足はござんせぬお腹いせには此身 ゑの深きにや日数立程恋しう成ふしんもできて親里へ帰りても忘れ でつくく

一詠てるる後
ヘ十七八のうつくしひ

侍様がござんして
用が 致しましよと□∼願ふをせいし給ひ年端も行ぬ女の独の所為とは思 としゆかふは違へど御せい法は同じ事どふで命は助らぬ早ふ簀巻に くならば小性吉三に逢んとてのほゝん~~哥さいもんの裏表火と木 ためし有既に以て八百やお七火事故寺でいたづらしまたもや家をや い教へたあどない恋路に言くろめ助からふとはのぶとい事昔もさる ふたりもなつぐさのすげみの笠の透問より綻び出るあいきやうは夜 まするとわるびれず言ふ物ごしのうつくしさ器量は花の都にも又と 有こいて、いわんしたが縁と成かりねの情は薄けれ共わたしがりん

談じ合頓而村中呼出させ外に申にもなく弥女が所ると申か然る上は うのはのうぶやの三だんめほとけごぜんあふぎいくさの三だんめ大 そば近習を手分してくり出させあれよ是よと記録所は書籍の山をな さ早ふく〜と其身は古来の式目をうゐんひじ公事さばきの双紙迄お 至る迄替つた公事のさばき方聞伝へし咄し有らば言上々と触出しめ 物の控も立百性共もなつとくし命助て艶之丞が奥に備へ後日に隣国ん方なし譬へ忰がこがれ死すれば迚一国の政道には替られずとは言ん方なし譬へ忰がこがれ死すれば迚一国の政道には替られずとは言 工夫すれ共何を言ても罪がおもい助る筋が見へ申さぬ暫も縄とか 解て奥へ入百性共を呵てはおかゑしないサレバノ〜身もいろく〜と を請グハット一度に立て行御台は待兼立出今の娘が尋るお市なぜ縄 あらくせば名主急度曲事に言付るぞ立ませいく〜と底気味悪き御意 が願に任すつれて立コリャノ〜身が休足して呼出す其間少しにても りなだめ白状させよ人に面を見らるいもつらからん箕かさは着せ置 はれず順人有は必定罪の疑敷はゆるがせにすといへば此儘法には」 懸れば逐一に御覧有ハア、趣向も有物かな扨かふ / ^ と後車に一 ~ じやうにうどうひやうごのみさきの三だんめ入用所斗折出し御目に **答人なれば是を御覧遊され御賢慮加へ給は、然』べしとかうきでん** 折能来合奥方の御物語承り分別有とて罷出元来八百やお七に似たる す所へ日頃お出入御気に入若殿の御咄伽後車と言へる遊楽」(+\*)人 くつうゆるめしが心」、カッシュの寸志吟味くくと此上は日を延す外せ せ置しは工夫を練て見よふ為お手まへも思案めさ一家中出入の者に へ聞へても後指さ、れぬ様のさばき方も有ふかと休足の内腰懸に待 (元\*) 行はれず暫。村中へ預る閻腰掛へつれ行いましめときいたわ あら立ては白状すまじ随分なだめ閻落せ弥一人の業に極らば汝等

願の通制法に行んヤイ女親共も能聞五穀は万民の命の根其耕作を妨

» 箕引はいで笠諸共下部に下知して簀巻にさせコリ\*/~名主百性 共用水の堤を切し女笠の台討落した各人の此身のかさ長田の庄司が 行ふ覚悟せよと白砂に下り (+2) 腰刀ぬきはなし菅笠はつしと打落 はさいくわのがれず身が手にかけて首を討死骸諸共ふしづけの法に

じせいのごとく身のおわりをば今ぞ験る国の掟汝らが願の通提の切 たく金にとらする間ふ足の品は買調へずいぶんりつばに取認吉日ゑ 道具は不残けつしよ上り物此方の宝蔵へ納むべし金子百両葬礼の仕 レ所へ埋べしなきからは親にとらす法恩寺へほうむるべし**各**人の諸

を取た様なとさゝやき合御前を罷立帰るぐつろべ夫婦は臍村が指図 百性共どうやら訳が聞た様でまた何やらたらぬ様で夢心にたのもし 年寄村中も法恩寺迄見送れよと筋道立たるさばきかたぐつ共すつ共 るは」(+1\*)
ふ浄の恐れ乗物へ入百性共につらせ行葬礼の日は名主 分の為臍村金兵へを遣。間万かれが差図に任せよなきからを此儘や らみ道具を納めよ葬礼と嫁入が同儀式ト心へたり只今より当日也見

三~九度古来稀成旦那寺の舅入御家門振舞祝儀のお能父母の御悦び 恩寺迄死出立夫から嫁入の色直し艶之丞はたちまち本腹雛の女夫の つしよ物お蔵へ納る嫁入の先荷天社万に野送は氏無き玉の轡乗物法 にてすぐに納戸へ乗物つりこみ日の目おがまぬ箱入娘吉日ゑらみけ

出家衆御出入町人諸職人召仕の女童に至る迄ひいき!~を遠慮なく 生三日は太夫操役者芸品定メの大評判一家中長局の女中方法恩寺の 新板はつぼやの太へ三座の操簪たび毎日棧敷言付て番簪の見物役弥 ッには上るりの影と有ッて一家中上るり稽古めされ語る者は加増有 神の告とは言」(キー゙ッ)ながら偏に後車の働と御礼厚くあたゝまる二

> 大評判こそ始ける誠に君が代~栄へ通成道の楽也 仁なれば後車を判者頭取に定ゑこひいきの位付なき神文を書て既に

評判させ京大坂は言に及ず諸国を見たる遊人にて六芸の道も明か成

子時延享三寅春 三月

作者

梁

音曲操大評判見立鳥尽

堺町外記座本 竹本七太夫

去年今年打続大入に小判のさゞ浪/ 〜寄る孔雀

座本 若 松 丹 後

操興行

同町

金持には金が金もふける大入宝袋も若松に鶴

**葺屋町** 座本 辰松八郎兵

結 城 孫 郎

当分休

木挽町

惣太夫之部見立鳥づくし

やぐらく〜をあき風に今は音をのみ鳥無里のこふもり

上上吉

豊竹肥 前 椽

今歳から二度のおつとめうきふしつらき川浪に身をしづめ給ふ鵜の (十二岁)

上上吉

竹

本

伊

太

夫

既松座

£i,

## 浄瑠璃評判記集成 上

六

上上曾	かたいときては	上上言	嬉しがつて見物	上上富	抱ての顔が両方	上上書		上 上 <b>吉</b>	うゑへ上る事は	上上吉	しゆら事のてひ	上上 <b>吉</b>	当くと言だす	上上吉	いつでもあたり
竹本要太夫	かたいときてはくろがねでもてらつ、き	豊竹留太夫	嬉しがつて見物がときつくるには鳥	竹本熊太夫	抱ての顔が両方に有るひよくの鳥	竹本幡广太夫	見へぬほと、ぎす	豊竹粂太夫	うゑへ上る事は雲迄もくのないひばり	陸奥彦太夫	しゆら事のてひしさとや出のわし熊鷹	竹本杣太夫	当く〜と言だすはどうまんのわかれの鳥	竹本七太夫	いつでもあたりはてひどいてつぼう鳥
若松座		休		若松座	」(十三ヵ)	同		同		七太座		辰松座		座本	
上上	いつでも子共が	上上	ちいさけれど面	上上	駒太をよこにく	上上	しゞうくるはを	上上。	出語のだんふう	上上台	うゑへくるりと能かへる山がら	上上	功者なれ共どこ	上上電	めづらしさに見物がむれ入り鳥
豊竹井筒太夫	いつでも子共がよろこぶあめの鳥	豊竹品太夫	ちいさけれど面白て尻がむごく~するせきれい	豊竹久我太夫	駒太をよこにくわへ給ふいすかの鳥	豊竹桐太夫	しょうくるはをはなれ給はぬかごの鳥	豊竹長門太夫	出語のだんふうは祖師の俤のこるめいどの鳥	竹本西太夫	能かへる山がら	豊竹喜美太夫	功者なれ共どこやら淋しいかんこ鳥	豊竹若挾太夫	物がむれ入れ鳥
同		若松座		休		辰松座		休.	ゾ(十三ゥ)	休		休		<b>辰松座</b>	

芸ぶりふりこ	能ならふく	<b>声</b> に折 <sup>ル</sup> なく	<b>上</b> 追	上上	上るりのつま	上上上	御病気とやら 上上 上 よ
上上 竹本河内太夫芸ぶりふりこふにくごるかいつむり	上上。 竹本時太夫能ならふくくと聞っ人がいふづけ鳥	上上。 陸奥道太夫	上上。 豊竹仲太夫の者にすねこびたかうりんの鳥	上上 竹本重太夫さりとてはうつくしい声のうづら	上高りのつまりくがちと長く敷尾の山鳥	竹本喜代太夫	御病気とやらの故か評判眠めなふくろう上上 豊竹 三 和 太 夫人のまねをよくなさる、あふむ
若松座	七太座	長松座	休	同	七太座	休	(木 十四 オ)
お師匠ににて	上るりの一躰	<b>上</b> ーッたいお生	上 上るりの	うまみなふて	声がなふても	<b>上</b> 上	ねいろやさし
上 豊竹 伊加 太夫お師匠ににてかたひかしとり	上るりの一躰かんきんする様なしきの鳥	上 竹本歳太夫 一ッたいお生れ付てたよはくひわく鳥	上豊竹吟太夫店下上るりのけは能ぬけましたつばくら	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	上 竹本沢太寿	上上的竹本奥太夫	ねいろやさしくて間延する常世の長鳴鳥上上。 竹本 千代 太夫のねりく と入・言のおどけは口がねばいもち鳥

猿

七

净瑠璃評判記集成
上

つかくれつ泊	長松座 上上吉		土土 喜代 竹山 三郎 君はひかぬを名代後生大事とだかへてござる仏法鳥	<b>上上</b>
<b>上上吉</b> 森竹小八	七太座 <b>上上吉</b>	七	土上 岡村弥七	君がねじめにる
上上書桐竹勘四郎	辰松座 <b>上上吉</b>	長	上上 野沢四郎八部が割は古伊八の跡をつぐみ	君が評判は古母
長 松 幸 助	七太座 上上吉	七十	鶴 沢 義 助	<u>부</u>
おやま人形の部	K+HH2) ▲ おやま 一座のお冊	X+ 若	君がねじめに声なふて人をよぶこ鳥上上吉 竹澤藤四郎	<b>上上吉</b> 上上吉 本 三味線の部
君がねじめはまた小がら 大字	君がねじめ	7	お年寄ってもお名はくちせぬきんけい鳥響 一 豊 竹 若 太 夫	巻軸お年を
かもの鳥		Ť	・ぜる	お年だけでおり
竹沢藤次郎	上	休	竹本伊豆太夫	
君がねじめはうつくしいるりの鳥	君がねじぬ		当地の声頭なれどまだ口ばしきいろないんこ	当地の声頭なり
竹沢平次郎	<u>‡</u>	同	豊竹絹太夫	Ł
君が手はよくまわるこまどり	君が手はと		評判は 海共川共付ぬ沖のちどり	評判は海共川#

猿口。轡	▲ 立役人形の部	おやま一通,はなんでもかでも四十から	上上 松嶋文四郎	情出して羽をのし給へすだちの鳥	上上	親御のひかりきるかさ、ぎ	上土 西川藤五郎	お山のふうぞくしぜんとかわいらしいうぐいす	上上	今歳は立役とお山を二役にせおふれんじやく	上上 吉川幸十郎	近き頃は御ひやりばんがいろく〜鳥	土上 山本平八郎	君がお山のこし付にはたれも思ひにくれは鳥	上上 山本彦三郎	お山のふうぞくには人が思ひを懸るおし鳥
		•	七太座		辰松座		若松座		長松座		七太座	八十六夕)	休		同	
	ひいきくくにめ	上上	諸芸すき間なり	上 上	此度の男はどこ	上上	芸の仕出し大ていなこうの鳥	上上電	上づだく~と郭	上上電	人形にしぜんと	上上吉	何懸なき中に対	上上吉	立役の上ェに羽をのす大鳥	上上吉
	ひいきく〜にめをせる網代の鳥	薩摩善次郎	諸芸すき間なくおしあふめじろ	森 竹 京 四 郎	此度の男はどこやら小気味わるいかけ鳥	西川重三郎	いなこうの鳥	豊松図三郎	上づだく~と評判がすみぐ~迄わたり鳥	西川新十郎	人形にしぜんとくらいそなはる五位鷺	<b>森</b> 竹幸 五郎	何懸なき中に敵は見かけから恐ゃしいぬへの鳥	木村兵蔵	おをのす大鳥	長 松 六 三 郎
九													鳥			
		辰松座		同		同		同		若松座	八十七十)	同		七太座		辰 松 座

浄瑠璃評判記集成 上

上上 松 井 傳 九 郎 若松座 評判がまだ定らぬむく鳥 Ė 辰 松 礒 Ŧi. 郎  $\overline{0}$ 

御年役に上座をゆるすつへの鳩

岩井文次 郞

上上

世話敵に思ひ切て手をはなし鳥 上上 辰 松 安 五 郎

芸のゐきおい淵の鯉も取さふなみさごの鳥

はげみ給へ追付四十八鷹の部に入もずの鳥 上上 上上 吉川 坂 東友五 清 次 郎 郎

男ふりで女中をあつむるおとり

上 山 本弥 四

郎

同

上上言

荒こと師にきめられてはしよげ鳥

西 川弥八 郞

若松座

上

西 Ш 伊  $\equiv$ 郞

七太座

上

実事師に合ふてはすくむ耳づく

たびく〜刀のつばをたゝく水鶏

同

八十七ウ)

瀧

山

新

九

郎

七太座

八十八オ)

辰松座

芸ぶりがそ、かしいあつとり 上 上

藤 崎 弥 三

郎

若松座

辰松座

口上役口きくが商売のからす 森竹吉 五.

郎

七太座

同

上

荒事師『おわるゝ鷹にきじの鳥

お名の高さはそら飛ぶとり

七太座

辰 松 Ξ +

郎

辰松座

後見となりて一座の世話をやき鳥 西 Ш 六 + 郎

若松座

作者 膚 暖 堂 蠶 梁 (十八ヶ)

豊 竹 肥 前 掾

天竺の釈尊は脇の下から誕生ましまし我朝の管丞相は梅

頭取曰

り | 七組伊組 | コレー〜頭取殿太夫のゐんぐわ物がたり取置て芸の り引込給ふ故案じ過しをせしに其年の益より当地堺丁外記座へお下 り弓張月かと覚ました豊竹新太夫と申せしが火縄くさひ音が有。上 狐が穴からには極つたりいわんや凡夫此お人も上るり世界から降ものまたから出産したまふと言ふらすは方便の取なしにて実は与勘平 らぬ人でござるさればこそ荒地に芝居をうちたて受領して座本と [ は立て今に人が言出します」(ナカタ)其頃迄は当地もカンの有声でな 躰をそむかず語られし故むぎめしにこめの飯のまじりしごとく水ぎ 評判せられい七太殿伊太殿を差置此人の事言出さずと巻頭を直した ひ盛。すくなく金短冊四ノ口のちよこ場を取給ふ様になつて中頃よ ろく〜と」(+n\*) 言間程なく秀里の頃は日の出の脇太夫と成給ふ芸 ひしむくひによつてとふく〜東の座へ初て出給ふ其時はたしか身替 丸ひたひの時分より所との会稽古所へ出暦との親仁達を取てなげ給 てのらに育てられ備りし家職をうとみ遊民とは成給ひたんなるべし と今は見物の耳がこへてげさくな事は取ませぬ肥前殿も昔の様にり 七組日

ラット座本の段は預ましよ七年きが済で仕まふた十年己前 役に取十余年が内一度もふかくの名をとらぬこんたんのきつさ只な 年冨士日記の少将がなまよいにて打わり玉ふそれより世話をおもの やりにて若太殿の当ヶ給ふ所を見こみせはでなければうれぬと翌々 けりや悦ぬ故はる!~敷当,もなかりしに四の口馬之丞が少しのち ていたが能初江戸の上るりは合戦桜彦七病気の段の面白さ音曲の本 上れば色が取れ出してやあつたらお声を建長寺の底竹箒の様に仕給 涌もし給はじ農工商の夜喰のかたまりなんめりなまなか親の慈悲に く ヒイキ組 ハテぶしつけな頭取殿の評判腰折ずとだまつて聞

ずそふして三十日をろくく~に勤ずわがまゝに役を替らるゝ故しず もなげに言るれど伊太殿幡广殿を初ととして詰の衆に歴との世話語 きでこりそふな物しやがまたで」「ニ+1\*」るかしらん世話語く~と人 られ十日斗語て後は品太殿に替れた冥途飛脚はあまりしい我ま、ぷ がたかつた冠合戦の四は留太殿と同し役扨悪』かつた留殿にかみ付 は殊にゑての世は物なれどずたい聞れなんだ道理よあつい時で青蠅 そふ十余年が間一度もふかくをとらぬとはいわさぬ丹波与作の中巻 帳くり能ゑかふせられて仏も嘸悦ぶおいらも帳をくり出してちと申 やの四段目やつこ迄が泣ました後藤はお家の物也 | 七組伊組 | 過期 由兵へ鶴ころしかぞへ立ればほうづはない分てきつかつたはかるか でも当ります行年、三、口三勝の吃イヤ此どもりも泣と悦と三段に 床でもあの通り色事せは事位事詰メ合事模様の有所とさへ言ばいつ 身に付様にうまみが有。「ヒイキ」アレ聞れよどこの湯やでも奏結 ざんせぬかるかやのゆふしてがぬれ事三勝猿丸の三の口ほんに! ひけぬ「女中」いかにもぬれ事やつし事の思ひ入は此人の様なはご いきが薄し第一芸者は女中にひいきがなければ金にはならぬ棧敷は の芸と七太の芸は段が有、殊更伊太や七太には好ぶ好有、女中のひ を巻頭になをせ!~
「所化衆」イヤ・~夫
レは其元の片ひいき此人 七太殿は古幡广殿のせふうつし殊更」(ニキャ)去丑,年より座本此人 ちぎに語らるればよけれどこんたん過て我儘ぶしが多い今ひの出の 大分有゙゙ゐんまり味噌を上ヶ給ふな第一此人の風は素人がまねられ ゑて物こきが三ツなると出るにはくたびれた三人なまゑいの大ばた しあれ程ぶんごぶしが語りたか宗旨替へたがましなまよいは久しい わかりました名所井筒の惣八がいけんおやつのたいこ」 ニナシ 梅の

れしはおいとしながら所全根にない声で三四と段切の大場をこなすんとひいきもうすふ成ッ゚それではては芝居を人手に渡す様に成下ら

ごくあわれにていかな気強人もなきました是等こそ土地の気を能知 ざった一躰お口に合し所とは申ながら操をいかして正九が電を嫌ふ はなし声のかゝるがげんのせふこ此人の兵法の段は近年の出来でご 所を引付るを名人と申なり七太殿と此人の間々は五ツ鴈にて知り給 巻頭に立る人は其職の奥儀を明らめ臨気応変のはつめい有て十人の語給ふ方はないと存る七太殿巻頭にと有は御ひいきが交ます惣じて ござる是は格別芸一通りにかけてはふししやうの長短ハル 甲乙か 事もならず巻頭は慮外と存る伊太殿か七太殿を巻頭に仕替いくく 花やかめをば加へ長場をたいくつさせずしかもうれいは「三十三乞し 咄しにおかしめを如へ枕の段より末にはしつかりと本躰をしめ所~ 居給へば定て度~聞\*給ふべし然をあの違様はどふぞい見物に無理 へ兵方の段此人はお登の沙汰なければ本ぐり也七太殿は其年大阪に ツの二ツ当れば丸の当り也作の善悪土地に向とむかぬ有こゝはと言 ニォ゚ 古はりま殿いづれも年中当づめもなしはづれし事度と然れ共三 月日の内には当はづれ有り則ち祖師を初ゞ越前殿中興開山たる」、ニナ ふ手柄なふてはなりがたし此人の手なみ申に及ずいづれも御存永き 内七人好,人有しゆじやうゑんを第一に一人して大勢の入を引付給 ることおそらく此人の上に立人覚なし大仏殿の三ノ切は此人ならで いごふかなつかい清濁程拍子口拍子操の合方心いき貴賤老若のわか 人のならい元祖宇治」マニナートーシカ加賀掾の跡築後掾いづれも座本は別に 糺して聞せ申さん先芝居人手に渡りしは恥に似てはぢならず盛衰は 頭取日」双方あらそい何れも一理有しづまり給へすみやかに善悪を

り臨気応変の用捨を加へし語様也若き衆は鑑になされと申さば袖のッショッへと の無日は気のくさることも有べしとりやうけんはいたせど悪口手合 申べけれ是迄度と勤を引給ふは座本にて借金の断言に声をいため入 物もたれかれを聞ふと楽しみ来る心に二ッなし入の無日は見物もそ られぬと申名人の上には有まじきこと千万人の見物も十人廿人の見 給ふか名代を出し給ふこと度と有夫故素人も三十日をろくく~に動 と也第一のきづは此人大人の日は身を入て語入すくなき日はなぐり 俗で申ば花やか過ると申様な物それ知らぬ人にはあらねど当地の気 及たけは評じます扨此人のなんを申さば一ッたいをけやけく語給ふ は~~としまらぬ物なれば猶更大じにしめて語るこそ名人の情とは を取べは脇以下の衆の事にて巻頭に居る人は余り望」(ニ+ミッ)ざる) ぬ黒人も白人ともに我まゝが交ると悪口を申はやり言を入っておち してはやり言を入らる、で本の事やら我ま、やら得音曲の道も弁へ でくる所へお心付ず御生れ付と素人が得まねぬ故御そんの有に時と となさるれ共本をひかへし見物が腹立ます素人は本を扣る者の許判 のうたを入給ふ事本行をそむきてよろしからず赤素人の悦ぶをかち はやり言を入たり此跡の盛衰記の金の段に菊之丞殿せられしむけん みにこたへたる面白さはなく上ひんの方へよらぬ物と存れ又時々の き方はにぎやかにておちは参っどせすじのぞつ~~といたす程しん 事にて今は大分耳がこへて少しの事にも許を打」(ニナニュ)ますけやけ に合て徳也と思ひ給ふと見へたり無理もあれ共夫
ルは四五年已前の は善悪は悪とまつすぐに申が許判也愚意の及ざるは見免し給へ心の ゑこは申さぬよい事を悪〃申は悪口あしきをよいと言も取なし也善 下でも取たか但しはゑこひいきかと思召ふが蓍を立ていたす評判に

れて居る心が五音に顕る、語様恐しいうまふござるれい~~と文句は姫が使者の口上言中に又のを生捕者与一ならで外になしと言詞ほ人はないと存るに竜もつまづきかい,取分あやつり心いきのきついはいかゞ是迄覚ぬ開口かなの遠ひ此人のかな遺ひ開口は余』に並ぶ此開口はとなふるうつとふる也のふるとふるが。うるうると聞へ』みだ仏ととのうると語給ひ次に下部が出てうつとうると言フシおち

手がたらずしやうじんのはきだめへ鶴のおりた様に弟子の若狭殿を手がたらずしやうじんのはきだめへ鶴のおりた様に弟子の若狭殿をは打まする最前も七組伊組の衆がお評有し段切の事日を引給ふ事はは打まする最前も七組伊組の衆がお評有し段切の事日を引給ふ事は此度辰松取立の為に勤られし石橋山鎧襲の三段目四段目の段切にて知治へ此三は自余の届事其四はどもの大愁初日より今日迄声もいたも大入に隅と迄声の届事其四はどもの大愁初日より令日迄声もいたも大入に隅と迄声の届事其四はどもの大愁初日よりの事日を引給ふ事はは江本中ぬ右三四ヶ条の評は自余の衆なれば芸の程とにて評じか様はさふ中ぬ右三四ヶ条の評は自余の衆なれば芸の程とにて評じか様はさふ中ぬ右三四ヶ条の評は自余の衆なれば芸の程とにて評じか様はさふ中ぬ右三四ヶ条の評は自余の衆なれば芸の程とにて評じか様

に大愁を畳かけく〜語給ふはしかも有ヶ声どふもく〜」(ニーチョッ)たし次に四段目三ヶにぎやか成跡にてしめりし場なればほだれぬ様に有ことさへ語違へ心得違の有中にか程の妙なくては巻頭には成が

#### 7本伊太夫

だまり上れ此人の芸と七殿と一口にいわりやうか耳がなくばだつつ 下られ」
〇十六
の
てからは
一向あたま上らず
道満のわかれの段役もめ 馬の段がはるかよかった二の替伊藤伝記よかろく~とはづんだ所に 伊殿一人のおてからでもないさし七組しそふじやく〜当りづめとは 前殿が新芝居取立られ善請がりつぱなさじきが能のと此評判で入た 煩で声の出ざりしが伊殿のお仕合で有た其時の大入はひいきの有肥 か様其小ぐりの三段目はきついあたり也」(ニナベも操芝居に古今まれ 殿新芝居興行の砌下り給ひ新ぜたいを持しめてやられしは大手柄い 座伊藤伝記より出勤有しゞう当ッつゞけて又旅廻ッし給ひ去〃肥前 にあい有花やかにて上手なる故いづみ殿たくみ殿も叶はず其後東の なぐ此人知らぬ山家もなし伊藤にて操せし時出られしに大音にて声 より所との会けいこ所へ行て名を取凡西三十三ヶ国廻り給はぬ所も 曲の水を産湯にあび上るり浄土にゑなを納たる人にて青にさいの時 で一日替りにせられしが七殿の日は入が格別増たぞや一伊組 先年若太殿にははるかおとつてはづれましたひらがなの重忠大けい 言さぬ小栗も太郎様斗で四段目はほつこりせなんだ其後喜美太殿の な大入であった | 彦組 | コレ / 〜 ちと遠慮有其年はおらが彦殿が御 づの北条くらひがなふて太郎様の声が出てわるふござつた七太殿が |伊組||とふざい!~なりをしづめて伊太殿の許を聞れい抑此人音

面白く見物がときの声を上ます元来位有音声にて野卑めいたる事な何様語様もあれば有物西風と東と調合有故一句/\にぞつとする程大出来也先年豊竹の祖師語給ひし時はさのみ替事なき様に存ぜしが売物也かれ是で力のほどを顕はし給ふと見へ此度の三段目は古今の

物是ぞ祖師のおふむに演置れしかくにはづれて格に当るりんきおうく本躰をしつかりとふまへ所﹝花やかにおちを取事能のみこんだる

へんの用捨と言語様なるべししかしうらば姫が死ぎは」〇〇十五七)にて

引つれて戦ひかったる大手柄で一言も」(ニーロッ)ござるまい其身も役

に立ずの様におもわれては座本の時と違ふて給金の手前も有跡が又

の段切に願為四功徳と有文句をぐわんいしくとくと語られしはいか陳と言事を都にじうと語れ大平」でコキャッ記の三フ切赤松入道して後 入を引付るでなければ何程の名人でも上に立ぬと頭取の詞凡上るり ル是アイウエオノ産ム開口にして何いのはつち坊主もぐわんにしく **替りめ有ントのむかなをいわずうと語給ふ則大けいづ二の切に都西** してくるしからず開口かな遣いをわけ給ふ事此人にならぶ人外にな ならしゆら事なら愁なら詰合ならどつこに言分ふ足のない人巻頭に 組の衆一言も有まい第一操語りでは有心いき事はませて有。世話事 く語らる、は名人のしるし也なんとつ、くせいが有、か七組の衆彦 しやんくへわさくへと引立くへ語段切に成とてつぺきもくだくごと 赤松の小気味よさ外の太夫の様にほだれけなく気のつきることなく は大坂のよりにぎやかでよかつたと上っ人が言た大平」でエセを記の を能語これさる、は此人程なは爱にも大坂にもない大景図の二ノ切 の節は芝居がさける程入た七殿や彦殿にそんな事はないぞよ芸者は 兵への中下ひらがなの三の口四ノ切五ッかりがね又辰松座へお下り ていろさ三庄太夫の四ノ切山姥の出語大当りを忘れたかい山崎与次 ハォン 合ほど拍子にひやうし声有て達者で上手なれば鬼に鉄棒もたせ 立人今三ヶの津にて三人ならでござらぬ上るりのこなし操のぐ」ニュ 書違へ俗の知らぬ所は御用捨有おそらく上るり一道にて此人の上に ふ此人左様の事は常≥改らる、人なれども本の竜のつきづき弘法の 人にはかやうの心へ違ま~有様に存る | 頭取臼 | 御尤千万のさつと とくと鉦をたゝくにィと開口改られしは深きいみも有にやすべて此 ゞぐわんいをぐわんにと言が開口也にを永ヶ引ヶばニィといの音生 し一所化衆一ちとかな遺いの事まつてもらを此人のかな遣いは一風

さすがに古きお人程有て格別かんにたへました肥州の与作のあしか に立人なれ共生得声糸にうつらざる所有ていやみ也其上一躰野卑成 り」マミーナカホン違と思れて御両人共ふできく〜別して此人の三ノ口琴哥 りしに思ひ合せては此人程にはごきまじ肥州が叶ずば其外にはなめ が能くらべてあぢわひ見るに当りしよりは此人のはづれしが格別よ 耳もよみこまずいかにも大当なりし」マニトトス②此人に大はたきなりし ない伊藤伝記の三若太殿より悪との評有若太殿声盛り其節は見物の いたす生付て音に位有れば今。としら当地の見物の耳に懸る芸では いはかの生付て糸にあわぬ声一筋出る穴有が邪广也さる間爰一許を 是によつて位有事おもはしからずハリマ音にてぞつとする甘味のな しことく也土地の気を能知,見物引付給ふ事いだてんのごとし巻頭 共に古代の本手ごとならでは叶はず名のなき人は何様に語共子共の くもり有か無\*かを聞悟段なれば大せつの場也二上り相ノ山琴の組 が順礼哥の様に有し兜ノ三フ口は重忠五音の調子にてあこやが心に ついはつめいでは有゛しかし発軍記の三の口はあまりほ゛こり共な て見る人なし盛衰記の四の切大和風に取直し語給ふこんたん杯はき ふばしさなり当<br />
」はづれは時の運と言もの<br />
也山崎与次兵への中巻は し然れ共段と見物の耳こへてくるうへ及がたく思ふは過にし事のか は臨気応変とは違也至らぬ芸なればか様に打こしたる評 は い たさ ははづかしかるべし諸万人の中にはいか様の人有べし共しれず是等 と本式に有たし知らぬ千人より知たる壱人の聞てこそ名 人の 上に かりし此人の重忠に位のないと七太殿の戸平次の口おもなとは役わ いたづら盲人の蛇たれかれ人ト言るゝ身分にてはかやうの儀はきつ

ず」(三十九ク)

#### 竹本七太夫

原冨見西行夏祭共に三ッ出たぞ古る物せらるゝは是迄爰で大事の上 様にばかつくすか辰松での西海硯清和東物も二度出た新物は桔梗が 政大夫の楠七太夫の柿,木と言評判を」(三+2) 聞ぬか | 肥組 | いか 序ノ中四の口となり柿の木の大当聞ゞか三太夫の得手物越前の鉢木 坂で当詰とは人違ではないか 【七組】 人違とは耳なし共芦屋道満の をわすれたか四五年が内にひらかなと御所桜と三庄太夫是三ッ斗大 お下りより当。詰とはいわさぬ初下りの武例であたまからはづれた 詰で有たに今こちで座本仕てのぼる念がきれたと大分力落して居る 当,詰其筈かい大坂でも師匠の替りは大方此人がお勤大坂でも当, ず当地で座もと一座の頭と成て打つ、く大当を見ておけく うも車長持引ずる様ないびきをかゝせたる名人音曲の中興開山と称 るり共を語ちらして置た故幡厂殿語置れし誠の節を改るのじや又有 くし地虫の鳴様でぶたいがしめつて気がつきる其上ふじうな人でつ にも聞及だ大坂は格別当地での評は第一上るりがちいさく調子はひ とさ | 肥組伊組 | 彦殿が済でじやとて同じ様にかたはらいたき許判 の声頭と諸人の耳目を驚かし追付一座の頭にも成給ふべしと申に違 しが應神天皇八白幡より西の座へ出られ則五段目両面大王の役床中 太出て三千世かいに舌を演べ鶴沢が呂津のしらべにけゐかしんぷや いに新物東物を出し給はずひつきやう中買でござるさ | 七組 | 同じ 「そふじゃく〜ぬつと煲へ下」○H+\*) らる、と幡厂殿に似たと言て せし幡磨少掾の身弟子とはおらがひいきの七太殿昔は廣太夫と申せ |七組日 | 筑後既に滅し佐内ついに世に出ず二ぶつのちうげんに政

ど先年の大火事に父こひし母こいしと泣出したと言ふらした程の泣 同じ語口故永場では有。あくびの千もでました三。子も聞及泣おん 違し故気が替りしに此人は天てらすよりつゞきにけり迄ねばく~と (三十一\*) 音出して語初から語納迄地で音を第一ふしでうはつかずしめ 聞ゃふためじやなんぼわいらがひごついても此人の様に地に甘ひ」 れしはきつい心いきの遠様祖師は齊藤が来るよりは語口ぐわらりと らこちらで只。めろ。~~

位斗と文句の

位文句でしかもみそごく

位 御父帝をしたはせ給ふとほろりと泣給ひしに七太殿は」(三十二)あち 語又ャコへにて我はひ口の二郎と語給ひし天然みめうの心いきはり 将軍義仲とヤコへにて語人形に左右を見廻すして声ひそめ駒若君と なかつた三段目樋口が名乗所にて天地に響くいかづちのごとく朝日 外組」ャイノ〜わいらが組へは七太から袖の下でも有たか町でわる めろ~~と泣斗と有文句にて古はりま殿は泣たまはず初のアか程讫 物にてなし紅梅のたんざくをよみて町人の子は父母をしたふにも只 宮はよかろく〜と思ひの外はりま殿の語置れしを能覚おるがあんな ま殿には有しが七殿は跡も先ものべつゞけなんのけもなかつた大塔 先陣聞答も七殿の様に」(ミナー?)餅をちぎる様に口のねばい物では つよく語られしは心へ違古幡广殿はあちらこちらで有たひらがなの が女房を見て言間を深手と言心いきでたよはく語後に身なげる所で 能覚へていたが四年立故皆忘て仕合ヲ、覚出したうは竹が手負山岡 つじやと言であろ三庄の二の切三の切にも大分心へ違が有た当座は やかにしつぼりと語。人はないてや三庄太夫大塔宮を聞なんだか [ 声で調子びくに少ヶ語るは耳をすまさせてとつくと上るりのしがを いと言事を皆よいと言なそふほめるなら拍子打込事のならぬもいた

けにおしへられたで有ふと存る程出きました其後の御所桜二ノ切は に取直しあれ程には能語給ふと申た余。よさに大方お師匠がはなむ させる誉れもなかりしにお下りのそもくくよりよいくくと引立られ 違と存る三国一の越前殿さへ当地にて当らざりしに此人大坂にては は悪口過る其程とに許するが評判也初くの大塔宮盛衰記の評は是程 打『ば祖師にも打所有其人の芸の程~~にてほめもしつひも打がよ でかたき取のか地事は此人につゞくはないさく~【頭取日】ア、コ らは七太殿に何いしゆが有て悪口ぬかす但しは七太殿に伊太やひぜ 切三ノ切と此人の二ばとはきつい違わるかつた寄かくるの一声七太 あいきやうありける万歳と聞へました次の真鳥肥前殿語給ひし二の に合いぬかくそんゑいの偽りならばの諷にはお里が知ってきのどく んかい冬年の清和きついはたきたつた七日してやめ給ふ東物はお口 おんどをおどりくどきにやられしはあんまりむたひ其外むぐうの心 は当,目はなかりしが耳明の許には御きりやうに合しては東を西風 有故也おてがらく〜扨」(ミロナミルタ)初て辰松へお下りの節武例の三ヶ切 て去年より座本迄なさる、は土地の風俗に乗しと言ふ中に一きやう し双方のあらそい頭申ひらくべし七組は余りひいきに過る伊組肥組 レく〜もふよいかげんに論やめ給へおがくづも言へば言るゝでひを んや彦太初メ江戸中の太夫が近年かみ付られし故疫病の」(ハロ+ハロセ)神 殿諷給いしアノ間へつゞみはどふ打こんだ物で|七組|コリヤおの しと同じことでひつせいがない又少ク語給ふは赤みを出さぬこんた CETHIPのまねし給ふ様に素人は思へど此人のまねは絵のしきうつ 上るりのしがを聞す杯と素人をとらへて味噌上給ふ由聞及ぶ祖師」 いき有しかーツもなかりしはりまの身弟子で本とうのふしを語改め

こんたんと見へて調子びくに声少ク座敷で語心に操にも三味線にも 語有故」(当十四七)上るりにもたれがきてじよはきうなく長場はほだれ を語給ふ次にふくろび縫所で少し色をふくみて語給はばうまかるべ ずたとへて申さば百三十里上方へ登る長の道中ろく地斗ならばたい でなづみ給ひしか其後はくる替りもく〜地合にうまみ付ふく〜とお 嬉しがつてお仕合さる間三庄太夫は大ばね師走の果に大入也うまみ かまはずつね!~~~と語給ふ故素人が悦で古ばりま殿に能にたと お口拍子なさにほつこり共せざりしが三ノ切はきつくよし其後は御 きにあまりすげのない語様徳兵へがせつた出してよりの詞徳兵へを かへおれ又何とやらしてしょはりかけ子共の小便」(三十五\*)やる様事 身にしきうける覚悟のせつたしき請はなんのことでござるそれにし 分,ませぬ今少し操に心を付語給へひの字のかなを得言い給はぬ故 御同格と聞る其内お声おなじみだけに見物ノ取所有でお仕合しかし 段大坂は綿武新芝居伊簡品太也井筒程には聞ぬと存る八段目熊太悪 の外御じまん」(三十四之有し由承るよろしからぬこと素人らしく聞て のお役操能出来し跡評判能お悦と存る別で八段目初日出ざる先こと 存からにが口も申お声は有せい出し給へ扨当春初上るり夏祭初三八 長途のつかれも忘れ楽しみと成是ぞ能手本教訓なるべし御ひいきに だれの楽しみ有下宿~~風景替り人の姿物ごし迄もやう変化有にて くつすべし山も有川も有寒風吹ぶりのつらきこと有ば泊く~の赤前 か参つてたいくついたす惣じて永場を陸地斗ふみてはおもしろから へつてきがつきます初に由長旅の御いけんは煲也徳兵へ三婦團七が せは共時代共つかずじめく〜と入梅の内のせんべいの様にしめりか あししじまんは人にいわするがよし大序の塩釜ほつこりせず住吉の

度は煲に置ます」(『〒五2) 度は煲に置ます」(『〒五2) 男の義にていかな奴も位所で有物をア、はがい、併お声がらにて見いけんせし格にて有たしあたまから泣給ふ故すつきりあわれになしいけんせし格にて有たしあたまから泣給ふ故すつきりあわれになしいけんせし格にて有たしあたまから泣給ふ故すつきりあわれになしいにほろりと泣と言心いきなくて叶はず近くは京土産の惣八が彦三に泣声にて語給ふはづはなし内に泪をふくみて外はつよく其つよき中

#### 竹本植太夫

GF+Kり)にから、これが既此度仏御前三ノ切出語古今の大当 じゃ はさ」ぼり給ふもしれず既此度仏御前三ノ切出語古今の大当 じゃ はさっにてはあの通此人はしゞう三ノ口勤給ひし然ば後にはい か 様 にの坂にて初ノ中五段目よりついに外へ出給いし事なき七太殿さへ当地

#### 陸奥彦太夫

も口に合ざる端ばを功者にこね廻す働も立れ共各方初メ当地にさ程 当りしとて」空中セジロに合ぬばを得あてぬ共しかられずさるが中に 文句聞へかねてうつとしく老若男女の詞ごつちやになり場によりて こね廻してあわれに語でなけりや取ぬ世に成て此お人も近年は余り 様に作者より書てあてがふそれにさへ一躰のたてによつて口に合所 場の大愁はたれがなんと言ても此人には叶ずのふお頭取し頭取日 ず初下りのたんさくではさしもの肥前御の少将の酒よいさへけとば 格別能も有格別悪きもあり不同有人也|彦組|ハテ知れたこと言る はかぐ〜敷当りもなしお声も能が地にうまみなく口中がさつばりと と生付たる声のあやにてぜひなし大坂両座の太夫は其人との口に合 イカニモノ〜そんな物ばによつて口に合わぬは名人の上にも有事人 し其後名所井筒の大和場きびしき物也源平つゝじの四条原の四大和 ゝ場」
ニ+セ
がよければよしばがわるけりやわるいは此人にかぎら 永の年月ふ覚をとらず当詰ゞ給ふはお 手がら ~ |悪口組|コレ 町中をなびけ給ひててより此かた土地の風に合打つゞいて御評判能 く〜待てもらを爱も今は見物の耳がこへて愁も上へ行はとらず下で 彦組|十三歳己前寅のとし辰松座へお下られ忠臣金短冊にてお当

#### 净瑠璃評判記集成

文ャに語給へ共つぼへやってくるりとかへし給ぬ故落かいなし爱ら 乳母がうれいもしもの事が有たらばのふしは定て喜平次フシと存が 様抑おくだりより十三年が間評判落ぬも外にるいなし別て七太殿座 千万也先年はお声ほそくうつくしかりしが近年は太く成てうつくし 程行義能語衆もなし入の有日もなき日も行儀くづし給はず御きどく こみづ聞見物すくなしいづれも二三四と役の場斗目を付てせり合い ゞ鬼に鉄棒でござる」(三十八り) が余りりちぎ過て御損也此お人もしのかながひに成ます気を付給へ が立まするしかし此方ではまつとよかろとぞんじたがさ程にはなし にて要殿役なんぼ顔が新ても道具やは古い物がはねると見へて水際 へ出られてより又▽評判わかやぎました此度夏祭道具やの段新芝居 ふ故うつくしき声にて色の」ミェスも道和事のでけざるは気のどく何 めぬけたり芸は太分仕上ヶ大丈ふに聞へ給ふあまり行義にけられ給 もなきと見へて口にあわず共三の切を嬉しがる也一躰浄るりを此人 づれの口にても我のどに合たる所を取り当るをかちと気の付太夫衆 一声二節と申せ共至りく〜ては一節二声也御声有上に名人と成給は

#### 竹本幡广太夫

ながら出きましたお口に合し物のこんたんきびし一躰操の気能世話ば夫程にこそなけれ出来ました其後大助の三別ヶ道成寺の出語両度所有し三,切は内匠殿白銀の盤にざくろを入し様に語置れし所なれて駒太殿役此お人程にはなかつた駒殿よりこなし方能操の心いき能にお下り濶色江戸紫二,切世話場故お口に合大に出来ました大坂に|頭取曰|名護屋にてお名高くお下りを待し所去と年肥前座へ半途

事能本ぐり能上るりのこなし能》と申、中に田舎仕出しの様にて野事能本ぐり能上るりのこなし能》と申、中に田舎仕出しの様にて野事的が悦びますお下りより今ねんまで一度もあしき事なき故方とから物が悦びますお下りより今ねんまで一度もあしき事なきな方とから物が悦びますお下りより今ねんまで一度もあしき事なきな方とから物が悦びますお下りより今ねんまで一度もあしき事なきな方とから物が悦びますお下りより今ねんまで一度もあしき事なきな方とから物が悦びますお下りより今ねんまで一度もあしき事なきな方とから物人もせり合と見たり芸者衆生縁有て見物を引付るが名人でござら物人もせり合と見たり芸者衆生縁有て見物を引付るが名人でござる」(ニャル2)

#### 竹本熊太夫

出来 ( \ 徳兵衛が女房に三婦が訳言聞うまい物也見物が 悦 で ぞ くように はない とも角も当を取が芸者の第一にて此度の夏祭六段目焼鉄の場殊の外とも角も当を取が芸者の第一にて此度の夏祭六段目焼鉄の場殊の外とも角も当を取が芸者の第一にて此度の夏祭六段目焼鉄の場殊の外はねましたおきな渡しは評判あしかりし所初日のうけ能大和の高弟はなましたおきな渡しは評判あしかりし所初日のうけ能大和の高弟はおましたおきな渡しは評判あしかりし所初日のうけ能大和の高弟はおましたおきな渡しは評判あしたりと明本にある当人も有し年大和太夫高弟としてお出有しを死人にもんごんと悪口言人も有し年大和太夫高弟としてお出有しを死人にもんごんと悪口言人も問いた。

ず気を失ふは作者の心いきにて女のしやうを見せたり気が付てから 是はあんまりむたいと存る三婦と立引にて我でに焼鉄当る程の女い 当夏祭二軒の内にては語口をばんの」(m+1\*)当りおてがらく ならぬ所がなけませぬはやく時代事の弁慶や金平の有詰合聞たし先 りかけ給ふことの叶はぬか次に表へつき出して言ほどきの愁泣ねば に人形のづをふる拍子について、下のく~く~く~下の思案とうは 婦は底心から身を入て言詞のはづ也どふやらうはついておどける様 とめて三婦があいさつの極下の下のく~下の思案杯と言うちの詞三 だんめ程にはなし然れ共七太殿より格別よふござる團七一寸二人お お心つかぬは毛が三筋たらぬかい八段目能語こなし給へ共ひ力故六 せぬかなんのいな我でにした事をヲ恥しと袖おほふと有しかも御自 は又つようのふては叶はず其せふこには三婦がきづはいみたはしま たむをかくして一ばいつよみを見する心いきの語口でなければ叶は 十ヶ所も手負今を限りと言程によは / とくるしき心いきに語給ふ /〜いたすしかし爰に心へぬ事ーッ有一寸が女房焼鉄当っからの詞 つく様に聞へるはお心へ違か但しはお声ひりき故身を入てきめてせ J(四+2) 身も真鳥の三の口でヲヽヲヽく~く~はづかしと語ながら

#### **豆竹留太夫**

なおりました操の気は有声は丈ぶなり諷は別てよしきやうはだな芸しく詞の尻を一句/\に押付耳に懸りしが功者に成給ふに随い余程は太夫の部に入太夫ぶれさせて語給ふは目でたし先年より語口せはい物にて有しが一番/\に芸仕上られてめき/\/\と立身し近年[頭取曰]此人先年辰松初ぶたいの時鑓の権三の初語られし時は青[頭取曰]此人先年辰松初ぶたいの時鑓の権三の初語られし時は青

故がちとね」、四十三さ入ました其上此としお休もむふんべつ評判がうないと申評判芸程に評判のなきは花」、四十二之やかになき故也花やかないと申評判芸程に評判のなきは花」、四十二之やかになき故也花やかないと申評判芸程に評判のなきは花」、四十二之やかになき故也花やか成は野卑めくと申せと程らい有今少し花やかめと和らぎあらばきついで一台の所を能語こなし給ふ女の文句をかわいらしめ付ふとてはなへに合ぬ所を能語こなし給ふ女の文句をかわいらしめ付ふとてはなへ成は野卑めくと申せと程らい有今少し花やかめと和らぎあらばきつ成は野卑めくと申せと程らい有今少し花やかめと和らぎあらばきつ成は野卑めくと申せと程らい有今少し花やかめと和らぎあらばきつながからがア、かはゆらしなかつた御一生の出来は冠台戦の四の切のがあたがア、かはゆらしなかつた御一生の出来は冠台戦のかず美しながあるがア、かはゆらしなかつた御一生の出来は冠台戦のである。

#### 竹本要太夫

すく成て参る永休御無用く

てう人と語給ふは愛は上にて何まちく〜言を何てうく〜と言から武と成はんくわの地へゑり出されてのお下りいかいほまれと存取分夫と成はんくわの地へゑり出されてのお下りいかいほまれと存取分夫と成はんくわの地へゑり出されてのお下りいかいほまれと存取分夫と成はんくわの地へゑり出されてのお下りいかいほまれと存取分夫と成はんくわの地へゑり出されてのお下りいかいほまれと存取分夫と成はんくわの地へゑり出されてのお下りいかいほまれと存取分夫と成はんくわの地へゑり出されて当年悪した上下共にふじうなお声なれ共此度夏祭道具やの段殊の外出きました上下共にふじうなお声なれ共此度夏祭道具やの段殊の外出さました上下共にふじった。

一九

年者なればはげみ給へ御出せはたしか /~」(四十三2) 年者なればはげみ給へ御出せはたしか /~」(四十三2) 年者なればはげみ給へ御出せはたしか /~」(四十三2) 年若なればはげみ給へ御出せはたしか /~」(四十三2) 年若なればはげみ給へ御出せはたしか /~」(四十三2) 年若なればはげみ給へ御出せはたしか /~」(四十三2) 日にて熊殿のはらひだるいも皆はたらき過てあらし此人道具やの段まく前のノリ地は彦太殿よりおもしろござるなれ共まだ所々あまいたの長者めかぬ様に語給へ八段目存の外操の心いきをこめて能語らる、おもしろし / 小が徳兵へが義心の間七太殿よりは一ばい泣給ふる、おもしろし / 小が徳兵へが義心の間七太殿よりは一ばい泣給ふる、おもしろし / 小が徳兵へが義心の間七太殿よりは一ばい泣給ふる、おもしろし / 小の間七太殿よりは一ばい泣給ふる、おもしろし / 小の間七太殿よりは一ばい泣給ふる、おもしろし / 小の間七太殿よりは一ばい泣給ふる、おもしろし / 小の間七太殿よりは一ばい泣給ふる、おもしろし / 小の間七太殿よりは一ばい流給ふる、おもしろし / 小の間では一ばいたと関へにり八段目にで、一つが記さればとには、一つが記さればといい。

#### 豊竹若挾太夫

うけ能入を引を先とし何程名人にても人ずきうすく諸人あいきやうヶで許ずる人にはあらねど許の位付前後の座並はひいき多っ素人のすきと見へて素人の見物芸程に許判なくてはつゆふござる是程引下すきと見へて素人の見物芸程に請かいなし随分神しんじんして諸人語給ふぜんたいしゆぎやう能たりで功者成人なれ共しゆじやう縁う語給ふぜんたいしゆぎやう能たりで功者成人なれ共しゆじやう縁う語が返べ下り給ひし所内匠のせふうつしにて久米仙人の三ノ中お語肥前座へ下り給ひし所内匠のせふうつしにて久米仙人の三ノ中お語[頭取曰]大坂にては絹太殿とて稽古屋なされてお名高き人去。頃

#### 豊竹喜美太夫

#### 竹本西太夫

#### **屋竹長門太夫**

が潤色江戸紫二の切四、中いづれ共ほつこり共いたさずけつかふなで鎌倉大系図に大当ヶし給ひ其後五ツ鴈局の段道行いづれも能ござて鎌倉大系図に大当ヶし給ひ其後五ツ鴈局の段道行いづれも能ござて鎌倉大系図に大当ヶし給ひ其後五ツ鴈局の段道行いづれも能ござて鎌倉大系図に大当ヶし給ひ其後五ツ鴈局の段道行いづれも能ござい潤色江戸紫二の切めはねました事もとのりましたとかく此三段目は妙ったが翌年辰松にて又大けいづにて当りましたとかく此三段目は妙ったが翌年辰松にて又大けいづにて当りましたとかく此三段目は妙ったが翌年辰松にて又大けいづにて当りましたとかく此三段目は妙ったが翌年辰松に大当ヶ山といる。

いまださ迄のお年にもあらねば今一はた上ヶ給へ~~、附めき~~~~と秀給いしがいつの程よりか御評判うすらぎました原に御住居故先年は吉原新太夫と申せしが嶋太夫より長門と国名をお声なれば芸をはげみ給へたしかに御出世有ぞ~~長門殿は数年吉

#### 豊 竹 桐 太 夫

されず脇詰の衆は達者が第一でござる 関い口 | 此人去丑ノとし辰松座へ下られし所お声よく達者にてど | 頭取口 | 此人去丑ノとし辰松座へ下られし所お声よく達者にてど | 頭取口 | 此人去丑ノとし辰松座へ下られし所お声よく達者にてど | 頭取口 | 此人去丑ノとし辰松座へ下られし所お声よく達者にてど

#### 豊竹久我太夫

出られね共けいこや立給ふ故評判にはのせますア、大音をしたや世の三ノ中いづれもよぶござつたが遠ごへは聞かねし其後は座へは聞動有猿丸太夫初,切善司が腹切の段芝居少キ故能通り」(四十六ま)く出動有猿丸太夫初,切善司が腹切の段芝居少キ故能通り」(四十六ま)くいんで持程おもしろふ覚ました其後外記座へ出られ秀里の二ノ口行い。と発行をした。人で持程があしろふ覚ました其後外記座へ出られ秀里の二ノ口行いので持程があしろふ覚ました其後外記座へ出られ秀里の二ノ口行いの三人で持程が立て、大音をしたや出りれた。

#### 豊竹品太夫

猿

継

#### 豊竹井筒太夫

有⇒共ぬし達の部にては鳥の母言でなりと」四十七のと落取が勝ざる一たいきよふはだ故物まねを能なさる、余り度々故しかる人もみは是迄是よりの座並位付にて御得心有べしさるが中に 此人 一雨衆は達者が第一にて声をおもと評じます然れ共又達者声斗にも限ら衆は達者が第一にて声をおもと評じます然れ共又達者声斗にも限ら衆は達者が第一にて声をおもと評じます然れ共又達者声斗にも限ら、「頭取曰」 品太殿より此人を上座させよとさつとふ有人をござれど「頭取曰」 品太殿より此人を上座させよとさつとふ有人をござれど

#### 浄瑠璃評判記集成 ト

#### 豊竹三和太夫

師匠の出らる、に付て行れぬは未御本腹無 かJgu+パク まへとし程にはござらなんだ其後承ば御ひやうきにて引込れし由当の気をぬいて旅へ行れ其後又辰松へ出られしが評判の気ぬけし故か太殿の中へたてはさまり三庄の三ノ口にては大当タ せられしが大事太殿の中へたてはさまりもすくきょう成芸にて有し故辰松座にて七殿伊/頭取臼 | 此人急に芸仕上られ声ひらけて上能聞口中のもつれもそ/ | 頭取臼 | 此人急に芸仕上られ声ひらけて上能聞口中のもつれもそ

### 竹本喜代太夫

給ふ故末座へは出られねどお名がはつして御本望と存る評判では井つめいに語らるゝ若てのけいこやにて名取也声うつくしく能こなし[頭取曰]親御のお名を譲請て二代目の喜代太殿上るりはずんどは

#### 竹本増太夫

ぞ気付て情出し給へ油断では糸切すゝめに成。声からでござるお達何レも達者にてよししかしけつかふなお声にてさてもあまふござる達者に語られ評判よし当春居なりのお勤列二ノ切道行のつれ六の奥能冬より外記へ」四十九5 すけに出られ真鳥の四の切場はよし声は有」頭取日 | 去秋辰松へお下り有て富士見西行の二の口ことの外評判

#### 竹本重太夫

者故引上ケて御評判いたす

出給は、大にはねませふ物芝居もそん其身も御そん也寿の花なり給たる芸真鳥の三ノ口もない声で能こなし給ふ別て此度の夏祭道具やたる芸真鳥の三ノ口もない声で能こなし給ふ別て此度の夏祭道具やプロ道行ノ次七段目のわけ合三場共ことの」四十九2外能できましたを活徳也なんぼ聞ても地ばにはつめいあらざればよからず既に七太殿西行は態く聞に登り給いし由もつばら評判致せしが何を聞てわせしか扱おもしろなかりし然に此人能聞込下られしは一ッたひ芸にませたる所有故也とてもの事に去年出給はずわつさりと春より花に七太殿が扱おもしろなかりし然に此人能聞込下られしは一ッたひ芸にませたる所有故也とてもの事に去年出給はずわつさりと春より本にしてたる所有故也とてもの事に去年出給はずわつさりと春より本にしてたる所有故也とてもの事に去年出給はずわつさりと春より本である。

はゞ是程下座には評せず花は花とたて、要殿の格も有に ハレ ( おしき事かな ヤ

豊 竹 仲 太 夫

陸 奥 道 太 夫

竹

本

時

太

夫

」(五十才)

でござるノ 太殿と聞くらべては御きりやうに合せて格別よしけつかふなお役め と御改名芸者の度と名を替は御そん也お名が通りませぬぞ扨此たび 申て結城座の座本分なされしが其後肥前座では春太夫と成叉時太夫 段は桐殿よりてびしくて能し上りませふく~時太殿己前は梅太殿と 給ふ石橋の初切達者に能こなし給ふ此頃桐太替りの三ノ口石なげの れさせ給ふはそつちも御ふ調法也きれい成なれ共上るり古風にして と覚へしが夏祭のお役場を忘れました不調法まつひら御免しかし忘 J(H+2) 夏祭三ノ口六だんめ切のお役いつれもよし別て焼鉄の段能 かたし和らぎ給へく〜道太殿喜之助の時分とは声開き格別達者に成 頭取日 | 仲太殿は当年お休みかたしか新芝ゐに旧冬かんばん出し

竹本千代太 夫

竹本河 内 太 夫

竹 本 沢 太 夫

猿

 $\Box$ 

竹 本 奥太夫

は猶よしく も付ず夏祭にても初中也能語給へ共一声二声のこり多しく〜ニノロ 王ノ内にて上座にも立たき人なれ共ひりきにて残念殊更古幡广殿の 團七いづれもよし今少しうむみを付給へ達者には有ぞ奥太殿此四天 で有ふと存る沢太殿は中ノ座にて夏祭初の切七段め」「五十一さかけ合 は出られざりしに此度大にむつかしき名を付出給ひ夏祭道行の次お 吹や町河岸の芝ゐへ出かるかやの三,中にて評判よし其後久と座へ 直門弟に近年なられし由御表札にて見へたり功には有共ひ力故お役 せゝおかまいやるなはできました〳〵追付駿河太夫に改名なさるゝ 頭取日一千代太殿は当時お休河内太夫殿は己ぜん和哥太段と申て

豊 竹 嶋 太 夫

豊 竹 吟 太 夫

本 年 太 夫

も格別上つて聞へます木挽町の太子伝こくせんや三,中評判が大に 頭取日|嶋殿は石橋の四の中お寺にかった太鞁のお役場も能故芸 竹

竹本伊 豆太夫

よかつた吟太殿は奥太殿御同ぜん残念 /~」(エサーリタ)

頭取曰」ぬし忠殿と申ては大坂でも旅でも名高き仁也西風能吞込

#### 浄瑠璃評判記集成 L

を尋ますと年辰松座へ出勤五ッ鴈扨少く成給ふ事かな古兵物のうち成故お名と年辰松座へ出勤五ッ鴈扨少く成給ふ事かな古兵物のうち成故お名が古風にて堅っかき餅の様にてさせる大功もなく冬休居給いしが去大きに当り逢子の若河内通後三年十三鐘いづれもあしき事なかりしれて功者也先年辰松へ下り給ひかるかやの新作物にて阿は太夫ぶしれて功者也先年辰松へ下り給ひかるかやの新作物にて阿は太夫ぶし

## 卷軸 豊 竹 若 太 夫

| 頭取口| 御出性からやつてくりよ泉州堺嶋太夫とて何十歳己前の| 頭取口| 御出性からやつてくりよ泉州堺嶋太夫とて何十歳己前の三婦なのろ夫故巻軸に置也

#### - おやま人形の部

#### 辰 松 幸 助

山にて大当なされ毎日 / ^ 大入嘸お満足と存近所は太夫衆新額の暦当初芝い」(富士) ら抔は出来兼申様にも承りしに肥前殿と迎合れ石橋て人の知つたるお名なればかくのごとし扨近年はか / ^ 敷お当なく【頭取曰】 只今は八郎兵衛殿と申せ共古人と紛ら敷其上在~所~に

悪しいごかぬも悪し其場く~によるべき也とかく心いきを頼ます先 此度はきついお手柄くく」(五十三) るくらい有てさも岡崎殿の奥方らしく見へます肥前殿操語故たしな 仕うち又野を留らる、間の身ぶりつよからずして女の情自然と顕ま の少しうすきこそなんなれ人形一道は生れ付たるお人故別て申に及 み給ふか但しはお年寄れて御太儀故か何にもせよ余りいごき過るも に近年別って此度などは人形いごかず只風俗てんねんとそなはりた を失ひ給ふべきに爱らがしぜんと生れ付たる所也六七年いぜん迄は す外の衆なら手をひろげ足拍子ふみ抔してあら事がましくて女の情 ぬ也此度石橋の三与一が母の役色香姫にいけんJ(\st=\st)言る、中の よし悪言れいの | 頭取日 | イャ此人の芸善悪は改申に及ばず心いき かい辰松の入有と外二軒のないとかけ合わい入のせんぎせずと芸の 有故也 | 若松組七太組 | 当り / 〜とやかましい芝居の大小を知れぬ 三ノ切にては見物ときの声で悦ぶは偏肥前の働と申中芝居にひいき る、に古物を引直したる斗にて初日出し給ひし処近年無類の大評判 人形こせつきいごき過て心いきもなふ遣いのめし給ふがきづなりし にて大坂大当り評判有新上るりをいしやう道具立に大金入てせら

#### 桐竹勘四郎

と森竹小八殿とくらぶる時は四分六分か五分五分かと申物也勘四殿分此度道具やの娘一寸が女二役共にお隣とは水際立て見へます此人出しが近年中,座へお勤有て又御評判そろくへわかやぎ出ました取能後藤が女房大当,也其後はさしてはねめもなく人形にいやな身振[頭取曰]去。酉,とし肥前へ下り武例にて長者が娘ことの外評判]

たしかに違ませふと存る当地をはなれた。 では、大いのでは、いいのでは、これではないのでは、これでは、いいの

#### 森竹小八郎

|「第十四の| | 「第十四の| | 近年十四の| | 近年十四の|

#### 坂東音五郎

達物の部でござる 達物の部でござる さるぜんたいきようはだ成芸にてしかも心いき能を付給ふ今お山師 達お山引請て能こなし給ふ此度三鶫が女房団七が女房いづれも能な 上られて寿八郎殿御病中は替役見物が見違へました其後もおつはれ 上のれて寿八郎殿御病中は替役見物が見違へました其後もおつはれ 上のれて寿八郎殿御病中は替役見物が見違へました其後もおつはれ 上のれて寿八郎殿御病中は替役見物が見違へました其後もおつはれ 上のれて寿八郎殿御病中は替役見物が見違へました其後もおつはれ と芸仕

轡

#### 本彦三郎

山

芝居の御損じやが芝居の御損じやが

山本平八郎

吉川幸十郎

辰松十四郎

たがゆかより語であてがふに合せてはまつと遣れそふな物」『モーエン所ごかくと評いたす扨又十四殿石橋山の四どんどべが女房できましなさるれ、宗のいごき過る故三婦ちへうすく見へます然る時は御両きず両用共に能こなし給ふ別て此度の駒舟大役出来ました京四殿能「頭取日」平八殿はお休幸十殿は此度駒船の役お山立役やらすのが

西川藤五郎

辰松八十五郎

松鳴文四郎

#### 净瑠璃評判記集成

さ)取も見分ヶじまん也音殿はわかふても初る、よし 様にあらず落居給ふ扨はお心付しかどふでもお古い程有是は」気も大 房の気のつよさとあれば戸を引立て落付い給ふはづ也が此間は初の て立ついろうろく~し給ふこと有しが御りゃうけん違と存るやる女 が女房御大役できましたしかし駒舟が女房夫を出入に押やりて跡に 行にては小八殿もふり給ふ故御両所のお首のいごくでじやくへがま る、近年大分上りましたしかし首ふり給ふおくせは今になをらず道 いる八十殿は石橋山色香姫大分上りました文四殿は三婦が女房團七 頭取日|藤五殿は道具屋娘お中と一寸が女房お辰二役共に能なさ

#### 立役人形の部

松六三郎

格別御尤に存る四だんめどんどべい別て能なさる、二役共に格別或 上首ぬかれしはさんくくなりしが此人はひざに敷て首ぬき給ふ是は 九殿遣れし程にはあらねど格おとつても見ゑず東九殿大弥太をさし よつて同じせはもげさく成事」(ヨーホッ)程よし此故にごかくの内にて 代の辰松風の手筋にてもみ上ヶ給い故芸にいやみなく野卑成所なし お名高き六三殿を上座に立る也別て此度さなだの与一先年大坂ノ藤 » 兵殿は芸当世にてはで也操心き格別よし能身を付給ふ芸の心ざし てきたるはなしおしき事には荒事てづよくなし人形首をすつ込べ事 時代せは共に能なさる、当,多き中に武例の長者今川の才蔵是ら程 は格別すくれ給へとおしき事は一ッたいがげび也躰くづるゝ也是に 有是ぞおきず也兵蔵殿此人ごかくと申評也此人は上下事を初位有能 頭取日一今ひの出の立役師多き中に此人につゞく人はあらじお名

木 村 兵

頭取日一改評には及ばねど当世に向たる芸にてはで成はお徳也是

此人幸五殿六さ殿と寄て此ばが見たいア、金ほしや座本せふに のくすぼる様に語給ふに遣うちで色が有思ふ様なら肥前殿に語せて 兵衛せつた出してより段とのしうち綻縫内女房にぬれ懸る間床で渋 くさく~ころされて死かねる間の遺方いやはやどふもく~八段目徳 て夏祭」「ヨーセオ」義平次田舎侍の間よし後に團七をひがめるうちのに 武者ぶり抔はあの芸のはつめいさにてはお心が付そふな物じやが別 つたしかし人形のたいがくづれますがきづ也鎧武者さんく~あじし **迄何せられてもあしき事なしよく / ~の事去冬かとり姫の犬迄よか** 

森 竹 幸 五 郎

めの操で六分も八分も持ました れば前後と申にもあらねど三は一にきするの心にて爱にひやうじま 少しかいなししかれ共是迄の三人いつれも一くせづ、持給ふ人也然 るごとく上下事の見事さどふもく~しかし世話事はかいむ也心いき めかぬ様に心いき有たし此度の夏祭は兵殿と此仁の七だんめ八だん 頭取曰一立役人形荒事抔のてづよさこんりんざひよりはへぬいた

#### 西 Ш 郎

頭取日一此人近年めきくくと秀られ此度夏祭に團七九郎兵への役

だんめもよし何とぞ達者にして進ったいいまはまさりました七だんめ舅に記るを聞入ずきのどくにこまついいきはまさりました七だんめ舅に記るを聞入ずきのどくにこまつい兵故たよはき所有て幸五殿程に大丈ぶにはなけれどこせついたる藤川平九仕立の人形にて身ぶりうつして遺ひ給ふ故大分出来ました

#### 豆松 国 三郎

| 頭取田 | | 江戸知らぬ人に五百羅漢と此人の芸上つた」 | 五月八寸を見したはりでつくと言れてはるか飛のいて居る、別兵殿にはおとりましたはりでつくと言れてはるか飛のいて居る、別兵殿にはおとりましたはりでつくと言れてはるか飛のいて居る、別兵殿にはおとりましたはりでつくと言れてはるか飛のいて居る、いてかしこまり居給ふ故ま男の様にはなしたき付と言文句で抱付給いてかしこまり居給ふ故ま男の様にはなしたき付と言文句で抱付給いてかしこまり居給ふ故ま男の様にはなしたき付と言文句で抱付給いぶんはげみ給へ追付きびしからふ

#### 西川重三郎

### 森竹京四郎

くにくていになふては親をころせし團七にふびん付ずおぬかり有仁も存ぬがにくげがうすらぐ故後ノ團七がふかうの様に成ます舅は極くていに能なさる、が舅手負てのワイフゥくヽはおかしうてお徳か【頭取曰】十三殿三川や義平次田舎侍の段よしJ⊆+八º七だんめに

どおちるをかちと仕給ふ素人は悦ますます今少し落付給は、猶よかるべし御両所共にぬる間仁にはあらね人形のこしらへ能別で能遣ひ給ふしかし釣船に分別なしの様に見へにはあらねど落の有を徳と思召で有ふ京殿の釣舟市山傳五仕立にて

#### 广善次郎

薩

#### 松井傳九郎

年役に立て上座也水とお休み有しが当から又御出勤めでたし此度夏祭道具やのお乳お水とお休み有しが当から又御出勤めでたし此度夏祭道具やのお乳お相替らぬ芸先年」(五十九岁弁長のこときあたりを見たいく)傳九殿は「頭取曰」 善次殿は石橋山梶原千寿前二役いづれもよし己前も今も

#### 岩井文次郎

辰松安五郎

股の、五郎役出きました御両所共は上つた〈〉色をふくむ遣方大にでけました安殿は辰松座石ばし山に後藤兵衛と【頭取曰】文次殿は若松座夏祭に傳八のお役にくていにそ、かしく

#### 吉川清次郎

坂東友五郎

山本弥四郎

#### 浄瑠璃評判記集成 上

敷評判也今年の文蔵」(エ+九ク)別て口中あほうの間能ござる友殿磯之 頭取曰|清次殿は別てめきく~と秀られ去年西行の才藤五はきび

の為同座に御評判いたす 丞大きによし弥四殿でん八よしいづれも若手故甲乙はあれ共はけみ

西川六十郎

勘定所のお勤御老年の御太儀也しかしながら其昔名取の立役師なれ に出られし故定て座本若松殿に御内縁有にや後見と表札改芸を捨て 頭取日 
久々御出勤もなかりし処此度肥州世務をのかれ二度の勤

二八

ば若ての秀る人とを前へ直し惣巻軸に置ます芝居は評判よし御子供

丙延享三年

たき」(六十オ)

**聟**入舅入入に入増す芝居の繁栄四海浪しづかにておさまる国ぞめで の評判はよし嘸~おめでたふござりませふ御子息も御年頃追付嫁取

書之

二(六十夕)

寅三月下旬

## 操曲浪花芸

操曲浪花芦序

なし、別而、此度、菅原伝受、念仏の段の、語り内、

り、名を西照庵といふ、此所に、やすらひ、酒一つ、たべき、天王寺を出て、西北に、歩事、五丁余りにして、庵あてら、天王寺を出て、西北に、歩事、五丁余りにして、庵あてら、 兵衞の場の、大あたり、 段々、町中に贔負まし、其後行平の四段目の、ふし事、 此 浅黄に、こまがたべにがのこ、の、大あたり、<<、大より、 居へ、始て、出」Clay られしが、 大政入道の四段目の、 w す、此太夫殿去ル、元文の比、美濃太夫と、いふて、 筑後芝 取って、聞くとも、知らず、竹本がた、今世に、 もてはや 評判、ひとりは、竹本の門流と見へ、筑後芝 居、最負、今 重、あなたに、若い衆、四五人集り、芝居の噂、とりくく、 の、打ッこたへつ、今日の慰み、是ならんと、 耳のあかを んと、二三人づれ、にて、あがり吞かけしが、ふすま、 いつ見ても、煙の、ふとき牽頭をと、読しは、 一人は、豊竹門弟と見へ、 上野のかたを持て、 夫より、替りの、度し、あたらずと、いふこと、 /~、其名をすぐに、 此太夫と、 出るまゝ

曲浪花

書

じめさるな、此出入、拙者、もらひ、ます、双方一利窟、

に成がたし、此太が、 語らるゝ、白太夫の場の語り内、大 の、満足、去りながら、夫は皆、最負の沙汰、にて、評判 有ュ之」ミロポおもしろき、評判、上野、此太夫、身に 取て

きにさみしたまへとも、此場の、 文句、 桜丸の、 出 る ゝ

て、笑をもやうし、大きによろこび 夫より桜丸の、切腹刀迄、大きに、めいり、見物も、 気のつきさらん所をかへっ を、渡されかいしゃくに、なき、〳〵、 念仏 の、おも 入

がら、それがしも、七十年来、此道を好、心がけしが、幸 の語り内、よし、何れを、いつれと、言、かたし、 さりな

の、ごとしに、見立し」言う 是に、段々を、書たるを、持合せし、これ、 見たまへ、 左

大上上吉 見立なぞ左のごとし 竹本此太夫 三芝居

ど味が有る . き装 「 -此人のこへを。玉子酒といふ。心は。下ヶほ

陸竹佐 和 太夫

此人の上るりを。珊瑚珠といふ。心は大きけ れは、大銀に成

上上吉

竹 本政 太 夫

此人を。兵庫渡海といふ。心は。播磨迄は行かいやうことうかい

上上書

此人の上るりを。鞍馬のふごおろしといふ。 心はうへより下々へ取る

此人の声を。郡内嶋といふ。心は。地がよふーーーーー豊竹 陸 奥 太 夫

て。うつくしいはさて

此人を。大夫年寄といふ。こゝろは。上るり 竹本錦太夫

上上書

此人の声を。よくな馬かたといふ。心は。 豊竹上総太夫

第一二がはるはさて」(三ヶ)

此人の上るり。勝間もめんといふ。心は。器

上上書

竹本文字太夫

用なれど地がよはひ

上上書

此人の音曲。雪ふりといふ。心は。しっぽり

上上吉

として面白ひ

此人を。むかしの。紅といふ。心は。初は裏

が能ふて今はさめたり

E

**ぬ**(三ま)

竹本 志 广 太夫

	上上	
•	曲	
	豊竹で	
	釆	

女太夫

上上書

此人の声を。ほし月夜といふ。心は。上が賑った。 しがこまかひ」(四オ) 此人を。かん竹のつへといふ。心は。第一ふ 竹本百合太夫

上上

ハしひ 豊竹伊勢太夫

此人の上るりを。閻夫といふ。心はふるひををといる。 陸 竹 冨 太 夫 よいといふ

此人の声を。冨の札といふ心は。二より一が

上上

陸竹美知大夫

くもむまひ

上上

陸竹伊豆太夫

めがよいといふ」(四ク)

此人の上るり。上手の将碁といふ。心は。つ

此人の声すいしやうの玉と。いふ。心は。少めいたの声 陸竹桐太夫

上上

此人を。年の明た女郎といふ。心は。はて町

豊竹鐘太夫

軸 大上上吉

上上

てもうつくしい

竹本友太夫

上上

なる

此人を。いかのぼりといふ。心は。空てよう

るへどこまかひ」(宝す)

此人の節をうどんの粉といふ。心は。ちとふ

豊竹春太夫

上上

陸竹常大夫

ふてもはぎれが仕る 此人を。宮の前のほそづけといふ。心はほそ

此人を。天王寺からうつす相庭といふ。心 は。平野へ取るはさて

陸竹初太夫

上上

此人を。小米上るりといふ。心はかみしめる

とあまひ所が有る

此人を。なら鳴といふ。心は同じ鳴でもうす 陸竹 嶋 太夫

上上

ふてよはひし、宝さ

豊竹上野少掾 藤縣

りの。心がけゆへ段々浄るり上洛致され。内匠大夫と。名を改。夫 より竹本座へ。出られしが。ますく~。上るり実のり。功者と成。 ○上野少掾。初は三和大夫とて。豊竹芝居に住れしが元来若き比よ

操曲浪花 芦 上上

#### **浄瑠璃評判記集成**

まはりり、しく。ぬれ事やつし。つめ所作事の名人。かゆい所へ手 とへは。瀬川菊之亟に同し。なぜと云へは。小兵なれども。取り けふかき故と。諸人珍美する事。御手柄〳〵。此人の芸を。」云さな跡目相続をたのまれ。則上野少掾を。付られしは。日比音曲に心が 成べき大夫もあらんと。思はれしに。此人ならではと。思ひ入られ 西之座で。巻頭致されしが。越前どのも。老年に及び。誰か跡目と

持やう。銀持かたぎ。第一諸芸器用にして。筆道の達人。心すなを去によって。瀬川とのとの見立。尤音声の。非力はぜひなし。身のの行がごとし別而段切を。大事にかけらる、は。上手芸のなす所。

にして。上るりに位々あり。豊竹の跡目と成しは。あやかり物。お

#### 大上上吉 竹 本此 太 夫

年より。此道を好み。ついに。商売も。せんくわとなり。」(六2)もみれん 此太夫は。初は美濃太夫と言し。内の名は。合羽屋伊兵衛とて。若したく て。つぎめよふ。語り給へどさすがにも。うれいの段は見物も。袖 ぎんうつくしう。かち合羽。修羅段切の手しぶきに。木しぶをまぜ 羽。三重の声のつきめも。のりじつよふ。つやなき に。油 を引 き ぬいたは。合羽より。浄るり。第一声は。下のつよ い を。受 合 合

後く、がたし。其人は。おも白く。名人なれども。 まねの出来 ぬ は。 難がたし。其人は。おも白く。名人なれども。 まねの出来 ぬ は。 難がたし。新ぶし [イヒォン 多し。夫故町方にても。此人の通りは。かたりして。新ぶし [イヒォン あ。ダ をむゆべ

#### 上上吉 陸竹佐和大夫

道具と。見物どっと。誉たり 佐和大夫は。佐兵衛とて。本は旅芝居の。三味線ひき成が。心はつ し。声の非力はぜひも。なし。此上に声丈ぶならは。箱入の。小判い。 又をかしき筋も有。是其身其音曲の。そなはりし。名人なり。しか して。うつくしう。地事ふしごと。芸に応じ。うれい事あはれに。 入にあてん事を。第一となさる、。故。見物うけよし。此人をたと 陸竹芝居江。住給ひしが。つき出しより。評判よく。 見物の 御意 日の宮にも。少しの内。けいこ。上るりに。出られしが。ほどなく。 へていはゝ。嵐新平仕出しに同じ。何所やらびらついて。又しゃんと ふ。語り。」(セク)今の浄るりを聞に。おとし一流。かはり。おもひ に入るはづ。先音声能。とりまはりはつめいにしてふし付。おもしろ 而尾州などでは。殊之外あたり。夫より段々上洛致されし。当地朝 めひにして。つゐに上るりを語り習ひし。諸国修行仕られしが。別

#### 上上吉 竹本政 太

し付の。細かき事は。ゑぶな子のごとし。段々出世。名を上ケられ。毎日けいこに。飛魚と。心にちかい。立チ魚の。長ふみじかふ。ふまいにもというをというをというをという。というをという。というをという。というを 政太夫は。ざこ場重兵衛とて。元来魚屋。鮎より出て。猶愛ふかし。(すれんらい)あい

味ひ。あまり功者にて仕過る事多し。さるよって。ふし 付 細 か にきざは しょうしょ しょぎ 間に合ぬと言事なし。先地事ふし事所作やつし。修羅段切詰などの

見立し。なぜといっは。先は芸の一躰功者にて。何を語らしても。

するは。あっぱり功者名人なり。去によって。此人を市山助五郎と 合羽をしぼりつゝ。ついにつぎめも。はなるゝほど。見物もじゆく

で、の。くせを。御たしなみ有って。気を付給へは。次第に。名人が第に。なぜといっは。当世芸にて。何事も。おもしろふ。致」へ、とは。今で小ざらしや。はりまどのは。ぼらなれや。同じ姿でも。大は。今で小ざらしや。はりまどのは。ぼらなれや。同じ姿でも。大は。今で小ざらしや。はりまどのは。ぼらなれや。同じ姿でも。大は。一年でいざらしや。はりまどのは。ぼらなれや。同じ姿でも。大はのでいざらしや。はりまどのは。だかへて。飛ぬけの。出世次第に。むまみもつき。日を。はらに。だかへて。飛ぬけの。出世次第に。むまみもつき。日を。はらに。だかへて。飛ぬけの。出世次第に。むまみもつき。日を。はらに。だかへて。飛ぬけの。出世次第に。むまみもつき。日を。はらに。だかへて。飛ぬけの。出世次第に。むまみもつき。日を。はらに。だかへて。飛ぬけの。出世次第に。むまみもつき。日本

# 上上曹 竹本志广太夫

の部に、入たまふぞといへり

(ガツ) 大さへ。調へは。おそらく。おそるべき。事も有まじ。勘要くておとりたまはん。此上はふし付。味みの。たんれん。気を付たまへ。を崩さず。かたりひしぐ事。すさましく。御声の分は。誰ぃにかっくず

#### 上上書

### 豊竹陸太夫

# 上上 竹本錦太夫」(+\*)

操曲浪花芦

### 豊竹上総太夫」(+ゥ)

### 

#### 上上

竹本文字太夫

仕うち手よはけれ共。取まはし功者にて。見物受よしつめ。のたぐひ。ちと甲斐なき。音声。此人山下又 太 郎 同じ 芸のから、「大」の) から、 のたくび。 ちと甲斐なき。 音声。此人山下又 太 郎 同じ 芸のいくれども。 気を付たまふ。徳には。ふしごと地事。よじ。 修羅のり、一次では、 のの間に。 あふむ小町。片時も。 はやく。芝居へ出んと。 から、 から、 ののよもかよひ。 小町なんなく。」此人音曲に。 なづみ。 雨のよも。風のよもかよひ。 小町なんなく。」此人音曲に。 なづみ。 雨のよも。風のよもかよひ。 小町なんなく。」

#### 上上吉

### 豊竹駒太夫

始は。よかりしに。今は少し。めいりし故。此所に。直し置々べしめ。まだ其比は。土佐駒で。ちいさも奥刕駒。むちは。うたねど。り。段々。功も行。次第に。ひいきも奥刕駒。むちは。うたねど。ち、さぎよふ。はんなりと。せし一ふしは。さながら」(十二ま)さへたいさぎよふ。はんなりと。せし一ふしは。さながら」(十二ま)さへたる。月け。の駒。元来。此人器用にて。我か一流を。かたり出し。るかんづく。御病気故。御声の裏も。あれはて、。曽我殿ばらし。なかんづく。御病気故。御声の裏も。あれはて、。曽我殿ばらし。なかんづく。御病気故。御声の裏も、あればて、。曾我殿ばらの。やせ駒と。なられしは、のよいさも、大きに、のなぎと、当地。炭屋町の。人なり。駒太夫と言しを。越前芝居に。つなぎと当地。炭屋町の。人なり。駒太夫と言しを。越前芝居に。つなぎと

#### 上上吉

### 豊竹 釆 女 太 夫

へは芳澤崎之助仕出しの音曲也段々に上洛致さるへし今が芸のさかみ込うすししかし近き比は床なれ給ふかげんかのっしりとせしたと事。道行の。類は。うつくしけれど。修羅。せりふ。『午三』段切の御名に。ひいでし。音曲なれど。少し。地も。かよはき也。尤。景彦太夫ど。いふ名も早ク。さる沢の。 采 女 太 夫と。うつくしき。

### 上上 竹本百合太夫

は。何の故ぞや」(キョャ)は、何の故ぞや」(キョャ)とへは、三保木七太郎、芸に、同じ、功者なれども、あたらぬたとへは、三保木七太郎、芸に、同じ、功者なれども、あたりて、あまり、とんだふしを、かたらず、それゆへ、左ほど、あたりめも、余程、上洛敦されし、しかしりち気なる。音曲にしが、浄るりも、余程、上洛敦されし、しかしりち気なる。音曲にしが、浄るりも、余程、上洛敦されし、しかしりち気なる。音曲には、人生国、丹州なり、爺打栗の、比より。もっぱら、語り、出され此人生国、丹州なり、爺打栗の、出まり、

## 上上 陸竹伊豆太夫

り。しかし。上手ゆへ。あたりめ多し。中村富十郎に。対せりふし事。修羅段切も。分相応に。こなし。たまへど。何分。小兵なすいの悦。音曲なり。元来ふし付よく。語り口。おとなしく。地事此客人之上るり。町中のおもはくよりも。功者分の上るり。夫故。

## 上上 陸竹冨太夫

すへの。ほど。たのもし。かろふのにれた。気の付かは。年来の心がけ故。面白し。今少し。若けれは。れた。気の付かは。年来の心がけ故。面白し。今少し。若けれはでたとへは。民屋四郎五郎に。同じ芸。音曲おとなしくて。つまはづたとへは。民屋四郎五郎に。同じ芸。音曲おとなしくて。つまはづたとへは。民屋四郎五郎にでは。外し。音声下洛致さ当への。ほど。たのもし。かろふのに

### · 费竹伊世太夫

操曲浪花芦

### 上上 陸竹桐太夫

いづべし ない。 ない、 をよく。かんがへらる。べし。すへく、は。名も ない、 を動で聞かはお聞なれど。まさか。床にては。左ほとにもなく此上 を敷で聞かながきた。とりぼうきと。ねかひたまへ。此人を。たとへ は。坂東豊三に。にたる。音曲なり。すなをにして。よし。此上修 を敷で聞かながたりに。成しが。商売からと。さっぱりと。はいた。 と、上るりかたりに。成しが。商売からと。さっぱりと。はいた。 と、といいでは、 と、さっぱりと。はいた。

# 上上 豊 竹 鐘 太 夫 」(+212)

出てから間もなきに。町中の最負が。つよひ出てから間もなきに。町中の最負が。つよび、中では。顔も赤間がは虎石を担いとし。しかし。床なれぬ故か。人中では。顔も赤間がは虎石を担いとし。しかし。床なれぬ故か。人中では。顔も赤間がは虎石を担いとし。しかし。床なれぬ故か。人中では。顔も赤間がはたれば、出しがまだ。青石と。おもひしが。中/〜声の。かたさまない。出しがまだ。青石と。おもひしが。中/〜声の。かたさまない。出しがまだ。青石と。おもひしが。中/〜声の。かたさまない。出しがまだ。声石とのは、大きは、中では、一であれるが。一であれる。出したの道をは、一つのかれる。

## 上上的竹本友太夫

ふ。 芸ぶりに。ひとしそは/\として。さながら。芸のやう な りと い 芸ぶりに。ひとしそは/\として。さながら。芸のやう な りと い 随分気を付て。語りたまふへし。此人を。たとへは。吉田万四郎。 かし何と言ても。出られてより。聞もなき事なれは。諍事。あり。 かし何と言ても。出たるは。誠に音曲のせいに入し。徳ぞかし。し たことう 座へ。出やうに。成たるは。誠に音曲のせいに入し。徳ぞかし。し たことう 座へ。出やうに。心をつくし。もみ込たる。ゆへ。今竹本。∫←ヰォ > 大大夫は。音曲に。心をつくし。もみ込たる。ゆへ。今竹本。∫←ヰォ > 大大夫は。音曲に

## 上上 豊竹春太夫

し。甲斐ないと。いふも、はれど。しっぽりと。仕たる事。今少り、うは調子なる事は。よけれど。しっぽりと。仕たる事。今少中村次郎三。仕出しの。芸に。似たる。音曲なり。なぜならは。少きそばに。すれは。さながら。けんどんにも。なしたとへは。「(+ヰゥ)きそばに。すれは。さながら。けんどんにも。あれど。三味線で。引ぬおもしろし。折には声の。きれることも。あれど。そば切で。よるり、語り口此人。うどんの紛の。商売なされしが。商売ににて。上るり、語り口此人。うどんの紛の。商売なされしが。商売ににて。上るり、語り口

## 上上 陸竹常太夫

っこりとして。利功なれども。とかく上へは。行にくし修羅段切に。修行なされかし。たとへは。嵐勘三に。おなじ事らよ幕道しがたく。去ながら。ふし事。景事。のたぐひ。おもしろし。常太夫は。音曲。功者なれども。本・座敷上るりにして。床にては。常太夫は。音曲。功者なれども。本・座敷上るりにして。床にては。

### 陸竹美知 太夫

上上

## 上上 陸竹初太夫

へ精の。一字が。かんやう。/〜 という。一字が。かんやう。/〜 という。今では名も出ねど。修行の後は御名も出るへし。精出したませり。今では名も出ねど。修行の後は御名も出るへし。精出したまれる。床なれるべし。此仁たとへて言は。」(十六2)坂田文重郎に。対第に。床なれるべし。此仁たとへて言は。」(十六2)坂田文重郎に。対策に、きこへさむらへは。ずいぶん。気をつけ。もみたまへ。声も次陸竹の芝居。江。今が初太夫。音曲小兵。一体上るり。器ようはだ

### 上上 陸竹鳴太夫

太夫評判記終」(++\*)
太夫評判記終」(++\*)
太夫評判記終」(++\*)

#### 〇作 者 之 部

古今之名人 間人あらは 元祖近松門左衛門

ぎんのさじ(絵略) 春草堂 為永千蝶 並木宗輔 ほうび」(ナセク)

<sup>切極</sup>上上吉

竹田出雲

大上達大 世上吉 上吉

小出雲 極上上吉 〇三味線之部

安田

上上吉

上上吉 上上吉

Ė 上上 上上 上上 大上上吉 立 野澤善四娘 竹澤 鶴澤平五郎 野澤 喜八 鶴澤万三郎 野澤文五郎 鶴澤伊右衛門 鶴澤友治郎 豊竹座 陸竹座

上 上 上上 上上

小河

浅田

極上上吉 〇人形つかひ之部

大上上吉 若竹東九郎 吉田文三郎 豊竹

操

曲

浪

花

挡

中村勘四郎

上 上 三重 三重 三重 野澤 鶴澤太四郎 竹澤乙五郎 喜·助

ワキ

竹澤正五郎」(十八十)

五段続

上 上上吉 上上吉 上上吉 菅原伝受手習鑑さればないます。 土佐 幸助 上上 上上 上上 上上 上 上上 上上 上上 上上 上 竹本座 浅田元三郎 吉田八太郎 桐田 浅田太四郎 吉田清治郎 山本伊平治 桐竹門三郎 吉田 桐竹助三郎 北松文十郎 土佐市重郎 桐竹源十郎 才治 千蔵 源助 甚六 オ 重 紅 梅 服 上上 豊松 平五郎 上上 上上 上上 上上 上上吉 上上 上上 上上 上上吉 豊竹座 喜代竹喜四郎中村源三郎 瀬川 若竹東五郎 豊竹祐治郎 若竹清五郎 植松半四 三浦新三郎 山本彦五郎 笠井源十郎 藤井小八郎 若竹伊三郎 **滕**井小三郎 平助 郎 上上 上上 上上 上上 上上吉 八郎射往来 中村吉三郎」 出来島安兵衛 浅田祐 芳川 松本治郎七 笠井藤四郎 浅田祐十郎 笠井源三郎 芳川亀十郎 大野叉四郎 玉川又三郎 田中平治良 芳川勘之亟 笠井音十良 干郎

上上 上上 陸竹左馬太夫 桝太夫

石操曲難波芦は太夫衆あらかたの評なり 右両人はい まだ評判
いしか 不知、候あいだ爱に出し候

三七

近日出来

操曲旁観記

小は

ルる

ふ.

ゥぅ ふし

クく

ルる ふし

ノのを かい ふい ふ

ノル中フシ」(三十ゥ)のるちうのふし

コ

ハ

ij

はるいき引 こはり口の

七ツ

ユゆ

りり

極しもの

ハは

ッっ ミ

右は太夫衆作者衆三味線人形之類委く細評仕候而本出シ申候」

○文字のしぬる様に語る事。 \*\*\* ○手ずさみする事

○かしらをふり語る事

○ひじをつかへ語る事

大かた右の分あしく候 けいこをははれにするぞと おもひなしはれをは 歌に二首 音曲はたゞ大竹のおんきょく 清くて節すくなかれ」ミキャごとくにてすぐに

つねの心なるべし

二の口|さてそののちト語 初段開|さてもそののちヶ語 くらひ有にあしきことなし 少しおんにくらゐをつけてかたるなり

さるほどにトかたる

右同断

いせ

キぎん

ル

フシーいろく

有

ッイモンいもん

御ぞんじ

セセ

ツっき

+4 ウう

ものさ のかい たん

イ

セ

才

地色 すこしかた 右同断 右同断 かたるべし 地中 りのもうの通

ヲクリ ゥ

ヲク

IJ

ほうかざ

イせイ

地ウラく

しやうの通

しさゐなし

くいふへし

しさいなし

五の口 四の口 三の口

かくてそののち語 さるあいだトかたる

道

行だしのつしりと

1 ル くりはいろ へひく サさ

ロろ 10

此ふしのど

۲٥

ス**ヱ**テ

ことばにかゝ 色はかたくいふ る 詞に わうにかたるくらる有はさう

タタキ

歌がゝりし

色かる

ものなり

ij

つけかたるのりはいさ

三ツ

ユ

IJ

同断

同

色

Þ

らいかたるかなにてひ サき 入わ y b めかたし しものさだ り

-	ナント	うたひの内で	は中て切り
色ヲクリ	ナント フショクリ ユリ 極	イセヲント りし がせおんど 歌が、	インエアンスをとれている。アニックスのアンスをといった。アニックスル
五色共かはるなり	キンヲクリ	舞 あとをひく	中キンクルキン

三八

表具 うつくしい ナニヌネノ ワ ラリルレロ ヤイユエヨ 7 タチツテト サシスセソ カキクケコ アイウェ つき上ヶ三十 つりかね三十 丰 ミムメモ ヒフヘホ ウヱ オ ヲ 四十八有 口中開合の事 もの キョイ ナな くり上ヶ三十 しころ三十 , ヲ ヲ スす 三重 なおすふし はかのふし 付かたる かいきおい なひ 鼻喉にわうずはなのんと 鼻喉にわうずはなのんと 身にわうず 歯も唇もひらく歯をかみ唇をひらく 舌をだし口を中に開く口をすほむ 鼻よりいづる 唇にあわせず あぎにわらず 歯にわうず くちびるあふ 歯をかみ口をほそむ 腮にわうず 色と有共定かたし」 フシは 本っ シ てよしくぎりをひい 上かたる (サーク) とうり ユリの 平調は 黄鐘は 一越は 一調子之性

> 春のとのこゑ 夏はのこる

用きはのこゑ

冬口びるのこゑ

したのこる

(世三オ)

平調盤涉 左りの図のごとし」(サニッ) 双調黃鐘一越 右にしるし有十二時の調子 十二時もおなじ事とらの時を平調にあて申候それより次第ノ〜なり 一四季の調子 土用は一越 秋は平調 夏は黄鐘 冬は渉い盤 春は双調 呂の音よろこひの音とするなり 界にくるしみ 律の音かなしみの音とするなり 多" 依也 夫は地に用ゆへ下 夫は天に司ゆへ天にべつなし多に依て也 雌蘇維 日の調子 \* | W | W | Y WAS A 正月正調

大三重

ユ

ーリの

か

ウレイ三十

上をくり

三九 (世三夕)

操

曲 浪

花

芦

#### 波 うね v) 鼎 噂

波のうねり鼎噂

をもてあそふ折々は夜念仏茶つけの塩ともなりぬ又宮内」殿佐々木大鑑の末段の栄ゑ今 槌の子はやりもちまても此道 のあられに歯をいためふと思ひけるに其、昔天王寺五郎兵衛銭銀がなければ短 夜さへ寝られすむっしゃくしゃとお笹ヶこ

ことに唐人に乳とやらかし 人形の三つは庚 申の若衆に似て一つかけても見ずきかず三(ユオ)けい古屋等も夫々に声をわけ節 を述る上留利三味線 つの太皷のてんから栬子に無里がきて予も慮 外を呼出すま

東西~~大夫さみせんあやつり重問 のはしまり かち~~ 時首夏吉日

豊竹越前少掾

節はゑりかうせん・なぜ雪の段切であった 声はこけしくず・とははて内通にやった いん居してまだじゆずもたぬ伊勢参り

巻頭

大上上吉 節はなすび香物・なぜもどってからうまい」ニュー声は床のひゃうぶ・とはひくふてもたてものしょ 竹本此大夫

上上吉

陸竹佐和大夫

節はちりめんのか、へおび・なぜしめるほどしりがゑい 声はつよ気の相場・とはどふぞあげてほしい

上上吉 竹本志广大夫

上上吉 節は毛とろめんのおび・なぜつよふても中から下 竹本政大夫

声はみなみの御堂様・とは高いてんじやうじや

四〇

節は者のはてそな・なぜうつりが残ってねる」こと声は鯉のさし味・あぢはいより名がよひ

### 上上書 豊竹陸奥大夫

声は坊主あふぎ・とはほねぶとなが始未しまっ 節はかい帳のふだ・なぜ近ねんのはやり物

### 上上書 竹本錦大夫

節は功をへたすっぽん・なぜ川中のすい方 声は祝言の二日ゑい・とはもふわれました

### 上上書 豊竹上総大夫

声はさかつきから茶椀・とはめきノーとあがった。ちゃらん 節はよい衆くち・なぜすこし水くさい」(三ま)

### 上上書 豊竹駒大夫

節はやぶれたかみ子・なぜ初手のうは気はどこへやら 声は同家のいん居・とはうらがきく□しもた。

### 上上書 竹本文字大夫

節は勘当のむす子・なぜ江戸もどりからよいずんだっただっとはもいそうてもきれいなきなきくこだま

### 浪のうねり鴉噂

上上書

豊竹釆女大夫

上上書 豊竹伊世大夫

声ははりしの殺生・とはそろく、引ますせつしゃり

節は江戸のひたい・なぜすみくへにねんがいる」にこ

声はあすか川・とはせが世になった 節は四ほこし・なぜもちっとたらぬ

上上書

豊竹元大夫

声は切付のせつた・とははてしりがほそい 節はやき物のうし・なぜ京からの出じや

上上畫

竹本百合大夫

声は進上に一升樽・なぜどふでも徳利がない」四々したいからせらたるというというは生蠟同ぜん・とは大きうて歯ぎれがせぬなまぶとう

上上窗

陸竹伊 豆大夫

節は文弥女郎・なぜ余りにくひ物でもなし声はきやらのすりこ木・とはへらねばよいが

上上

陸 竹 桝 大夫

上上

声は大めしくらい・とははりまくさい 節は茶の下座・なぜおりが残る様な

陸 竹桐大夫

節は臥竜竹・なぜ座敷での内匠」回りではなどうろうの紐でとはできなった。ないました。 たくみ きしゃ たくみ かな ひょ

上上 竹本信濃太夫

上是 声は嵯峨の名物・とは名ほどあり大竹 節は三りにやいと・精出したら達者になろ 陸竹冨太夫

上上 豊竹春太夫

節は未社の神・なぜ稲利からの仕似せょっしゃいなり 声はくったくあたま・とはとかくふけました

節は五郎兵衛権・なぜこまかできれいな」(五オ) 声はのべのはながみ・遠音がさゝぬわいの

節は半額あたま・なぜ越前の流義声は当代のぬり笠・とはちと花者めいたったが、 陸竹嶋太夫

上上

上上 声はつめ袖のげいこ・とはじみでさみしい 竹本友太夫

節は町のめいわく・なぜまあワキでもめ 陸竹左馬太夫

上

豊竹鐘太夫

陸 竹初太夫 節は在所出のまゝたき・なぜこはしやはらかし 声は箱根うぐいす・とはかはいらしいがなまる。

上上

節は親方せりふ・なぜずいぶんはたらけ声は朱唐紙・とはべち~~とするしゃからし 陸竹美知太夫

上

声は弐百二十屋・とは平野の通用 節は吞で花見・なせしやらなふて京がよひ」(六す) 陸竹常太夫

上 匙

節はよごれじゆばん・なぜどこやらうぢつく 声ははうづきみやげ・とはちよつこりやすい

声はなら茶くらへ・河内からの出じやかはなり 節はやとひ徒士・どこやらそ、つく

上上

他

国

弥太夫

上上窗

尾張力太夫

声は加茂さむらい・とはうらがばゝい

節はごまのはい・なぜこまかにせらる」(宝り)

声は手をたたく・かんがござらぬ 節はきんかあたま・すれてひかる」(六ク

上上吉

鶴

沢平五

郎

竹本

ひれの吸物・なぜあらなり

竹沢 伊

佐

衛

門

休足

大上上吉 豊竹上野少掾

節は鏡のいゑ・なぜ受領のうつは物声はびろうどのふとん・とはむっくりとするがちとよはい

竹本播磨少掾

延亨元 子七月廿五日 名不聞院乾不孤雲居士 五十四才

名残はぐせひの船・とはのったく

(註・上記の文字は白抜)

上上

竹 沢

上上窗

善 四 郎

豊竹」(セク)

万  $\equiv$ 郎

竹本

鶴

沢

沢 文 五 郎

豊竹

野

上上雪

たらいぶせ・なぜよい分へはいるを待まする 富沢正五郎

沢 儀 助

豊竹

鶴

沢乙 五 郎 陸竹

竹

四三

名物

三味線之部

天人の琵琶に合して今もさぞ」(モオ)

極上上吉

鶴沢友治

郎

竹本

太左衛門橋筋・なぜ三筋のひんぬき

浪のうねり邪噂

陸竹

竹 沢 弥 七

上上吉

まこも草・なぜ佐和太の引手

沢 伊

八

竹本

上上雪

豊

松

弥

=

郎

四四四

けいせいの寺参り・なぜうつくしいばかり

上 野 野 鶴 沢 沢

新

蔵

豊竹

卯

七

同

中尊

上上吉

桐

竹

門

Ξ

郎

竹本

能書とみた・なぜてら子やがよかったのうじょ

大上上吉

喜八

郎

豊竹

上上書

若竹伊三郎

上手の鳶・なぜあがりばへがみへる」(たさ)

上是

松本次良七

陸竹

餅さいく・なぜやはらかに遺ふ

西横ぼり・引事なら得手物のよことをそもの 野沢

人形立役之部

上上吉

桐

竹

助

 $\equiv$ 

郎

竹本

上上書

浅

田

祐

+

郎

陸竹

あそがだけ・なぜ大にしのたて者

名あらい・なぜあくがない

上上吉 工藤左衛門・なぜひがしの立役

上古

吉

田

才

治

竹本

評預り

中

村

勘

几 郎

陸竹

女中さい領・役がらもとし相応

あべのどうじ・なぜとしよりはつめい」(八2)

若

竹東

九

郎

豊竹

右

上上吉

豊

松

藤

五

郎

豊竹

銀四分一・どこやらがくろふ御ざるぎんしょいち

左

巻軸

精出して宿へ御はいりく~」(八々)馬のなみだ・似ました~~

人形おやまの部

上上吉 藤井小八郎

豊竹

上上言 ひくひ髪・なぜひがしのおやま」(九ク) 山本伊平次

竹本

関の芝居・なぜにしのおやま

上書 藤井小三郎

豊竹

上上 三浦新三郎

同

土用干・なぜなはどこ迄もとようほしまっ

ぐみの実・なぜすふてもあまい

上上宣

笠井藤四郎 陸竹

たいこ持・なせ風ばよいがこしがからむ」(千本)

惣巻軸

極上上吉 吉田文三郎 阿蘭陀人・とはくろん坊の大将がらんだけん

若

吉田八太郎

同

やがて鳥井が立・なぜ三度の吉田とりいたっ

是か 当世永要く 作者論甲乙あるといゑ共たとへば六拾九屋が四拾三屋となる

細評頓る本出し申候祝儀」(キャ)

匹五

#### 操 西 臺

#### 東 見

一西東 見

大坂

京

都の義太夫座は 若手の手だれ

京

次第にはづむ西陣の今織」(ニオ)しだい にしぢん いまをり

豊竹座の太夫は手をとよれけざたの本

揃へたる名人

大坂

やれけなき岩国半紙

竹本座の評判はたけもとざいやうばん

古今に替らず

同

手打連中もゆるかぬ要石」です

京上上吉

竹本 土 佐 大 夫

メリ能き御名人おくふかいところのみへるぎおんばやし

上上吉

竹本春大夫

御こへの美しさはいふに不及おなを聞さへやはらかなあしのまろや

上上吉

竹本桐大夫

つつこんでの語り打もとよりおこへはどこ迄も聞へるだい仏

許ばんは日まさり高ふなる都の不二ともてはやすひへいざん

竹本岡大

夫

竹本元大 夫

上上書

のつしりとして御かうしやな所にみな目をさますあさひやま

竹本友大 夫

竹本富大 夫

御名人なつめ合は色もかもあるのきはの梅

上上

上上言

お上手といふはどこ迄もかくれないまくずかはら」(こま)

上上 竹本住大夫

いつ聞ても見物のおもしろがるぢしゆのさくら

上上吉

竹 沢 甚

三

郎

大上上吉

豊竹若大夫

野沢庄次

郎

大上上吉

豊竹駒大

夫

大手なるねじめ世かいを引つゝんだしゆみせん

上上

いとにつれておなの高いりうもんのたき

げいにこつた一ねんついには大がねにまといつく日高川

竹

沢

弥

吉

大 西 友

藏

いろかをもつ冬の梅ゆきのうちにかくる、さの、わたり

じゆうにまはる御手の内は岩国のそろばんばし

上上

鶴

沢彦

 $\equiv$ 

郞

上上吉 鶴 沢 文

御上手な評ばんついに見ぬ人もしつてゐるりう佐川」(三々)

目 録

操 西東 見

台

功大上上吉

豊竹筑前少掾

そもみのゝはじめよりなはばん天にかくれなきすまのうら

けつかうな御こゑはくめどもつきぬわきいづるみづうみ

御かうしやはかたをくらぶる人もなきみがき立たおとこ山

上上書 豊竹新大夫

秋をまつ斗心かはらぬ江どにないほどの□かを山」□言さ 上上吉 豊竹鐘大

夫

いつまでもとめおいてしばるのも中にしたひさらしな

はたのよい手さはりにれん中のまきゑどうぐ箱入の通天 上上吉 豊竹時大夫

とかく若とでうぶなとが此てがしはの一こゑにしのだのもり 上上宣 豊竹十七大夫

\_

豊竹伊 豆大夫

上上書

きくからどふでもあまみの有松のいろはかわらぬすみよし

**浄瑠璃評判記集成** 

上上

豊 竹鰭 大夫

ひいきのぼりはだんく~にましてくる大みね山」言う

此みちを御みがきゆへくもりけのないかゞみやま

豊竹諏訪大夫

三味線之部

鶴沢十次

郎

大上上吉

いとによる人心丁とめふてかよひくるおだまきにみわの山

上上

冨

沢伊八

郎

御しゆつせにつれてふたばのことはかたい石山

しだひく〜にひやうばんのます印はいなのさゝはら」四さ

上上

富沢正五

郎

上上吉

竹本紋大夫

上上 鶴沢龜次

ひくにひかれぬわが思ひはにしきをいづる夏のうぢ川

鶴 沢名

八 郎

引込たいとの音に思ひをながすかつら川

上上吉

冨 沢

藤 次

郎

おてぎは、いつとてもとかくき、のよい有馬のゆ

竹本座目 録

實大上上吉

竹本大和

掾

神代からの行義をくづさずおん曲のずい一は天のはしだて」「四っ) 名大上上吉

竹本政大夫

はりまどの、おもかげに少もかはらぬ上るりのひ、きおのへのかね

たれも手をおくほどのやはらかさは又とないならうちわ 上上吉 竹本千賀大夫

御出せはだんと〜にふきよせてくるめなみおなみのわかのうら

上書 竹本染大夫

郎

いつの間に此やうな名人になり給ふとあきれるふじの山 竹本長門大夫

ちいそふてもどこやらにきく所のある今みやのもり(五オ)

四八

大 夫

竹

本

中

しめてきくほどおんせいの出る御しゆつせはつゞみがたき

味 線 之

部

古大上上吉

野 沢 喜 八 郎

ひくことはむかしより今此人にとゞめしちくぶしま

鶴

沢

文

蔵

上上

しだひに出せを引いだす三すぢのいとのおとわ山

上上

大

西

長

蔵

ひくいとの音きくからにわつさりとして心もきよたき」(宝々)

大 西 音 次

郎

上上

きくからににぎはしい心もいきむかふとやま

上上 竹

沢

宗

吉

ありててつげん和しやうとおぼしきが高座にあがり。つぶりに。し 古きせりふをあたらしくつなぐ。節季あれば江南の禅寺にもんだうて。小ぎれいなるいわらじの。上手をつくしてうけつ。こたへつ。

はあらで黒ぎやのおびしたるかけこひ二三人。あるじは他行と見へにするという。

じやうつ

たり。おもてにはせにかごおろしてあれど。むくりこくりのこゑに

ねじめのうつくしさはたれもき、とれるみ、づか

大上上吉

大

西

藤

藏

おふやうなところにおいてつゞきてはないむさしのゝ

目録終 一会さ

操 西 東見 台

> 六丁裏、 挿絵)」(云り

の、しれは江戸に紫とこたへ。公家衆にあせとなりやくをなす。西に大和あれば東に筑前ありとまけず。京に浅ぎとりやくをなす。西に大和あれば東に筑前ありとまけず。京に浅ぎと上に天雷あれば下に地震あり。けいせいに手くだあれば武家にけいかみてんらい こ屋ともみへず。はいかい師にてもなし。只御文うけ取っ所と思へ 一間の出来合がうしに。かきのれんなるほどゆったりとかけ。たいいがんできる。の雨にのぼりの鈴もにぎはしく。よしありげなるおもて」(モオ)つき あれば御寺がたに新ばちあり。味そするをとすればのきをふく菖蒲いせものがたりあれば百物かたり有っと。つべこべしやべるかむろ にわらぢほうかふりといふ二井ほれば北に女夫池とくよりわき出。

御町内の孔明ともいひそふな人と見へゅっ今のもんだうに残さむふ神でうないこうが、こうがなりといひそふな人と見へゅっ今のもんだうに残さむふねもしろもなきものと。ざわく、帰る七八人中にもすこし学文ある こうもうすといふ物をめされ。ひだりの手に「モュ」ほつすをふり。右 もおもしろいこと。みなそれ~~の性得に得た事といふたもの。どして木にのぼり憂さむふして水に入るといふ事が有つたが。いかに やらたがいに。ちんぷんといわる、は耳へはいらぬ人がち。あまり に大仏のつかれそふなつゑをつき。くろごろもきたるぼん様と。何にいる。

四九

て。其ゆへをたつねましたれば。昔もろこしの玄宗皇帝三千の歌舞ちとたづねましたる所に。四条河原のほとりにて一ッの玉をもとめ いをかたにかけたる男。いかにもく~今日て御さりますれども。未許義もないは。どふじやととへば。しぶの前」穴②だれに。手ぬぐ はいれば。わかき男。おなごまじりに二三人居るばかり。是はさび 四日。にわか許義所とかきつけあり。ヒャおもしろき表札その上五ふく万と書しるし。そのわきにちよつこりとした。掛いたに。五月 音曲かうをつの次第をつねに此玉にてわかち給ひしを。あんろく山 どもはなかつたか。ハァ何がなよきものをとそんじまして。あちこ た。なんぢ。このほどみやこへまいりしに何ゝぞ。めづらしいこと 郎くわじや。あるかく~。ハァ御まへに候。\*、ねんなふはやかつ が。さらばよび出して都のことをたづにようと存ずる。ャアく~太 比みやこへまいりしが。やう~~先刻かへつ」(カオ) たと御ざある いらしきかほつきにしはぶきニッニッして。かいおけにこし打かけ にははやはじめると見へて。立ゑぼしにすあふ着たる人。一人しさ なされませ。そんならあれへまいろうかと。皆うちくつろけば。 取分の御方三四人をくに御出なされて、御ざります。あれへ御通り ッどなたにも御見へなされぬゆへ。見合してをりまする。 しい。けふはにわか許義と書付ヶが出てあるゆへ。はいつたに何の いと今日じやが。われらも一トもんだう仕ッろうと。皆どやく~と 日共しそふな所を。四かとしたは。きつうくろいせんさく。さいわ しかし頭 内

> みずに登頭は大和とのにしてもらふといへは。のこり四五人イヤスずに登頭は大和とのにしてもらふといへは。のこり四五人イヤをやちつゝといで御中言ながら。あやつり許ばんとあれば。跡さきほよかろふといへば。(キャ)物にせいた種の口屋といふ。かみやの人遊にすとや、イオドオオドコ() コート さては、太夫の甲乙其位名所にさたむべしとの、しりけり。 かり。音曲の二字を字珠にうつし見れば名所の二字あらはれげり。やかに。もみゑほうしに両竹の風をふくみ。ざしきせばくとふんばたやかに。もみゑほうしに両竹の風をふくみ。ざしきせばくとふんばた れをわすれて高声にせり合ひ。すでにつかみあわんそのいきほひ。(〜ちく前とのがよかろ。イャ政太どのゝ。イャ若太。駒太。とわれた。また、おかかった。こまた、おかかった。こまた、おかかった。これで、これで つとあるからは。つね!~なんぢらにもいふ通り。浄留利の甲乙をりました。\*、それはいちだんとよかろふ。音曲のよしあしをわか りしゆへ。たのふだ御方へのみやげとぞんじまして。もとめてまい より段くしせり合をぞはしめける しより来れる此玉。しんを取りて評義を付給へ。まづ今日の頭し とうざい!~。さやうにせりあひ給ひては一ッかう物の許養がつき りは。まづ浄るりの次第を評義せんといへば。となりざしきにまち はんだんせんと思ふをりなれば。なんぢらを相手にして。にわかよ がみだれの後。わが朝へ来りしもの也と「ウュク〉ふしぎにたづねあた ませぬ。それをさせまいためばかり。はるくく持かへりし彼もろこ かねたる六七人たまりかねて。ふすまをあけて。何浄るりひやうば ん遊ばすとや。それはわれらものぞむ所。にはかよりなを。一トし (+ヮ)取ヮ。わらは。くわいもとになりませふと。すあふの袖たぶ

趣向人我に城の邊

幡大名(+1ま)

八

(十一 ウ上段挿絵)

座本竹 本 筑 後掾

新上るり

ときわ御ぜん

糸のみたれのとしをへし

五段続

大夫豊竹筑前少掾」(+11\*)

ものうさに

姫小松子日の遊

たたかは た 口象ゆや御ぜん 五段続

大夫竹本大和缘」(+12)

(十二ゥ挿絵)」(キニゥ)

て居るそれと今替りと一所には成まい〈〜イヤ〈〜それでもせいわっ分別さしやれ尤清和もよかろうが竹本にも大当っの跡今ではふる様御心まかせに仕りませうヲゝそれよかろ清和〈〜イヤノ〜頭取能一代の出語り清和源氏の替り上るり此度の評に仕ませうかいづれも扨また皆様へ失念いたしました事が御ざります此度豊竹筑前殿一世

操西東見台

(十二オ上段挿絵)

座本豊竹越前少掾

新上るり

\_

ころものたては

五

竹本も久しう致されますれば新替りに間も御ざりますまいこりや尤

ヘハテ聞分のないイヤ申<是はどちらも御尤しかし私が存ますは</p>

ほころびにけり

前九年奥刕合戦

### 浄瑠璃評判記集成

じやイヤー~尤でない竹本に新善りが出る時分は清 「(+三ミ) 和が尺 鳴門大夫殿と申が出られますこれとてもさうほう共此たびは評を残 大夫殿事此度此大夫と変名いたされ御出世で御ざります竹本座にも 姫小松と豊竹の前九年とで評を仕りませうまだ口上が御座ります時 ふるなるがサアノ〜そこで御座ります其時清和も只今の気あんば いで評を致しますてやサア早ふはじめいく~しからば此度は竹本の

借念上上吉 竹本岡大 かしこまりましたしからば是からはじまりで御座ります「キ=シ し跡評判に仕りませうヲ、どうなりと〳〵まあ早ふ座なみが聞たい

ら聞ていれはあまり口上かいつこふ過るそして土佐〃殿 は とこ ら 判早ふ聞たい, | 大名 | 先岡太殿の此度の御出来団七徳兵衛の詰合 ものでもかわりめが」(十四才)御ざりますゆへ京都は別評に仕ります ますれどなにはのあしにいせの浜荻都のあさうり大坂の白瓜と同し かかはりますひつきやう各~方へかやうに申せは釈迦に経て御ざりし寒にかふ御ざります 尤義大夫節は京都の御連中と所~御ひいき はあんまりなせりふじや | 大名 | 御尤の御ひはんで御ざりますしか 前殿をはじめ政太殿の若太殿駒太どの、と暦へをさし置て岡太殿と 殊にだん七女房を三ぶが連っていぬるさわりのあはれ さ | 土佐ひ いき これ / お大名様イヤ殿おれも京の もの じやがさつきにか /〜大名それは何事をいはる、外に人もなげに大坂には大和の豫筑 京連

ファスラ

じや

イーと

かく

大名

の

心ま

かせ

にして

岡太殿

の

許 、なをすのじや殊にこちの土佐殿は一、場や二場じや御さらぬそや |大名|| 扨此所にては岡大夫殿を評判仕りましやう | ||惣連中 | これのようはん

> 夫さまとなにはにもひやうばんく 事大ていのこととおぼへませぬそれゆへ壱ばんに直しましたイヤ又 を折られました「+四々) 場をやす / としかもあたりをとられます の役わり一場とわ申ながら先年此場はちくぜん殿此大夫の右。ほね かく此度の評ばんの一~としげきは竹本のいしづへにもなるべき大 しつぽりとてづよい段よつぽどの御かうしやでなくはと見ぶつもと

### 上上吉 竹本 土 佐 大夫

もにくふないといふ町とのとりょく」(十五り) りのおぼへじまん置てもらを京の者は上るりのすへは知らぬかいま も段と評判よろしく御さりますが此土佐太殿は先上るりがおちつき (+五1)かい 大名 イャノ〜其やうにおはら立られますな尤春太殿 すかと思へば又士佐太殿とはなんのこつちやこな大みやうはたれぞ から段と御かうしや何いはせても間に合ます誠に三段目語りにして 義床もふるふ御ざりますもとより上るり修行もそも房太夫と申時分 かたり口もしめ / 〜とそれてもこ、へなを すの か | 大名 | なる稈 あ所ひいきじゃないか元太殿の上るりうつくしうてのつしりとして 事[元ひいき]イャこれ酸大名あんまりすはく〜何のこつちや上る メリのよい所しかも此度は大序の語り口昔は大夫か開きましたとの になんぞもろふたそふなサアく〜此場はぜひ共春殿出してもらふ」 のじやイマあんまりたいくつではらが立はいのもふこちの春殿を出 春太殿元太殿いづれにもおろかも御さりませぬしかし土佐太殿 大名 | 扨此所にて土佐殿を | 春ひいき | コリヤ/〜ソリヤ何いふ

## 上上吉 竹本春大夫

よだれを流す見物の評ばん殊にお声の美しさ此芝居の鑑じやと見がれい声を違うかけられ同しく六段目のかたり打春大夫様ならではとこく。からない。 仰らる、通り元太殿も段と当りも御ざりますしかれ共それは座が替が、セーー〜申と其やうにせ り か け ておつしやて下さり ま す な 成〃程 き立た評ばん! り所が替りますしかし先此度のお出来道具やの段てはうばと娘のう ゆへじやそれに春太殿とはいつ迄元太殿を引ずるのじや | 大名 | イ ねはせぬ尤大和殿ににた所もあれとこれはうぶからうつくしいこへ り口じやといふ慮外ながらこちの元太殿はなんでもござれ其上人ま あつてわきく~の評ばんはこま太殿と大和どのとを一ッ所にした語 軍のゆとうふやのちやり場殊更春太 ハチートオ゙タ) 殿はとこやらいやみか そりやかつて評判といふものじや当つた事かぞやうならまあ元太殿 不申及京都迄其大評ばん色ざと古町のわかちなくにらむ道風なく母 にかぎりませず段と当りかつゞきまし殊更道風のわかれの段大坂はことさら 当りが有ても評ばんを跡へ廻すかそんな評判なら取り置てもらひま 豊竹に居られた時出はじめから酒天どうじの二詰の大当りまんこ将 上といぬ打子供迄か口うつしする程の大当り 一元ひいき | イャく 扨大名はねこといはるゝか元太殿はどふでゑす顔があたらしければ しよぞ

大名

イャ申と御腹立なされますなしかし春太殿事は此度 大名 | さあ此所は御存の春太殿を評仕ります | 元ひいき | これは

上上吉 竹本元大夫 [44]

操西東見

台

| 大名| 扨御待久しう御さりませう此所て元大夫殿を評 仕り ます| 大名| 扨御待久しう御さりませりなったは出してもらひま| | 友ひいき| イャイ〜友太殿を直してくだされ | 大名| イャさりませぬ跡替りか聞もの段殊之外御出来此度は場所も本格では御ざりませぬマアイ〜此所は元太殿を評仕ります先此度の夏祭。二りまうはう共御しづまりなされませわたくしもかり大名いつれにゑこもうほう共御しづまりなされませわたくしもかり大名いつれにゑこもりませのがきりか聞ものじやととりく〜と元太さまを待兼山のこがは大名| 大名| 扨御待久しう御さりませう此所て元大夫殿を評 仕り ます| 大名| 扨御待久しう御さりませう此所て元大夫殿を評 仕ります

# 上上吉 竹本桐大夫 「++\*\*

| 大名 | 扨此所は桐大殿の評に仕りませう | 友ひいき | これはさて| 大名 | 扨此所は桐大殿の評に仕りませう | 友のいき | これはさて| 大名 | 扨此所は桐大殿の評に仕りませら | 友のいき | これはさて| 大名 | 扨此所は桐大殿の評に仕りませら | 友のいき | これはさて| 大名 | 扨此所は桐大殿の評に仕りませら | 友ひいき | これはさて

#### 

のつしりと鶴のあゆみは玄太殿此度の屋鯉の段くらひ亭又とあるまか上りましたゆへ友太殿を此所へ直しました扨御かうしやいつても殿義桐太殿とつるんでも評仕るはつなれと夏祭りの当り桐太殿へ団冨太殿はとふして下さるハテ扨口~に仰らればせっ)ますな此友太[大名]只今かの友太殿を評を仕ります]冨ひいき]これく~こちの[大名]只今かの友太殿を評を仕ります]冨ひいき]これく~こちの[大名]

### 浄瑠璃評判記集成 上

いく〜見物もおのづと割ひざで聞入』との御噂く〜

### 

殿

### 上上 竹本住大夫殿

### 功大上上吉 豊竹 筑前 少 掾

に。ちくぜんどのの浄るりのかたり口物まねやら何や らか やら」太夫殿三段目一度もわるい事なしおそらく三段めがたり の 天 上 殊まへて居れはほうずがない忝なくもおらがねがい奉る御本尊竹本政おらゝはおんごく者だゆへものゝいひやうはしらないからくちをついのしゝ評判。置てもらおふ [まさたひいき] それ / ~そふだ / とのわかるこそ頭取,共いふべきか。それに何ゝぞや跡さきも見ずとのわかるこそ頭取,共いふべきか。それに何ゝぞや跡さきも見ずとのわかるこそ頭取,共いふべきか。それに何ゝぞや跡さきも見ずとのわかるこそ頭取,共いふべきか。大坂音曲の巻頭豊竹筑前殿を此所[大名] 扨久〉にて御意得ます。大坂音曲の巻頭豊竹筑前殿を此所

う。大和どのも当地名音曲て御ざりますれば会本あしいやうには致 びくへ有り。又筑前どの初床は西竹本座にて大政入道。それより東 き、くだされませう一大名一扱此度前九年の大序ひらきよりしつか されますまい。とかく半紙私に御まかせ有て。会本のいわる、を御 のわけゆへまづ会本も筑前どのをくわんとうにおかれた物で御さり ませう。とかく物ごとは七九寸に御らうじましてよう御 ざり ませ 西とかわれ。」(ニl+ホ) ども当地御ひいきにやすむひまなし。定て爱 へ。御ひいきもちぐはぐ。評はん所にも。御目にかゝらぬこと。た し。しゆりやうもなされて御されども。度~当地御中絶 有り 候ゆ 会本どのにかわり始終の訳を申ます。成程竹本大和殿。 ゆかも と斗申てしさい申さねば。又私があたまへも尻のきそふなこと。命 和どのと。ちく前どのと。巻頭のあらそひ。是には大分 わけ 来 歴 なされてはすみますまひ。是には色々だん/~の訳も 有り。 |や||ア、コレく〜」(+カック) 发は上るりの許ばん所。それにせんくわ しその上しゆりやう是にも何ぞしやべる事か有るかその口ではいひ ゆへと有るかそんならこつちの大和どのちくぜんとのよりゆかも古 とひいき一コリャ耳のない国へいてそんな許ばんをせいじゆりやう れはしかれ筑前どの置ました訳はしばゐじゆりやうかたぐ~しやま てなりともかつがよいと申道理をくみわけられ今やうのかたり口そ (+カポ ちやりちらかされるそれでも太夫ぶん巻頭の行義か但。頭取 にはかへられぬゆへ。顔をあか紙にしてまた青紙なわたくしめが。 わけあるまい新しい口をあたまへあげていひわけ をさ そ か せく
大名
サアく
そこで御ざります当世はとかく小また取つ には東のしばゐにゑんでも有るかへその上に手を置て今一度置なを

うしやな事今の世に一人も有~まい!〜 一部ばん長らく三段目をたへぬやうにと。町〜〜評ばんおそらく御こ切っとりの海小六つめ合に丈夫に御語っ。此度は御調子も高しとのりにて。見物をなかす事。此御人の御家がら。今にはじまらぬ事。段二人のつま権,太夫大うれひきび」(ニ+º) しい御出来。ことはまじのちやり是はよいと申が不調法御家の義後誠の権五郎の首打てよりり致て成程太夫分の御語。口次三段目ョクリの跡少しばかり奴人形り致て成程太夫分の御語。口次三段目ョクリの跡少しばかり奴人形

### 名大上上吉 竹本政太夫

「大人なとう」らってもどうなあっているというな即と人。当がほしやつても此ばでは何。ともない。いひわけをきり、くっしゃた出してつかふか。但し命かニッあるか又大名」(『+『\*)も大名の。きりく~いなれいく~。出やらずはせつきにあまつたひいらぎとのけいこや立会が出来ぬけな。をくきこよりは。ぐちなおやぢどとのけいこや立会が出来ぬけな。をくきこよりは。ぐちなおやぢどとのけいこや立会が出来ぬけな。大坂中の宮とのけいこ場。其外町夫どのがほしやりを。今のすみかきといふ事をしらぬか。此政どの忝も三、「大人など)

出なくながらく当地にて三段目をゆるがぬやうに石より 堅 い 金 箱 ざしが有ゆへかと端く~の大評判なを~~すへ頼みく~京都へも御 ゆかの真鳥より一度もあしいことなく。まつたく文正翁先生におも れひ。しゆんくわんの謡の心にて御かたりきびしいとの評ばん。其 形によくあいました。おもしろい事!~。いつも申事ながら。そも初 い事。あんずれば有る物と町中は是ざた。おやすはやめを持て行所人 と申。御かたりくち。よく揃た近年の三段目。何もかも あた らし たりは御家の」(ニナニャ)ことなれば。殊の外の大出来!~。御作方 る所ことばに付られしは。叉お上手~~。若君誕生よろこび後物が 書とめらる、迄。ちやりまによし。扨平産あるまへ一口斗障子をあけ 後三段目つめおやすに落付さるゝかたり口。夫より産やの入用道具 の評ばん。すみ!~までとをりました。ことに二段目の中東屋のう 上ませうが。まあく〜御しづまり有れ。扨当二月朔日の初日姫小松 世を御しりなされぬ一チずいにふるひ評ばん。それをわたくしが取 がほしやつても此ばでは何゠ともない。 いひわけをきり /~しゃ 大みやう。あ、これく、まづしばらくく、。こちらは御老人。当

操

# 大上上吉 豊 竹 若 太 夫 」(日本日本)

行の後てれもせず殊更関東なまり夫より馬子うたおもしろき事三重 よはずはらにあなのあいた国迄大評ばん!~ とのより四段目のつめは天が下に此御人ひとりと大坂中は申すにお たり次により時せつふくしてよりしつほりとうれひとかく大和太夫 かけ成権五郎を引立行所御ふし付ヶ珍しい後四段めはんなりと御か きなれば若太どのを此所へ置まして此度奥州合戦にて二段目の口道 へぬき 」(『王三々) なれど役場にて座をきはめますれば先三四のつゞ れば評ばん致す場所も御ざります又駒太夫どの義はいかにも豊竹は て。此場はこつちの千賀どのゝばじや。とつくりと 会 本 思 案 く~ もらをふしちか連中しイヤ くく御ふたりながら御しづまり有つ 太夫どのとは。少きよくがない豊竹ばへぬきの駒太夫どのを直して み。三番目たしかにこつちの駒太夫どの評ばんじやと思ふたに。 これく〜頭取っとつくりと許ばんを頼ます。段く〜上より義理がつ 各様御座をくつさずとも。とくと御聞くだされませうしまひいき 大名』御両人とも御尤しかし千賀どのは御語りばも此比序結と承 |大名||さてく~おくれまして。豊竹若太夫どの評ばん仕ります。

# 大上上吉 豊 竹 駒 太 夫 」(11+81\*)

ひやうたんでおさへるやうに。又駒太夫どのかぬらくらせずととつなんと。こちの千賀大夫どの此場はちがはぬとおもふて居るのに。は御ざりますまい | ちかひいき | ぃゃなめな。会本申分ヶ有るが。| 大名 | ょぁ 駒太夫どの音曲評ばん仕りますが。どなたも御このみ

れた子供までが。ひきます〈〜とりとひやうばんをしてもらひましよ [大みやう] これはしたり気くりとひやうばんをしてもらひましま [大みやう] これはしたり気くりとひやうばんをしてもらひましま [大みやう] これはしたり気にかぎらず。御ふし付け。次二段目のつめ。あげやのば ヲ ク リ 後にかぎらず。御ふし付け。次二段目のつめ。あげやのば ヲ ク リ 後にかぎらず。御かいに。一といふて二三のない太夫様と。うばにだかては。今のせかいに。一といふて二三のない太夫様と。うばにだかては、今のせかいに。一といふて二三のない太夫様と。うばにだかれた子供までが。ひきます〈〜

### 上上吉 竹本千賀太夫

申ます事。とっくりと御き、なされませ。此度の子の日の遊びに」大名一何れも様。まづく、いさかひは御無用。中とつて此会本がな。いすにのつたやうに口上離がつげでいふのじや。千賀どのをわな。いすにのつたやうに口上離がつげでいふのじや。千賀どのをわな。いすにのつたやうに口上離がつげでいふのじや。千賀どのをわな。いすにのつたやうに口上離がつげでいふのじや。千賀どのをわな。いすにのつたやうに口上離がつげでいふのじや。千賀どのをわな。いすにのつたやうに口上離がつげでいふのじや。千賀とのをわるふいわる、と。此びんのふいた。ときくし男が。あいてになるぞるふいわる、と。此びんのふいた。ときくし男が。あいてになるぞるふいわる、と。此びんのふいた。ときくし男が。あいてになるぞるふいわる、と。此びんのふいた。ときくし男が。あいてになるぞるふいわる、と。此びんのかには、一大なやう」いで。千賀太夫どの評ばん かね太連中」こりゃく「大みやう」いで。千賀太夫との評ばん かね太連中」こりゃく

(エュッ) 序切りの重盛ほうらつのかたり口きついもの。其うへ常盤の狂人の内を。御師匠様先年語り給ふ伊豆院宣。さぬきの 住 吉 物 狂の狂人の内を。御師匠様先年語り給ふ伊豆院宣。さぬきの 住 吉 物 狂の に 子切りの重盛ほうらつのかたり口きついもの。 其うへ常盤

# 上上吉 豊竹鐘太夫 」(11+5(\*)

す。にらをふく山ぶし迄がときんをあせにひたして待つ て おり まなら。一の谷の序切のやうな事をと。替り度ごとに月待日待のやうな声を丈夫に御つかい。ひとへに御こうしや / \。どふぞなろふ事やかた権五郎父の名代に来り。もじずりとの色事後段切りのよはき付わざに鐘太夫どの評ばん仕ります。此度。前九年序切伊具の十郎はう。なれども。先もじ申通り。口とつめとのわけ御されば。おし一大名 | さて此所ては新太夫どの御連中より。御さつとも御ざりま

# 上上 豊 竹 新 太 夫 」 (三十次)

へん当地御勤の時。たび~~御手がら有り。殊に橋くやう二段目の「大名」御尤~~是には一言も申分は御ざりませぬ。しかし。前のべらしうやるが。そんならなぜ。こちの紋太夫どのを此場へださぬべらしうやるが。そんならなぜ。こちの紋太夫どのを此場へださぬ「大みやう」扨豊竹新「もん太ひいき」、ゃいわして置けばあんま

西東見台

当地の大あたり且は江戸おもてへ外ぶんとの町~~はしん~までう合戦三ノ口御語り内。地みちなこと。又~~ねんらいの御こうしや。ひにいたし。新太夫どのをすへました。ひぢはまつげ当かわり奥州つめのやう成》大出来も御ざりますれば。此場は。われらへのもら

### 上上吉 竹本紋太夫

るをひますくく」(三十七十)

御出なされ。音曲の評ばんをなさる。 それも御ひいき からのこ こゑがよいゆへか。又但し御師匠かづさとのゝ御ゆづりか ちよこ 紋太との成程はつゆかよりはめつきく~とあがりました。しかし御 いかにもく
われらも上るりがすきでかわりくくにはづさぬが。此 さんをなせひやうばんしてくれなんせんが、すかんしいしやとの じ、なこと。何事なしに。こちの時様を置ておくれ。とかくくく。時 大仏ばしらなればゆるがぬ紋太夫とのを此所に 」 (三+ゼラ) 置ました くわじやか仰せらる、通りなれば。先見物様のおなしみの深いのか 此所へ置なをしてもらふへんたうはどふじや |大名| なるほどく~ まつた人。なぜに評ばんをせぬ。大みやうどの。但しは紋太夫どの ます袖のめんをきて申上ヶます。こつちの染太夫どの。此所にきは りませう。そめ太ひいき。まつたく。会本どの。たこではない くと御ひき。玉にきづじやまで | 大名 | これはしたり御医者様 迄が にたのまれたのか。さなくばゑぼしであたまをしめて。染太どのを か。ともぐひと御さげしみもはづかしければ。かほをつゝんだ。か 女中くみ通りか、つてき、にくいわいなア。ひいきといへばあ |大名||さて御待遠に御ざりませふ。紋太夫どの此所にて評ばん仕

きてのふし付け。とふぞく〜。上総どのゝ跡をつぎ給へと町く〜にやう付ました。後三、中。申やうなき語うち。ニ、口とは。はるかの次郎九郎のことばかなふ御語り。まくまへの文弥。道具や。何れもと。又染太どのこと。此紋太どのは床も古し。度と序づめも御勤なと。又染太どのこと。此紋太どのは床も古し。度と序づめも御勤な

### 上上吉 豊 竹 時 太 夫

かわりく~をたのしみにして待ておりますく~

### 上上古竹本染太夫

### 上上 竹本長門太夫

随分 / 〜と御出世を待ます / 〜 | ´Ξ+ゥ > デ。また四の口染太どのとかけ合。はなやかにて。おもしろい事。だ。此度子日の遊ひ。序の中殊之外の御出来。そのゝち 道 行の シリにてうるはしき音曲。是まで御引の間。評ばんもいたしませなん [大名] 扨京とうより又かへり新参にて。大坂を御つとめお久しぶ

### 

「大名」しばらく~~。十七太夫どの音曲の評ばん仕りませう。段「大名」しばらく~~。十七太夫との音曲の評がんにいるではんにいるではんといるがけのようなではいるでは、とかく。けつからない。ではいるではも御受取り。前九年の序、中八幡太郎水での段。大人にはらく~~。十七太夫どの音曲の評ばん仕りませう。段

# 上上 豊竹伊豆太夫 」(11+1\*)

「大名」伊豆太夫どの評ばんの場所 | 中太ひいき | ャレイ〜会本に|大名 | 伊豆太夫どの評ばんの場所 | 中太ひいき | ャレイ 会本に|大名 | 伊豆太夫どの評ばんの場所 | 中太ひいき | ャレイ 会本に

#### 

| 大名 | 堺からすくの中太夫どのを。此所て評ばん仕りませう。」| 大名 | 堺からすくの中太夫どのを。此所て評ばん仕りませう。」| 大名 | 別というするの方でのおいりなく。御名の中の字に合して三段目を御勤あるやうにと。はなかりなく。御名の中の字に合して三段目を御勤あるやうにと。はなかりなく。御名の中の字に合して三段目を御勤あるやうにと。は大大名 | 堺からすくの中太夫どのを。此所て評ばん仕りませう。」

#### 操西東見台

### 上上 豐竹鰭太夫

夫故此所にて。大出来の評ばん。端/~までとゞきましたにもいたしたいほどの義なれども。鰭太夫どの。なじみがふかし。にもいたしないき」ぃゃ ( 是〈~こちの諏訪太夫どのを」(三十した | すは太ひいき | ぃゃ ( 是〈~こちの諏訪太夫どのを」(三十した | 費竹鰭太夫どの。奥州合戦にて五段目御ふしからよく付ま

### 上上 豊竹諏訪太夫

と御ひやうばんつかまつりましよ」(『+ニック)何とぞつぎのかわりに。やくばを御うけ取っなされし時。しつかり段目御役場。何れも御達者な御声。此度はとくと評判もいたさず。[大名]さて諏訪太夫どの義は。道行駒太どのワキ。御かたり又五

# 實大上上声 竹本 大和 椽

「大名」日本惣巻軸。竹本大和掾どの御評はん此所まで延しませし 「大名」日本惣巻軸。竹本大和掾どの御評はん此所まで延しませし 「大名」日本惣巻軸。竹本大和掾どの御評はん此所まで延しませし 「大名」日本惣巻軸。竹本大和掾どの御評はん此所まで延しませし 「大名」日本惣巻軸。竹本大和掾どの御評はん此所まで延しませし 「大名」日本惣巻軸。竹本大和掾どの御評はん此所まで延しませし

ふは。此お人。又出がたりなぞもほかになし。だい一上るりにくせ 御りつふく。それは大きなまちがい。まこといにしへのかゞみとい やうばんおいてもらを | 大名 | これはしたり 上るりがさびしいとて はない。それでもいひぶん有か。おかみをかろしめたいとくさいひ ていねむりがてる。ことに。きんねんわかいものが大和ばをいふ事 びしいてたいくつしまする。しばゐはきをはらすこそよし。かへつ

れぬといふ評ばん|大名| さぁ 」 ミΞ+四オ) そこで御ざります。其さ 殊之外あはれにおもしろき事見物一まひに取ました此度 に か ぎ ら がいしてうれひの内徳寿丸のことをいひ出し一くだり程の所さはり りの評ばん仕ります当二月朔日より姫小松二段目のつめあづまや自れゆへ此度はまづ筑前どの巻頭に置此御方を巻軸の位になをし浄る ぬ事かわるたびごとに当り目のないとい ふ事なし | うをや | それ く~夫がもふひいき口此度の二のつめ政太夫との跡さひしいてきか

不及名もくの付やうのなひほどの御方今の世にはおしいかなく~そ ゆかより外へ御出なく 」(ミニナニョシ) 此本にあるならば巻頭巻軸は申に なし。誠に御ぜんじやうるりともいわん。そも三輪太夫といふはつ

びしいと被仰評ばん。とかく此大和どの義は。上るりの行義をくづ

ずもおほく。はんなりとして吉。かず多き人ぎやう。それく~にこと 御役場は四段目のつめ。初日に出ましたとは作方もかわり。人形か さず。古風に語らる、ゆへ。今の風のかたり口から引合ては。さび ばのわかること。おそらく此御人ならではなし。段く〜御ひいき」 二段め。重盛のうれひ文句に合してひやうぐを付られし段。いにし しう思しめされませう。しかし。おんぎよくは此人のこと也。此度 いとふとく ふ者もなく連中のはた日にまし夜にましさかへますく~太夫様アッ<br/> (三+四2) もつきますれば当地道とん堀開山上るりの大将軍とはむか へのすがた残りてよし。扨段切りも此度は大分にぎやかなと申後の

寶曆七丁丑仲夏

吉

作者 南

蘆

大阪心斉橋南江四丁目東側

和泉屋平兵衛板 」(三十五オ)

竹

### 浪速の梅推量に嗅当る料理

w持を壱人招くべしと申さるればていしゆ罷出さん 候此所順堀の和国やと云茶屋へ入らせられ当地のものなれたる 太原堀の和国やと云茶屋へ入らせられ当地のものなれたる とて無縁寺の森をけしきの杜と名つくあてやかなる芸子 をあって此堀へを浪花色江と呼もにくからす万人の面白かる 事を工夫し新たなる上るりの趣向諸方へわたるも此所 J(-t)より出る事ぞかしされば江戸伊勢町といふ所に満珠 といへる り出る事ぞかしされば江戸伊勢町といふ所に満珠 といへる 事を工夫し新たなる上るりの趣向諸方へわたるも此所 J(-t)よ を工夫し新たなる上るりの趣向諸方へわたるも此所 J(-t)よ を工夫し新たなる上るりの趣向諸方へわたるも此所 J(-t)よ を正夫し新たなる上るりの趣向諸方へわたるも此所 J(-t)よ を工夫し新たなる上るりの趣向諸方へわたるも此所 J(-t)よ を工夫し新たなる上るりの趣向諸方へわたるも此所 J(-t)よ を工夫し新たなるとで 大阪・アール (本) が (ま) が (ま)

郎のはて見る目と名を取しゆらいは天王寺のひがんに 幕う 西の女郎のはて是は曽根崎の山列そこへ行はあっはれ 一風 ち廻し参り下向の女中を此見る目に 目きゝさせしにあれは ず風の神と相住して紙の多葉粉入をぬいならいてかすか 云太夫をうけ出しよう是を楽しみにひんに成し身をくやま 有しが新町の女良に身を打込み身代に替て思ひ入の越前 に名代の太皷数多候中にも高原といふ所に 昔はよい身にて きすぐに是より髭剃町の芳野屋といふ料理茶やにて 何にて い鼻に妙の有男と申せば満珠聞給ひ その次郎七を今日まね とお付なされましたおっとはかぐ鼻の次郎七とて 隠れもな たかへず目きゝせし故夫から 中の嶋の助さまが見る目の市 ほどうぶの素人しかもれきく~の問屋のおいゑ 様とみじん あってたれも只物とは」イニホン見給はねど勤した女にあらず成 女房は見る目の市とて成ほどいにしへは 八文字をふんだ女 屋にゐる心とそれは〳〵気さんじ成男是にふしぎの妙あ けふりを立て清貧は常に楽しむ嚊さへ息才で居れば 不断揚 ŋ

0

春

うち越して芳野屋へ入給へばまつしやともこへく~ に江戸 も悦び夫よりすぐ髭剃町へと飛がごとくにざゝめ き立す 末永^」(;;^)お目を下さるゝ様にとぬけ目のない上手 物満 手に入り座敷の様子は太皷共にたのみ 料理場にての心づか 」(ハリヤ)御事芳野やは名に聞へし料理の達人かしこまり候と勝 先何かなしに掛合の料理此一座に知らせず 申付られよとの 付にて是へ参りし訳は きめう の人の 有しを伴ひたるゆへ まいらせ口上をのへんとしける時大臣申さるゝは俄 の思ひ めづらしきお客の御入来と家内悦びいさみたち座敷へ 通し 大臣の御入と案内すれば亭主袴のこしを当なから是 町裏の大神へもまいり給はず尼寺のぬけ道より 藤喜が前を さるゝとの使夫より其儘はしり来り先は存よらぬ お召此上 し見んとて和国やより次郎七に只今江戸の満珠様のお 召な も亭主が物好のざっとした掛合を申付かぐ 鼻にかゞせため にはく 坂 珠

内に勝手がよふござりますといふて出るよりおのく 座を 御亭主も名代の料理者にてすいほうさまと 存るにさりとは りねぶか向ふかんまちの平っ作りに J(III/2) からしぬた平皿 を満珠大臣先汁のふたを取って見らるゝにいかにも 鴫にわ なされませけし程もちがはせは 仕らぬとくわうげんをはく 座成て一入ありかたふ存ます 猶又ごゆるりと御遊びなされ 女房はかって口より出満珠大臣様」(セタンの初めて 御 ふ赤貝のにしめをいかなれば出しはせまいと いはるゝ所 と見へて宇都宮の弥三郎と申せば 是はかぎぞこないであら 文盲成゛お 肴 がでまする赤貝の醤油煮しかも少しさがった れ初献の肴何じやぞかいていへとの御意承ってしばら く嗅 んあって中酒一へんまいれば 満珠大臣又かぐ鼻に向は と一同に手を打てかんじられ扱料理こと (~) くしやうくわ は松茸にかけ玉子是はく~やき物も小鯛さりとは 奇妙~~ つくれば亭主膳を持て出物が たいあいさつしてすへて廻る あるじに」(mt)いとまごひしてすぐに道頓堀の和国やへ戻ら 宮迄嗅あふせたがおかしさと 亭主にわしらせずに外の事に 打て扨もく〜かいたり〜〜赤貝とはたまらぬし かもうつの てしとやかにあいさつして勝手へはいらるれは 大臣横手を ますよふにお取持の御方様たのみ上ますと物馴たる女房 に ばされし所にさしたるおもてなしもなきに 御機けんよふ御 して大笑ひしばしは止ず盃かさなり 何れもよいきげんにて いせら

焼と見たやうに申せば一品でも 違ひましたら此鼻をおそぎ

にからしぬたひら皿が松だけにかけ玉子引いて 小鯛のむし お汁は鴫にせりねぶかのあしらい向ふがはまちの 平タ 作り ての方へ鼻をなししばらくかいて申やう 先以古風な御料理 さあかぐ鼻奇妙は此時ぞとあれはかぐ鼻かしこまって て居らるゝ所に勝手よりお膳立よと呼はる 声の聞つければ 比の東西の新浄瑠璃のふし付の心もち 気どりのうわさ杯し ひは又外の人の及ぶ所にあらず満珠大臣 しばらくの間この

かっ

らりとあけて二 三人はいる音して亭主 / ~ 明日は嘉例の上 高にいはるれは亭主承りそれはさいわい今上短り奥にごさる を同道して朝飯過から来給へと百盃きげんのこへして 調子 るりの評判がある 行気ならとれなりとも上るりずきの客衆 めうの鼻かなと我をおりてかんぜらる 1所へ 表の戸をぐわ れ芳野やにてこらへし笑いを煲にて腹のいたい程 笑ふてき **炃上上**曾 木上上吉 花やかに諸人を引立る 東の芝居で名人とあふぎ立る 竹本春太 竹駒

卒満珠様をお頼申とくちをそろへて 云ければそのむね承知 わい当年は評判の段取がなくて皆く~見合居る所なれば何 存満珠さまと申お方で御座るといへば皆く~ 聞て夫はさい 江度表より当地へ御越前々の太夫幷に 三味線まで委しく御 おきゃくはずんど己前から上るりあやつりがおすきで 此度 の御さし図に」(ヒホャ)預るべしまづこのたび参り合せし仕合と いたされしからば多年のわれらが願ひもれし所はお のく〜

上上吉

竹本紋太

夫

極上上吉 位事にかけてはたれが聞ても 竹 本政 太 夫 千両箱

当年曽根崎に当りのつよい

矢 箱 大上上吉

竹若太夫

太 夫 扇

箱

夫

茶

箱」(むす)

**岃上上吉** うまみ有て誰にもまけぬ 豊 一竹鐘 太 夫 鰹 箱

竹本染太 夫

上上吉

諸方から引立る

引くてよく取むすぶ 帯 箱

て評判の一座になをり所から浄るりあやつりの よしあしな

には入江の大評判竹の春こそ目出度けれよの

大

坂

部

箱づくし

上上言 どこやらにうまみをもつ 豊竹此太 夫 椀 箱

上上吉

竹本百合太

夫

上上生 豊竹十七太夫

老木でも語りかたは数年の

香

箱」(セク)

鞁 六三

大に上ったと聞人手を打て

上上 豊竹 麓 太 夫

たへず御ひいきに預り 手形箱

上上 竹本音太 夫 箱

ቷ なんてもつかへぬもの 豊竹久米太夫 鋏

上 上 いつ聞ても気の 薬

箱

Ξ

桶づくし

竹本岬太 夫

色々と節に心を 懸物箱」(八さ)

ういく~しうてはお気が 竹本綱太 はり箱 夫

上。

上上 豊竹加賀太夫

ひいきに思ふはうそでない 本 箱

上 豊竹喜代太夫

とくと聞てうれしかる

文

箱

至大上上吉 竹本大和 評判に及ばぬ物せかいの 掾

類無

極上上吉 豊竹筑前少掾 袋入の道具めったに見せぬ

刀

箱」(八2)

六四

位付預り 竹本錦太夫不出

出して遣ふとよく切れる

剃刀箱

上上吉 大 西 藤 蔵 竹

上上。 富沢藤次良 無類も達者よくはたらく 手 桶

上上。 鶴沢重 いつでもあんばいよき 次 良 すし桶 豊

きれいにさっはりとした 鶴沢寛 治 水 豊 桶」(元ま)

上上

上島 鶴沢 けしきをよくみせる 名 八 花 桶

*)*]\

桶

人の調法に思ふもの

沢 宗 吉

竹

上退 鶴沢万 匹 良 豊

仕込の多くした

酒

桶

きっていさぎよいは 米かし桶

大西音次良

竹

上

あかのとれたはづ 富沢 豊 次 良 豊 あく桶」(カウ)

上

上上 大\*に上った 大西源 次 良 竹 天水桶

上 冨 沢 善 次 良 竹

替りくにつとめる 大 西 清 次 良 水没桶 竹

巻 上軸 上 吉 野 沢 喜 八良

京 大\*に入をとる 名物づくし 居風呂桶」(++)

竹

D

春

上上 竹本長門太夫

**宁上上吉** 竹本千賀太

夫

一躰の風思ひ入深草の

焼

塩

折く一当りの来る矢わた

牛

房

上追寶 竹本喜代太夫

初舞台の評判て本の

宇治茶

上上 竹本家 太夫

何でも面白く相王寺の

納豆(+ゥ)

上上 竹本富太夫

近年のめきくくと上った

六条瓦せんべい

上上 竹本喜美太夫

次第に能なって北野の

あわ餅

竹本住太夫

上追

声うつくしう角のない

丸山ノかき餅

竹本常太 夫

かるふてきれいなしみつ

上

六五

ところてん

净瑠璃評判記集成 上

巻 上軸 上 吉

竹本土佐太夫

江.

部

橋づくし

六六

むっくりとうまい

塩瀬がまんじゅう」(+1\*)

 $\equiv$ 

上上宣 音色くるはぬ一文字屋の 竹沢甚三良

しんこ

野 沢吉五 郎

上上

聞人ねむりをさめがい

も

ち

竹沢千 Ŧi. 郎

上匙

見て心よいさが

Ł

大西金治 上 大西富三郎

上

段く〜といろも出るふしみの 大西友蔵 上 とうがらし 竹沢 鬼市

上

誰がきいても道筋わかる 豊 竹 桝 太 夫

新大橋

肥

上上吉 当世の気に叶ふ **豊竹岡太夫** 江戸橋 肥

上上書 声がかゝってにぎやかな 竹本湊 太 夫 日本橋 土

上上窗 初ゆかから三段目詰を 豊竹美名太夫 取こへ橋」(+ニオ) 肥

聞て丈だに思はるゝ 豊竹出雲太夫 石橋 肥

上書

上上 ちやりときては舟に語りては 竹本播广太夫 中 橋

土

上上 いつでも聞事かわらぬ色の 豊竹伊豆太夫 常盤橋 外

引方はよいのすく霊山の

煮

梅」(十一点)

巻 上軸 **ト** 

野

沢

庄

次良

土

竹 本 沢 太 夫

上上雪 一流の思ひ入また外に 豊竹阿曽太夫 外 あらめ橋

上上宣 和らかにしなよくきこゆる 豊竹薩广太夫 土 柳橋」(+ニオ)

うまみはかさぼこ同ぜんの さめが橋

上凸窗 皆く、かんする声のさかりは 豊竹須广太夫 今戸橋 肥

上上 竹本出羽太夫 土

評判にかずを重る 呉服橋

上上 竹本越後太夫 土

若くと光りをます 竹本井筒太夫 金杉橋

上 **上** 上 いつでも見物の声で 巧者な語りぶりはしほらしい 豊竹伊 佐太夫 親仁橋 くずれ橋」(十三十) 肥

歌門太夫事 豊竹新太夫 肥

上上

竹

0

上追

上手に成べき風の

竹本近江太夫

土

改名で聞人までも

新

橋

竹本家 太 夫

上

竹本浅 太 夫 土

手づよい道具多々

弁けい橋

上 世間の人が取てほめる 永久橋」(ナニタ)

竹本名尾太夫 豊竹瀧太夫 土 竹本理喜太夫

肥

豊竹三木太夫

竹本今太夫 土 竹本狩野太夫 外

竹本道太夫

土

豊竹頼太夫

肥 肥 外

太太夫 外 竹本歳太夫 土

豊竹兼

竹本佐太夫

土

豊竹津太夫

外

竹本登代太夫 豊析本と一所にならぶ 土 竹本木曽太夫 扇 土 橋

巻軸

上上吉

人の面白がる場の多々 竹本友太夫 外 両国橋」(+四オ)

六七

净瑠璃評判記集成 上

上上吉 竹本伊勢太 夫 座本

貴せんともにひいきのつのる 永代橋

上上書 後ヶにわ遊萊にのり給ふ 豊竹肥前 掾 銭亀橋 座本

上上宣 竹 沢 和 七 肥

 $\equiv$ 

味

線

町づくし

上上。 浄るり操共に引立てよく 野 沢 文 治 駿河町 肥

上是 地所節所気:乗て行 鶴 沢 寛 治 伝馬町」(+四ク) 外

上上 撥にて曲をすくふ 乗り地にはきびしい色香 富 沢 半 治 高砂町 小細町 外

上上 野 沢 富 八 土

上追 うきやかに調子をのせる 面白さ色々に聞 竹 沢 Ξ 治 小舟町 てりふり町 肥

冨

沢

四

野沢喜

冨 沢 菊 五郎

三味線のみばへの多き

竹沢

鬼

四 郎

郞

巻 上 上 宣

冨

沢

市

之丞

土

よく引といふは此

その初秋

浪花 長堀四ッ橋

六八

何れの座にも 竹 沢 東 八 住吉町 外

松村常三良 肥 竹 沢 鬼 作 肥

沢久米 佐 膳 外 土 竹 岡 村 沢 鬼 弥 七 市 肥 土

沢

村文五 郎 士 竹沢三五 郎 肥

岡 竹 竹

次郎 土 竹沢 鬼 太 郎 肥

外 外 岡 竹 沢 村 勘 円 四 蔵 郎 土 土

竹沢四郎三郎 肥

土

田所町

宝歷十一年

東都軒

#### 序

○ 大金のゆたかなるさま家々の軒のかごりはんじやうのしるしたのゆたかなるさま家々の軒のかごりはんじやうのしるしまのゆへに碁藤兵衛と異名せり大勢の人あつめして山海の珍物相手にならんとせり合といへとも藤兵衛ひとり斗を相手にならんとせり合といへとも藤兵衛ひとり斗を相手にならんとせり合といへとも藤兵衛ひとり斗を相手になる事件がたくして待ている事のみ多きゆへ雑談に金かけまつと得かたくしてそれより藤兵衛かよらされば相手になる事件がたくしてそれより藤兵衛がよりで、大金のかけ暮を打ても順番にあたらされば相手になる事件がたくしてそれより藤兵衛が事も昼夜碁斗にからかる事件がたくしてそれより藤兵衛が事も昼夜碁斗にからかとからなり、
 ○ 大金のかけ暮を打ても順番にあたらされば相手になる事件がたくしてそれより藤兵衛があると表情があるといった。
 ○ 大金のかけ春を打ても順番にあたらされば相手になる事件がたくしてそれより藤兵衛があるとので、
 ○ 大金のかけ春を打ても順番にあたらされば相手になる事件がよる事件がある。
 ○ 大金のかけ春を打ても順番にあたらされば相手になる事件がある。
 ○ 大金のかけ春を打ても順番にあたらされば相手になる事件がある。
 ○ 大金のかけ春を打ても順番にあたらされば相手になる事件がある事件がある。
 ○ 大金のからなどがある。
 ○ 大金のからは、
 ○ 大金のからは、
 ○ 大金のからないますがある。
 ○ 大金のがある。
 ○ 大金のからないますがある。
 ○ 大金のからないますがある。
 ○ 大金のがある。
 ○ 大金のからないますがある。
 ○ 大金のがある。
 ○ 大金のがある。
 ○ 大金のからないますがある。
 ○ 大金のがある。
 ○ 大金のがある。

候ゆへ是にて御下見なされ下さるへしと皆々申けれは とたつねしに蛙とも口をそろへ成ほと悉く 相とゝのへ覚取 くいたすへきよし御請申上なんじらに申附しか 其儀いかゞ にむかって云やうは此間我か仙術の師範かま 仙人の仰によ りかの大蛙のまへにうつくまる時に」(ニシ)大蛙もろくへの蛙 山のことくなる蛙一匹顕れ出何やらんぎやあく~ と声をは 嶋山の方より白布のことくなる一の気虹のことくに 見えけ って東都両座のあやつり 芝居浄瑠理三味線人形の物まね悉 つすると見へしか川岸つたひに数千の蛙われもく~ と飛来 つめ居たる所に海原 一面ン に干潟となって何国ともなく小 れは碁藤兵衛不思儀におもい両手をくんて眼もはなさす 見 いまやく〜と待居たる」(ニャ)所に海上俄にひゝきわたり淡路 せん花こさ敷つめさせ 末社芸者まねきよせんとふれ なんとの遊ひをもよふさんと住吉のあられ 松原一面にもふ やけふはちとめつらしく碁の会を 休にしてあやつり浄るり ての遊興といへとも外のあそひと違ひ少しは 心労れ なかし

六九

蛙

座りませふと皆く 打揃ふて言けれは碁藤其こゑにはつと 来るlfgz)これは旦那此広い松原に只御一人さそ御淋しう御 衛ほうせんとなりし所へ末社共芸者ともとや ( ) とつとい へしも消失て音曲ときこへしは松風にのみ残りけり 碁藤兵 に浜松の風颯~と吹わたると見へしかたちまちに 舞台と見 れまてと言しより聞馴さる芝居のかけ 声とおもひ見渡す所 すれ面白い事斗りなし三段めの大切に至りて まつ今日はこ 三三味せんもあのよふにひかるゝものか 昨日もけふも打わ 処あり来りの人形よりは水際たちて 足の流れたるていさす 人形つかいも吉田~~と其品分ケてのつとめかたJigまとう かは仙術にて成かたきにや扨次第~~ に下り太夫の替りめ の上ヶやう少しはおかしき所有口上言畢て幕の内へはね込 さ口上言のなりかたち是は蛙の術と見へて手のつきやう 頭 いて大序のかゝり人形なとの見事さ 道具たてのきらひやか 見しあやつりと違律派成事」(ミシ)おもふほとの拍子合引つゝ その事なく一人なかめ居る所にお定りの三番三も中々 是迄 る事そ何とそ外のものにも此ていさふ見せたきと おもへ共 さまに肝をけし扱~奇成哉~~ 係る仙術の妙を 我 一 人 見 出来るこそ不思儀なれ 物ことにゆたんなき碁藤兵衛も此有 忽に舞台桟敷人たまりとかふいはれぬ芝居のけしき 目前に を改め新操のいちまきはやく~ 初め候へといふかと思 らは下見いたさんはいそいてはしめ申へしと正面に\_ku|\*)座 へは

所へ御通達あれかしと一同にすゝめけりしからは」にかってれ 日はまつ旦那奇代の御はなしはやく にて跡はたん~~ に出し候事なれは惣評判は追ての事こん 出て云いや~~是はくるしからすお江戸にては 三段目まて たれはその儀いか、云けれは お江戸切者の末社一両人進み 浄るり」kメホンさたまらす其上江戸表の四段目五段めも見残し 碁藤兵衛いふやうはわれも左はおもへともいまた 京都の春 の三ヶ津評判記を御くみたて候はんやと皆とするめけれは れ江戸おもてに京都大坂の評はんをさしくわへられて 当春 事なれはそのおもむきの評判を 早速に諸方へ御ひろうなさ 根を自然にかんのふにて仙術の奥儀を立所に 御覧なされし 旦那日比御こん望に」(ヨシ)おほし召御ひいきつよき御こゝろ たるそや我こと くかん通したる所の一チまき はあら ~ 斯の通りとそ碁藤の咄しにみな~ 横手を打これ~~ 戸表の新あやつり 三段目迄の興行をゆめうつゝともなく見 といふけふはからすも此ところにて蛙ともの術によつて 江 れもかね~~此ひやう判もくはしく聞き度おもひしにけふ 戸太夫三味線」(ヨャ)人形にて御江戸おもてのはんしやうさわ り見物して珍らしからす けふはいかなる吉日そや東都の 操分けて当年は江府の両芝居へ大坂よりすけに下りし 初江 の見物有りそなた達も知る通り京大坂のあやつりは 心つき夢の覚たる心地して扨と皆こを待かねたり 只今奇体 御とりたてあつて会 前
こ
よ

とに碁藤兵衛さまといふ御名にめんじて 蛙ともの寄りあつ そ是を持来れり先つ提重の小盃とり~~ めくる大評判まこ い是にとこしの矢立を取出し 碁藤か前へさし出せはよくこ きどくを顕さんいさ硯よと有けれは 物に心得た る 末 社 幸 かし今日夢うつゝに見物せし趣を筆に印して 見せいよ (へ

んしやうとけいしや末社もうるおひ立て 初春の筆始になし まり秘術のあやつりを御め」まむにかけし事此道の すゑ は

寶曆十二年

午正月

聲音斎」(セク)

之

大 坂 部

至極上上吉 竹本大和掾

小たゝみにすると海鼠は上なし極つていり酒

極上上吉 ひほとしのよろいまたいさきよき海老の台引 竹本政太夫

**延**上上吉 高銀に光る鮑の福とふくらいる(りターク 豊竹若太夫

新評判蛙歌

木上上吉 豊竹駒太夫

大上上吉 竹本錦太夫

色も有みるくいは心のきいた酢みそ

丹花の唇は赤貝よくせうが酢

竹本春太夫

肌きれいな烏賊にもはるめく木目あへ」(パオ)

入相のかねにどつといふ蛸のさくら煮

ナ上上吉

豊竹鐘太夫

上上吉 上品ン下たいらきには極札を付やき 竹本染太夫

上上吉 豊竹此太夫

よい塩をもつた蛤そのま、てよい煮汁

上上吉 竹本百合太夫

老功は蛎を一所にあた、まる湯とうふ

上上雪 竹本志賀太夫

数奇やの栄螺匂ひを聞て客はつぼ入

七一

上

上上雪 竹 麓 太

段と料理に遣ふ蜊きいたかからし酢 夫

上上 竹本音太夫

たへす声の有もの田にし是は木のめあへ」(パシ

上上 竹 本綱 太夫

一寸とした者に馬刀はひんと酢みそ

上上 豊竹久米太夫

甲に相応な蟹の穴ほり出して旨い焼塩

上上 豊竹加賀太夫

上 なんても間に合蜆かたからぞつとつかみ立汁 豊竹喜代太夫

上上 かきあつむれは貝の柱よい酢のもの 竹本喜太夫

年越のに物にさるぼう一所にこほうて○上れ

 $\equiv$ 味 線之部

> 大上上吉 うまいときれいは白魚の玉子とち」(元さ) 野沢喜八郎

上上書 うまみか鱒と諸見物か飯ずし 鶴 沢 重 次 郎

やはらかな鮒たれもよろこん
多巻

上上書

冨沢藤次郎

竹

上上 あつさりとした鮴かも川の水あんばい 鶴 沢名八 豊

上上。 鶴 沢 寛 次 豊

**鯋はおとり子のやうに気をさ、かきこほう** 

上上 鶴 沢 文 蔵

朝日にはねる文四郎大根と煮物

大さふに目なたの姿こつてりとねりみそ 竹 沢 宗 吉 竹

上上

釣糸によるまはせ汁の間にくしやき」(n.c.) 大西音次郎

上 **上** 

冨

沢

善

次

郎

竹

大

西

清

次

郎

竹

京 都 之

部

段~出世の有おぼこ早い背ごし

竹本 千 賀 太夫

竹本

土

佐

大

夫

竹本 竹本 喜 長 代 門 大 大 夫 夫 一 (十才

竹 竹 本 本 兼 家 太 太 夫 夫

竹 本 元 太 夫

竹本 喜 美 大 夫

新

評

判 蛙

歌

冨 沢 豊 次 郎 豊

: ≡ 味 線 之 部

竹 沢 甚  $\equiv$ 郎

竹 沢 千 五. 郎 野

沢

吉

Ŧi.

郎

(十夕)

西 金 治

大

西 冨  $\equiv$ 郎

大

沢 西 庄 友 Ξ 五 郎 郎

大

野

戸 之 部

江

右京都の部春浄るり興行次第追而評判

竹 竹 本 本 常 住 太 太

夫

夫

七三

功上上吉 豊 竹 丹 後 掾

名物の鰤りやりはいつもかはらけやき

上上吉 竹本紋太夫

上上吉 三ツやく揃たたいの急度向詰メ」(+ 1 \*) 竹本岡太夫

本汁のはた白はきれいに立っ切目

上上言 かるい所はあんかう諸人の好っ目利やく 豊竹十七太夫

上上吉 竹本中太夫

上上宣 一塩あてるとむつはたいにまかふ櫛形 豊竹出雲太夫

上上 豊竹須磨太夫

身所多い平目諸見物をつみ入

町中へ輿をかつほのあちやらつけ

上上 きうな間にいなたはちよつとさしみ 竹本折太夫

> 上上 うすみそてこちは大根のかはむき」(ナーク

上上。

豊竹八義太夫

七四

豊竹土佐太夫

江戸へは出世の鰡は情一はい筒さり

上上 豊竹伊佐太夫

ほつそりとさよりの姿は柳の糸むすひ

上上 うまさふなあゆなみ肥合身は生乾 豊竹新太夫

上上 竹本伊久太夫

上上 そへに鯵を付て舌を団扇な○ひ 竹本駿河太夫

下へむく物もうほ油けがうす醤油

竹本和太夫

上

豊 竹 瀧 太 夫

上

竹 本 家 太 夫 一(十二才)

上

新 評 判 蛙 歌 上 上 豊竹 竹本名尾 理 喜 太夫 太夫

上 豊 竹 頼 太 夫

上 すききらいの有つてうまい鰒ヶ汁 豊 竹冨 太 夫

上 上 竹 豊竹三木太夫 本倉 太 夫

上 豊竹木曽太夫

上 上 竹 竹本伊津美太夫 本佐 太 夫

舟路を追風てまぐろは早く車切」(+ニヮ)

上

竹本鳴渡大夫

巻 上 上 吉 しやんとして鱸はさびもしほらしき二本居 竹本 友 太 夫

線 之 部

三味

大上上吉

大

西

藤

蔵

土佐

はねると寄つかれぬ鯉の細作り

上上言 野沢文五郎

肥

前

江戸前のうなきおもひは深川の長やき

上上雪

鶴

沢

土

定 治

いさきよき鮎は味にこかす石やき

竹 野 沢 沢 富八

土

上上

Ξ 治 肥

上上

村 常 Ξ 肥 手のかるい四つ手のはやさつとつかみ立汁」(+三ま)

上出

1

木

上匙

大

西

貫

土

蔵 七五

すへりの多いなまず油気の椛やき

肥

竹 沢 鬼 作

上

竹 沢 鬼 太 郎

肥

上

竹 沢 鬼 七 肥

上

野 沢 文 輔 肥

上

上

野

沢

勘

蔵

肥

村 团 蔵 土

村 弥 市 士:

岡

上

上

岡

上

野 沢 金 吾 土(午三ク)

岡 村 幸 七 土

上

上

竹

沢

冨

蔵

士:

つれ引に川きすは相応に付合

鶴 沢 万 四 郎

上上

肥

座

出るを待かねる鮭皆人かよりだつ

元 之 部

豊 竹 肥 前

掾

味いも少しさつはり仕合よしの喜溜り

竹本伊勢太夫

上上吉

跋

突あてた鯨も御名の御馬なり」(+四x)

第を分チてとち物とす 一々魚物の味甚旨し亭翁若かつし時 判記もおもひ出られしにや花前の春色に筆を添て 好人共方 より少し語る少弾く少し庖丁もなるかゝる 三ッの物より評

ふ窓前の机上に書有見に三ヶ津の大夫三弦の 評判堪能の次

けふといえは唐まても行春そと菴 室を立出て聲音の翁を問

へ御披露~」(+四シ

(註) この╅は後の墨書の書入れであるが、二本ともにあるので当 時の書入れであろう。

七六

## 評 判 花 相 撲

に大阪に着にけり~~ の過て。伊勢の宮居をふしおがみ。都路なれや程もなく名り過て。伊勢の宮居をふしおがみ。都路なれや程もなく名し津軽の浦を立出て。~~雲もそなたか西山や常陸武蔵野るて勧進相撲御座有により。只今大坂へと 急候 灣上 住馴が浜に安部川南兵衛と申関取にて候扱も此度摂州難波 におが浜に安部川南兵衛と申関取にて候扱も此度摂州難波 にお

Li\* 夏も過\* 既に初秋の遊ひに移りしに毎日御きげん取のLi\* 夏も過\* 既に初秋の遊びに移りしに毎日御きげん取の点式の大男も過\* 既に初秋の遊びに移りしに毎日御きげん取の上さ 夏も過\* 既に初秋の遊びに移りしに毎日御きげん取の上さ 夏も過\* 既に初秋の遊びに移りしに毎日御きげん取の上さ 夏も過\* 既に初秋の遊びに移りしに毎日御きげん取の

者年中遊興くわんらくに春夏秋冬事を 分ての楽はや春も立

**隻に大坂の米間やに亀甲屋十作とて名高き数代の分限** 

子金入の識物是又きびのよい引出もの也亀十大臣 この有様 る取手共ばかり取組し出合なれば思ひく~ にひいきの方へ 文字によび歩行当日に至つての諸見物古今まれなる 大入誠 又かの角力は明日より初まり / 〜 とふれ太皷町中を八重十 事をいゝし事かな今年は春よりして 初芝居色一座花見祭礼 かけ声してほうびの金を出す」(言う)事或は羽織又は腰の物純 に爪もたゝぬといふは是成べし理りかなまへ角力より 名あ 薬じやと申ますと有事ない事いふて御機嫌に 入しかけ也扨 しづゞくへしといさみ給ふに太鼓末社も 成ほどまづ第一に 相撲とは今迄に品替りて気力を増よき見物事 殊 更 東 西 の 凉舟何れの遊ひも和らか事にて少は退屈におもひし 折から にぎはひにて候と申ければ 亀十大臣きこしめされ是は面白 をつれ来り明度日より相撲会合致し候とて 評判すさまじき 南兵衞と言て大、兵手利そのうへ力量骨がら無類の 角 度角力興行いたし候所によりの方にも奥州の 相 大関\_k(i、サ、)此類なき力量関と関との結ひまで初日より見物致 撲阿部

花相

躰像是又少もおとらぬ男ぶり昔赤 沢 山 に て 股野の五郎とたれぬ大男なり西の方より八幡山太郎八しづく~ と出たる 方の眼中見合規矩にさつと団扇を引ければ さしつたりと引 時行司しとやかに立出ぐんばいうちはにて東西をへだて 双 河津の三郎が出合しもかくやと思ふほどの 負なればおしとやかに 御一覧下さるべしと申けり時に東の かたより阿部川南兵衞と名のり出たる男いや はやとかふい いづれが負ても今日の一番にて重て出会申さゞる 大切の勝 行司罷出此度の興行はん昌仕難有しと例の礼 口上終 りて」 も又尤の事ぞかし今日 は 八 日 目にて終の日に 至りけれは るが残念にて東西の勝負を見度ものながら 遠慮していたる れ大事の出会何、勝負有っては 古今無類 の角力に疵の出来 に取組なせし角力なれ共関と関との取組勝てなさゞるは こ と皆申せしは誠に風っ雅の有様なり扱初日より段く~色~ は旦那の思召付又」(!!!\*)格別の御趣向一入よふござりませう 立内証へ金子を送り候はん事は 如何にあるやと仰ければ是 らぼたん杜若山吹つゝじなんど是をもつて角 力 の 位 を 見 も賞翫する正花此節取合されば作り花にて遣すべし 梅さく 我等は此度の角力には花を出すと言新敷事を すべしもつと を見給ひ尤直に引出物遣す事 (四寸)の心もち唯いそ/~として物をもいわずまち居たり其 (IIIを)東西の関一世一代の勝負今日とらせ御目にかけ申候併 昔よりして人のする事ながら 心よさ諸 見 物

うびの御引出もの添なしと一礼をのべければ 南兵衞も桟敷 ほうひ箙のうたひにかつ色見する梅かえと申文句にて 御ほ さると左右へ渡しければ勧進元の大関是を 請取是は難有ご 西の関へ送りければ行司諦取さるお方様より双方へ 花を下 り此時亀十大臣さんじきよりかの作り花同様に 弐本出 す故かくの通り引分々ました此勝 負 重而の興行まで我ら預 見合夫なりに勢をつから かし一所に息たへ候事もござりま ござりまする其わけは両人の取組すんぶん甲乙なき 取手に 御ふしんに思召候はんが是は九死一生と申て 角力の大事で 俵の真'中へ立出諸見物に向ひ」(ਜ਼\*)只今の相撲引分》候事 てたがひに情一ッはいの力量こりかたまり極意は 双 方すぐ ほぐし東西へわけはやく水をのませ休ませけり 其時行司土 に難義と成べしとよばはりし故十人斗の世話役人共 角力を 声かけ此角力左右を引わくべし 是九死一生の手になりとも たるやうにて少も動ずいたりければ行司立より 目付年寄に に引組^で互に押合 ~~しが中央に両方共にこりかたまつ 半時斗」(四つ)もみ合つていまだ勝負わかざりけり時に四つ手 組^て又ほぐれつ入゚ちがへ手を尽して取結ぶやんや の角力はすぐれたる大男力量もたがいにおとらぬ 手取にて の力声諸見物おどり立気をはりこぶしをにぎり 見物す両人 (ヨハ)しかば諸見物もなるほど是は尤と言はざるはなかりけ 申候間左様に思し召下され候へと事をわけてもらい」

どつと賞美の掛声しばしは鳴もしづまらざりけり 此悦びに申其上心いきまでしほらしき近比恥かしき 者共とて一度に見物東西の角力取を感心し扱く〜男ぶりと言角力の 手取と花とは見たれども大坂人はいかゞ見るらんと詠じければ 諸花とは見たれども大坂人はいかゞ見るらんと詠じければ 諸に向ひ是を | <<

を五包つ、ならべ両人にあたへ今日の花は 此五百両つ、をに風雅の梅花を給りし御礼申上ければ大臣又~千両の 金子まりける扨両人の関取は亀十大臣」(ポシ)へまいり今日惣仕舞行司ども千秋万歳と一度" 座中手を打て首尾能角力はお さ

以て三ヶ津の太夫三弦のよしあしの品定,を頼申べき ぞ とつり今に評判しかと沙汰なく候へば此両人」(マヒッ)の大評判をの趣向此度両所の立合によく叶ひ 諸方大当りの浄留理あやが本望此上や有べき夫に付当春当地の新上るり 奥州安達原

関取連やさしき詞を以てのふいてう 諸見物のうるほひ我等参らせんといふ心をもつて梅花を送りし所に さすが名代の

極上上吉

し給へと大勢の頼みに是悲なくさあらば我等も好\*の道心人の悦ぶ所余人の及ふべきにあらざれば頭取となつて 評者退申しければいや / \ 此義じきに及び申まじ両所の出会諸らつたなき身にて品定を申事は御用捨下さるべしと 再三辞

有ければ東西の関共此義は当所のれき <> 衆をさしおき我

太 夫 三 味 線 ▲見立草花屋 三ヶ津浄瑠理

坂之部

大

至極上上吉 竹本大和椽

うつくしく咲分が源平の梅の花

品数多くてよいさくら花 一豊 竹 若 太

夫

**木上上吉 豊 竹 駒 太 夫富貴のかたちとほめる牡丹の花** 

香ィは上なし俗にはうすし蘭の花

久敷盛をたもつさつきの花 **ナ上上吉** 竹本錦太夫

お名にかなふた丈夫なしゆろの花上吉 豊竹鐘太夫

判花相

しなをり是より位付評判の初りく~」(せら)

のたらぬ所は御遠慮なく御差図下さるべしと 左右の関取お

七九

#### 浄瑠璃評判記集成 上

竹本染太 夫

あたりつゞけし百日紅の花

上上吉

豐 竹此太 夫

功者にふしをまはす小車花

盟 竹 麓太 夫

上上書

日の出とほめらる、朝食の花 竹本志賀太夫

あけをうばふ紫のかほよ花

上上宣 ふもとの盛にぎやかなも、の花 豐竹十七太夫

上書 豐竹加賀太夫

しほらしいはたが見ても卯の花」(パク)

上上 竹本淀太夫

上点 手入なしに見事なぼけの花 豐竹久米太夫

上上

名所に名を得しはぎの花 竹本喜太

夫

上品にしてまゆつくり花

上上 竹本生駒太夫

仙人もつうを得たりや冬瓜の花

竹本文太夫

手打に上手の入れそばの花

上上

竹本咲太夫

上

聞てしほらしいわふよふの花

上

豊竹喜代太夫

丈夫ても見ばへのなきびわの花

上上

豊竹光太夫

上

とり廻しやぼでない水仙花」(カメク 竹 本 磯 太夫

ぢんしやうなけしき茄子の花

 $\equiv$ 味 線 之部

大上上吉 野 沢 喜 八 郎 竹本

分て水ぎわの立さぎ草

上上吉 鶴沢重 次 良 豊竹

うまいの親方ち、草

上上 曹 等隔 沢 文 蔵 竹

めつきり見上たくわん草

上上書 鶴沢 寛 次 豊

おもふやうにまはる風見草

上上 鶴 沢 名 八 豊

うつくしうとなへる美人草

上上雪 野沢吉五 郎 竹

正に愛すべしさくら草」(カック)

上上 富沢豊次良 豊

上上 まめやかに引せる此よもぎ草 大 西 金 二 竹

上入 冨 沢 平 五 良 竹

評

判花

相 撲

惣巻軸座本 無類

豐 竹越前少

椽

世界のまれ者うどんげの花

竹本中太夫

京

都

之

部

」 (十才)

ぼたんに似たよふな物芍薬の花 竹本音太夫

出世のはやい事日まはりの花

上 上

鶴

沢 仲

豐

沢 助

弁 蔵 竹

鶴

冨 沢 万 五 郎

豊

上

沢 松 豊

上

上

鶴

沢

市

太

郞

豊

上手にあいしらふ水くさ 鶴

浄瑠璃評判記集成 上

上上書 竹 本住 太 夫

次第にはづみのくる手まりの花

上上電 竹本元太夫

上上。 是はとほめはずんだ柚の花 竹本家 太 夫

そまつに人の思はぬ蓮の花

上上 竹本常太 夫

くせのないもの山茶花

色に取合のよきおどり花

上上

竹本絹

太

夫

上 竹本佐世太夫

上 上 波打ぎわの鵜殿花」(+ゥ) 竹本比奈太夫

巻 上 上 吉 源氏物がたりにもれぬ夕りの花

竹本土佐太夫

座中しんとする茶の花

竹 沢 鬼 市 三味線之部

元日に賞翫する福寿草

富沢徳 次 郎

上上

こまかにわかる露草

丈夫な所は師匠のかたみ草

上上

大 西 文

吾

富 沢文 \_

上

大 西 友 蔵

上

冨 沢 音 五.

上

上

鶴

沢

次

一(十一才)

小 郎 . 郎

戸 之 部

江 竹 本春 太

夫

ゆつたりとして色を用る藤の花

上上吉 豐竹友太夫

しつかりと手あつい椿の花

上上吉

竹本岡太夫

聞人かんにたへ心を百合の花

上上宣 豐竹美名太夫

上上曾 豐竹出雲太夫

人聞てのんどならして引つわの花

まへく、大きにはやりしもの菊の花

上上。 竹本綱太夫

上上曾 豐竹須广太夫

初、て見て悦び給ふかぼちやの花

上上。 竹本八義太夫

ひいきにひかりをます仙翁花」(+ l ク)

上上 こまかにしをらしいは南天の花 竹本折太夫

判花相撲

誰ともうれしかる金銀花 豊竹伊佐太夫

上上

口中さく~~とした梨子の花

竹本伊久太夫

と
いこ
ほり
なくと
をる
かい
とう
の
花

上上

豊竹新太夫

上上

やすらかにふつくりと綿の花

竹本驚太夫

上上

気に拍子の有いたんほ、の花

一豊竹瀧太夫

一竹本家太 豊竹利喜太夫 夫

上

竹本玉太夫

よらずさわらず野菊の花」(+ニャ)

上

上

竹本伊関

太夫

八三

太夫

上 上 竹本 鳴戸 豊竹 三和

太

夫

上上

沢

遠

次

肥

上

冨

沢

勝

次

良

士.

よくむすびかなへたけまん草

上 上 竹 竹 本 本 佐 妻 太 太 夫 夫

世にはびこりて目出度稻の花

功 上 上 吉 小金にたとへしもの山吹の花 豐 竹 丹 後 椽

 $\equiv$ 味線之 部

上上書 竹 沢 和 七 肥

上上宣 心に有難の思ふ観音草」(+ニャ)

野 沢 冨 八

士

上

前

野沢文五 郞 土佐

皆人此手にはほうれん草

上上

上上

竹

沢

 $\equiv$ 

次

士

手づよく名付た金剛草

肥

| 竹 沢 鬼 作

竹 沢 東 八 肥

上

岡 村 弥 吉 上 にぎやかに聞ゆるもの七草

上書

竹 沢 長 Ŧi. 郎 ばちにはいか程のちから草」(+三マ)

上

竹 竹 沢久 沢 冨 米 蔵 蔵

上

八四

ひいきの場に長くすみれ草

上 上 竹 竹 沢 沢 喜 和 Ξ 四 郎 郎

竹 沢 和 吉

上

沢 重 蔵

竹

上

野 喜 \_ 郎

野 沢 源 次

上

上

鶴 沢 平 次

上

諸国へ名をひろめし田の草 木 村 勘

蔵

上

座 元 之 部 (十三~)

不出

豊 竹肥前椽

座元

其土地にはびこる鳳凰草の花 竹本伊勢太夫

末の賑なもの孔雀の尾花

上上吉

座

元

寶

曆十三

歳

初 秋

浪花 東都軒 」(十四オ)

口上

看板新浄留理天竺徳兵衛 郷鏡之由初日出次第太夫三味線評 江戸堺町於外記座に大西藤蔵座本にて 操芝居興行仕尤名代

判差加可申候其節又~御もとめ

### 角 く む 蘆

詣し多年の守神なれば信心肝にめいし拝をなしつく ぐく 湊両川口に数万艘の舟を碇して 年をとるゆたかさ人の心ま にとて身を清め美々敷服をあらため天王寺より庚申堂へ 参 菜の料理にてとその酒盛嘉例の通り祝ひ終り直に恵 方参り し」(」ヘ)元日の祝ひも家内一同にお定りの雑煮引続て二汁七 に信心浅からず日に増身上能成事 又たぐひなき身の上ぞか にたん生なせし奇代の事なればとて年月庚申をまつる 事誠 さも有なるまさる屋の家に出生せしは 庚申の年の初申の日 ゆたか成生れ付何に一つ不足なき果報人とは 此人なるべし の遊人当年弐拾五歳の男盛天性諸道に器用にして 第一人品 」(ィホッ身代家法は普代相伝の表手代にうちまかせ其身は安楽 大阪嶋の内に代々分限に真猿屋徳平として名高き 福者有て の気色たつた一夜違にて是程にも長閑に 成もの かな 嵏 に 分別を西の海へさらりこつかこうの声につれて明わたる で打ひらいて大腹中にもふけもする仕過しもする古 手の無 しの京は難波の京と徳若に御万歳が唱歌誠に 目出度大

るしら紙一枚取出し二つ。折て鼻をかまんとしける所を俄 く」イハリャン徳平も思ひ見し処にかの老人懐中より小菊のやうな ながら寿老人共い、そふな風情にて 正月心には 成詠をなせし折から向ふの山合より八旬にも及ぶらんと 覚 にもてはやす事神変なる事ぞかしと猶々うやまひ 下向なさ 池さるがまた山王の千疋ざるなんど、て 色 〳〵 さ ま 〳〵 さるやのまんぢうさるがば、の柏餅さる 巾着猿楽能猿沢の るぢゑさるがしこくさるすべりさるも々引さる 家のやうじ 伝のかう薬妙やくはさるのいき肝竜宮迄も隠れなく 其外さ の中に」(ニ」セ)猿の徳を賞美して色く~の名高き事第一に猿相 いわざるとの御誓願誠に有難きと申も中く~ 愚 なり 又 世 徳を仰ぎ思ひ合すに世の人のあしき事をば 見ざるきかざる に紙子仕立の小袖を着し鳩の杖にすがりて歩み 来たるはさ しき老人頭に唐めきたる頭巾をいたゞき 鼠色の袖なし羽織 んと」(na)社の前後四方の気色を見渡せばはや春霞たな引山 ン野の枯草ももへ出んとする有様は各別に心も 若やぎ長閑 猶更心よ

平我は是煙竹先生と云者なり\_(ﺳォンなんぢ多年庚申堂に信心 おこたらず且又諸芸に心をかくる中にも 音曲道に心をつく ふ心もちにて渡しければ老人喜悦の顔ばせにて善哉 るまゝ右の白紙を老人の前に持行少は小腰をかゞめ うやま ひをなしさるを愛せんとせしにそのまゝ 行衛しらずなりぬ 紙を徳平にこゝろありげにわたせしかばひとへに 奇異の思 下りたる有様面白くも又感に絶たり」(ロク)程なく猿はかの白 たる葉末にしたひ行すなわち紙をとりて片手業に 松の木を なく小猿一疋来りて彼松の木にさら!~ とかけ登り生茂り 如何返答なすべきとあんじわづらい居たる所に いづくとも ば凡六七丈程も高き梢にて中 ~~上るべき事思ひもよらず により望に任せ取りて遣はさんと 松の木のもとに立寄見れ りに来り老人の躰たらく顔色一通りの者とも見へ」(質\*)さる 相応の横平成詞に少しむつとせしが能々思へば 今日恵方参 させよと云ければ徳平は思ひがけもなきあいさつ 其上形不 老人徳平に向ひ汝年若の身なりあの松がへの 紙取て我に得 り /〜として大き成松の木の 葉末にふわととゞまりしかば を」(川り)詠めていたりしに風もすこししづまりてかの紙ちら り杯のもまる、ことく見へければ老人も 徳平も とも に 空 ばらく風にもまれてちらめく 有様さながら春風にいかのぼ やうに吹まとひこくうに 吹あげかなたこなたとひらめきし に辻風はげしく吹来りて彼老人の手に有し白 紙をうづまく

> 此度の 橋をかけてのまねきに応し 竹本豊竹の世に広まりし殊更当 阪の北の新地に会所をひらき大勢」(セギ)うち寄多年の好人思 ひ┫~に位定》の吉あしを言ならべたる難波 の吉例栄ふる 春より北本和泉新芝居興行有て大当りの 大繁昌大評判は大 々に隠れ」(Kt)なく例年の評判師の会所に聞へ皆くうち寄 立所に発明したるは神慮に 叶ひし故なるべしこの取沙汰所 念をなし宿に帰りて委く見ればげにも〳〵 音声興楽の一件 手にしつかりともちゐたり不思儀にも又難有く 三拝九拝祈 ば参詣せし庚申堂に座してあれども夢中に授かり し一巻は やうに失にけりこれはと思へは初夢にて」(たき)あたりを見れ 年手にふれし筆墨の性なりと言ふかと思へば 忽にかきけす 勅にしたがふべし我は庚申堂に奉納せし 近松門左衛門が数 の神通にてかゝる奇瑞を見するなればいよく信心深く神 め」(重く)最ぜんの辻風も猿の梢つたひもみなこれ庚申御本社 神勅にまかせあたふるなり 今日此所にて汝が心を引見 五音八声十二調子に通達する 秘伝書此節汝にさづけよとの す事此度庚申尊神の御告にてよくしれりすなわち 此一 位付評判の頭取は神慮に叶ひし徳平になすべしと人

太夫や角くむ蘆尽せぬ春こそめでたけれ

選者

八七

<

安田氏」(セク)

坂 之 部

大

極上上吉 豐竹若太夫

何方より聞ても面向不背の玉

大上上吉 豐竹鐘太夫

金鉄のことくばくやが玉

上上吉 豐竹此太夫

諸人の悦が宝寿の玉

上上書 北本喜代太夫

上上書 びつくりする程光る小金の玉 豐竹麓太夫

細工に用ひて上なし目のふの玉

上上吉 北本信濃太夫

上上書 見物。われ先にと生玉」(八十) 豐竹十七太夫

やわらかそふに見へて堅ィ水生の玉

上上窗

北 本湊 太 夫

奇妙く〜とほめる品玉

上上書 北本伊豆太夫

上上

けしきをよく見せる露の玉

北本浅太 夫

しきりになりわたるあられの玉

上上。 豊竹条太夫

かくをはづさぬ鉄炮の玉

上上 いきおひはにらむやうな目玉 豊竹喜代太夫

ふくんでうまみ有,黄萸の玉」(パシ 豊竹佐渡太夫

上上

遣べでのあるいとの宝 豊竹万太夫

上上

替りに遺るゝもの吹玉 北本豊太 夫

上追

八八八

上

北

本大

太

夫

上上

冨

沢

善

治

郎

北

段くへ位付がのぼり竹

富

沢

徳

治

郎

北

一風かわつたあんばい味噌の玉 北 本的太夫

上

色く一の役に立ものなまり玉

上 名所の川に六つの玉 北本今太夫

上 北 本 鹿 太 夫

人によりて賞翫するのびるの玉

三 味線之部 □ (九ォ)

上上吉 沢 重 次 郎 豊

行義正しき門綿竹

上上書 引ての多々事弓の竹 鶴 沢 寬 治 豊

上上寶

富

沢

豊

治

郎

北

角 < む 芦

諸方であふぎ立るうちわの竹

上

鶴

沢

仲

助

豊

鶴 鶴 沢 沢 市 太

郎

豊

次第~~に茂る寒竹」(カロク) 沢

長ィほど重宝する干竹

京

都

之

部

夫

上 上 吉 念 上 上 吉 格別にうつくしいるりの玉 竹 本春 太

八九

竹本中太夫

万 Ŧi. 郞 豊

彦 七 北

竹竹

甚 吉 北

上

鶴

沢

一竹 沢 辰 芝 助 北

浄瑠璃評判記集成 上

日
の
出
に
舞
い
づ
る
牛
王
の
玉

上上書 かたり伝へによりくる珠数の玉 竹本元太夫

上上。 竹本綱太夫

さびてしほらしいはす、玉」(+\*)

上上。

竹本家太夫

上上 うまい事に仕上る薬子の玉 竹本生駒太夫

上上 竹本咲太夫

やわらぎて心よいぶよ玉

ひやうしによくのる舟玉

上上 竹本君太夫

上 ちらく〜とかずを見せる水玉 たしなみにして置薬玉 竹本佐代太夫

上

竹本村太夫

上

野

沢

吉

弥

上上吉 沢山にして用いるあい玉

きれいなと諸人の言ふはこはく玉」(ナク 竹本岡 太 夫

上上書 竹 沢 鬼 市

三味

線

之部

野沢吉五 郎

賑やかに色めく短冊竹

上上 細かに揃ふたみすの竹

上上 きみよく当つたる矢竹 冨 沢 徳 治 郎

冨 冨 沢 沢 音 勝 五. 治 良 良

上

上

鶴沢小

治

良

竹 沢 岸  $\equiv$ 良

上

上

九〇

江

極上上吉 自由自在に妙を得し満干の玉 竹本政太夫

外記

木上上吉 豐竹駒太夫

肥前

人の及びのないもの竜の玉

大上上吉 竹本錦太夫 尊く言ひはやす宇賀のみ玉 外

上上吉 竹本染太 夫 外

世界に光りを顕す夜光の玉

上上吉 竹本土佐太夫 外

上上吉 竹本友太夫 土佐

世に沢山に有まじ獅子の玉

誰が見ても愛するさんごの玉」(+」。) 竹本志賀太夫

角くむ声 終にわ名を得しへんくわが玉

上手のひゞきに聞へるこたま

上上宣

竹本音太夫

土

竹本住太夫 外

調法は白かねの小玉

上上書

豐竹出雲太夫 肥

上上曾

上上 豐竹加賀太夫 肥

いつ聞ても心のゆらく玉

きれいにすき通る目鏡の玉

上上宣 豐竹須广太夫 肥

とんだ事だと言。立る人玉

上。

竹本淀太夫

土

愛有てにぎやかな手玉」(+ニロヤ)

竹本文太夫 外

上上。

取りつくろわすきれいにしら玉 竹本常太夫 外

上上

誰も面白しと引長縄の玉 九一

上上 当るとざゞめく風の玉 竹 本 析 太 夫 土 上 豊 竹 竹 本 和 梅 太 太

上上 やさしく聞へる女中の文玉 豊竹伊佐太夫 肥

上上 出世には
ぢき出す
そろばんの
玉 竹本絹太 夫

土

上上 竹本三根太夫 外

ゑり出して<br />
遣ふ数の玉

上上 竹本伊久太夫 士

上上

竹 竹本 本 佐 家 賀 太 太 夫 夫

ŀ

年明て若やぐあら玉」(+ニゥ)

·豊竹理喜太夫

上

肥

豊 竹新太 夫

よく人の知つたお杉お玉

۲ ۲

> 上 上 上 上 竹本 豊竹

伊

関

太

夫

۲

志

津

太

夫

Ł

竹 竹本八十 本 頼 太 太 夫 夫 ۲ ١

豊 竹 勝 太 夫 ۲

上

上

竹

本

佐

太

夫

۲

思ひ付いろく~とある年玉」(+三+) 竹 本 妻 太 夫 ŀ

上

上

竹本

鳴戸

太

夫

۲

味 線 之 部

 $\equiv$ 

九二

夫

١

夫

۲

上上書色はたぐひなし紫竹 沢 沢 文 名 藏 八 外 肥

野 沢文五 良

土

上

竹

沢

平

治

良

Ł

上

野

沢

喜

良

ŀ

上

野

沢

文

 $\equiv$ 

良

۲

上

竹 沢

鬼

太

良

۲

あたりはきびしい鑓の竹

自由に取まわす舟のさほ竹

竹 沢 和 七 肥

上上書

手の内にうまみ有る釣の竿竹

上土 沢 文 <u>=</u> 外

じんじやうに揃ふき豊後竹

上上言 野 沢 冨 八 土

鶴 沢 園 治  $\pm$  つまさきのきいたちやせんの竹

諸人につを引せるきせるのらう竹」(+ミゥ)

上上 沢 叉 吉 外

角

< ts

挡

木

上

村 文 四 良

۲

沢 金 吾 ŀ

上

野

八 九三

上

野

沢

伊

曾

上

野

沢

冨

Ξ

郎

۲

上

野

沢

竹

上

竹 沢 富 藏

۲

上

沢 喜 四 良 ۲

Ł

沢 鬼 七

上

源 治 ۴

净瑠璃評判記集成 上

上 竹 沢 重 藏 ۲

助

۲

情出したまへいまた青竹」(+四々)

蔵 外

大上上吉

大

上

野

沢

利

八

۲

Ŀ

竹

沢

紋

=

良

ŀ

上

竹沢三五

西 藤

よわみを助けるつへ竹

上吉 竹本左 膳

豐竹肥

前

椽

みいりのよい千箱の玉

後

椽

豐竹丹

上 竹本伊勢太夫 古キを尊ぶ生身玉

しあふせて悦ぶすくい玉

東都軒 」(+四2)

浪花

九四

# 淨瑠璃評判記集成 解 説

(武) では、 (元) では、 (

山城少掾本と同じものや別の新しい評判記などの所在がぼつぼり、山城少掾本と同じものや別の新しい評判記などの所在がぼつぼは・倉田喜弘両氏が透写本を謄写印刷して同好者の便宜に供された雄・倉田喜弘両氏が透写本を謄写印刷して同好者の便宜に供されたなとまってくると、容易に集まるものではない。 そこで、 武 田 俊本であるから、一冊や二冊ぐらいなら、時には見当るが、十五冊もまとまってくると、容易に集まるものではない。 そこで、 武 田 俊本であるから、一冊や二冊ぐらいなら、時には見当るが、十五冊もように認識させられた何であったことを、今更の集に払われた御努力がなみなみなめない。

ことを断っておく。
な、多少の不安を抱きながらも、透写本を使用せざるを得なかった、ののの不安を抱きながらも、透写本を使用せざるを得なかったに収めた翻刻は原本によるのを建前として、止むを得ない場合にのかかる経過をたどってこの度活字翻刻する運びとなったが、ここ

# 曲 猿 口 轡 写本 延享三年成稿

転写した祐田ノートにより、横山ノートを参照した。 「操評判篆轡」(『人形芝居の研究』所収)によると、延享三年二 万閣松太郎氏旧蔵の枕本型の写本が中一のもの。氏が紹介されたと思われる山城少掾氏の写本は石割本と同じ装幀かどうか不明れたと思われる山城少掾氏の写本は石割本と同じ装幀かどうか不明 「操評判篆轡」(『人形芝居の研究』所収)によると、延享三年二 石割松太郎氏旧蔵の枕本型の写本が唯一のもの。氏が紹介された

「参考」機当日「浄瑠璃評判記解説(二)」(「国文学」第六号)江戸四座のみの評判記で、「今昔操年代記」につぐ古いもの。

# 是一曲,浪花,一声,小本延享四年刊。

も延享四年の版行であることは間違いない。

すが、改奏紙で、原題簽を欠く。柱記は丁附のみ。本山城少掾本は改装、改奏紙で、原題簽を欠く。柱記は丁附のみ。本山城少掾本は改装、改表紙で、原題簽を欠く。柱記は丁附のみ。本山城少掾本は改装、改表紙で、原題簽を欠く。柱記は丁附のみ。本山城少掾本は改装、改表紙で、原題簽を欠く。柱記は丁附のみ。本山城少掾本は改装、改表紙で、原題簽を欠く。柱記は丁附のみ。本山城少掾本は改装、改表紙で、原題簽を欠く。柱記は丁附のみ。本

「タタタ 大阪出版書箱目録」の絶板書目の項。〔参考〕「タタホ 南木漫遊拾遺」三の巻(『新群書類従』第二)

九

説

#### 説

#### 波 のうねり鼎 噂 小本 延享四年刊

寸五分。貼り交ぜ帳の形式で一枚づつ貼った十丁本。底本には透写 山城少掾本は改装、改表紙で、 原題簽が欠けている。 縦五寸、横三

横山正の考証によれば、延享四年四月に序文を書き、八月以後に成 本を使用した。

「参考」横山山「浄瑠璃評判記解説色」(『国文学』第七号)

同年末ごろ刊行と推定。

ただし序文及び刊行の時期は「解説②」を一部訂正。

大京 阪 西 東 見 台 小本 宝曆七年仲夏刊

南鷹。和泉屋平兵衛版。山城少掾本は原表紙で題簽は欠けて

兵衛が売出したが、無届のため売買差留めになった。 低本は山城少掾本の透写本を使用した。 る。一部を削除して同年八月に「芸評両面鑑」と改題して和泉屋平いる。縦五寸、横三寸五分。実丁数は三十五丁で丁附は錯雑してい 「参考」「緊急 大阪出版書籍目録」の絶板書目の項。

小本 宝曆十一年初秋刊

春金」。縦四寸六分、横三寸二分。実丁数は十五丁半。 細川景正氏蔵。浪花長堀四ッ橋東都軒の版。原表紙で原題簽「竹の

#### 甡 歌 小本 宝曆十二年正月刊

山城少掾氏旧蔵。天理図書館本は序文の一部分と見立位 附の 部 分

原題簽「新評判蛙歌」。縦三寸六分、 横五寸三分。実丁 巻 は 十 四 (七丁より終丁まで) の抄本。撰者声音斎。山城少掾本は原表紙で

低本は透写本を使用した。

Ţ

判 花 相 小本 宅曆十三年初秋刊

附の部分(八丁より終丁まで)の抄本。浪花東都軒の版。山城少掾 本は原麦紙で原題簽「許判花相撲金」。 縦三寸六分、 横五寸四分。 日比谷図書館加賀文庫蔵。山城少掾氏旧蔵。天理図書館本は見立位

実丁数は十四丁。

芽 小本 室曆十四年三月刊 底本は加賀文庫本を使用し、他の本を参照した。<br />

選者安田氏。浪花東都軒の版。山城少掾本は改装で原題簽欠。縦三 日比谷図書館加賀文庫蔵。山城少掾氏旧蔵。天理図書館本は序文の 一部分と見立位附の部分(七丁より終丁まで)の抄本。

寸六分、横五寸三分。実丁数は十四丁。

記

**♦** 回に分けました。下巻明和以降は来年になります。ご 期 待 下 さ 浄瑠璃評判記の翻刻を学界に送ります。費用のつごうで二

楽屋話を少ししましょう。出版費は月二百円の会費を積み立て

てまかなっています。発行部数は、会員に二冊ずつ配 布する 分

田田 石 訪 多

堀 平 馬 野 鳴

秋

雄

尾

栄

い

人的に寄贈するために買い取る分(C)と、希望者に実費でわか (A)、会として諸方に寄贈する分 (B)、その外に、会員が個

つ分(D)とを見込んで印刷しています。C・Dの収入は次回出

版費に送りこみます。

は東京在住の会員に、資料の採訪撮影や校訂など、何かと協力を はできるだけ全員で分担し、編集委員は廻り持ちにします。今回 出版の計画は毎月の研究例会で合議を重ねてきめて行き、仕事

得ました。今後遠隔の会員からの企画も待望されます。

**<>** 

庭千草写真読む目を休めばや

角田

一郎

**浄瑶璃評判記集成** 演 劇 上 昭和三十四年十二月一日発行

研 究 会

大阪市西淀川区姫里町一ノ三一 替大阪 四 兀 七七七

印刷所

大阪刑務所印刷

部

土津近諏信小奥石 島 潤二郎 正 雄

彦 鳥

寺 ドナルド・キーン 尾

源 丸

美千男

西

祐 山 山 盛 森 向 井

田 嘉 修

本 田 根 とも子

正

= 辰

(五十音順)